
TIME

後藤 能巳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TIME

【Nコード】

N3831W

【作者名】

後藤 能巳

【あらすじ】

歩道で拾った携帯電話。それは”時を止める”装置だった。中学生の橘和人がその携帯電話を使って巻き起こすエピソードの数々。中学生から高校生、大学生へと成長し友情や恋を育んでいく。そして大学生のある日、ついに携帯電話の謎が明らかに…。サッカー、友情、携帯電話、そして恋。まじめで前向きな橘和人の長編、SF、青春、ストーリー。

初めての作品です。つたないストーリー、つたない文章ですが、おおらかな気持ちでぜひお読みください。感想を書いていただける

ととても励みになります！ただし強烈な批判はご勘弁を・・・

第1話

（なんだったんだ、今のは。こんなことが、こんなことがあるなんて。）

たちはなかずと

橘和人は歩道の真ん中に突っ立っていた。目は見開いているが、何も見えていないようだった。左手には携帯電話。口がぼかんとあいている。後ろから来ていた女の子2人が、まるで危ないものを見るかのように、無言のまま追い抜いた。

和人はごくんと唾を飲み込んだ。そして息を大きく吸い込み、ゆっくり「ふうっ」と吐いた。家へは5分ほどで着く。とにかく落ち着いて頭を整理したかった。和人は、携帯電話を握りしめ一目散に走った。

「ワン、ワン、ワン」

玄関脇でクロベエがしつぽを振って出迎えた。クロベエは和人の父が3年前に友人から譲り受けた黒いシェパードで、年齢は5歳だ。「ただいま、クロベエ。今日はお母さんと散歩に行けよ。」

そう言うつとじゃれてくるクロベエを無視して玄関を開けた。

「ただいま。」

「お帰り。走ってきたの？何かあった？」

「別に、何も無いよ」お母さんの問いかけを遮るように、和人は自分の部へと急いだ。

ドアをあけ、鞆を下ろし椅子に座る。

そして左手のこぶしを机の上に置き、そつと手を開いた。

手の上には携帯電話。

その携帯電話をじつと見つめながら、先ほどの鮮烈な出来事を思い返した。

橘和人は、市立緑丘中学の3年生。サッカー部に所属しているが、その日は2学期の期末テストの前日ということで、授業が終わるとすぐに下校した。

「はあ、明日からテストか。」

和人の成績はいつも上位だった。だが、最近は部活でくたくたになり、家での勉強がおろそかになっていた。よほど勉強しないと、クラスで5位以内に入るのはむずかしいだろう。

「よっ、早く帰って猛勉強しようと思ってるな。むだなあがきはやめなさい。」

と言いながらお調子者の園山英が後ろから近寄ってきた。右手にサッカーボールをかかえている。園山英も同じサッカー部の3年生だ。

「部活と勉強の両立？男なら一つのことには打ち込むべきだろ。俺なんか勉強したいのを我慢して寝ても覚めてもサッカー一筋だぜ。」

「いいよな、クラスで最下位が定位置のやつは。それ以上落ちないんだから。」

「なあ和人、30分だけ付き合えよ。パスくらいやんねえと体がなまっちまって熟睡できねえんだ。」

「悪いけど、俺まじで追い詰められてんのよ。へたすりゃ徹夜なんだから。」

「ちえっ、つまんねえの。今日から2日間パス五郎と練習か。」

パス五郎は英の家の塀に描いた絵で、緑丘中学校サッカー部のユニフォームを着ている。キャプテン翼の日向小次郎がモデルだが、あまりにも似ていないのでパス五郎と名づけた。英と和人の共同作だ。英は暇なときはいつもパス五郎とパスの練習をしていた。

「じゃあな、勉強しすぎて熱出すなよ。熱出して学校休んだら最下位になるぞ。」

「へえ、やさしいじゃん。」

「最下位はおれのポジションと決まっているの。おれのポジションを脅かすやつは、何人たりとも許さねえ。じゃあな。」

英は笑いながら前川サイクリングと書かれた店の角を左へ曲った。和人の家はそこを曲がらずに横断歩道を渡って行った1キロ程先にある。

「じゃあ。」和人は英の後ろ姿に声をかけた。そして横断歩道を渡りしばらく歩いた。

すると、10メートル程前の歩道で何かがきらりと光った。

近づいてみると、それは見たことのないタイプの使い古したような携帯電話だった。

和人はそれを拾ってみた。

（めんどろだな、交番はちよつと遠いし、かといってここに置いておくわけにもいかないし・・・）

和人は迷い、何気なくその携帯電話を開いた。

液晶画面は電池とアンテナのマーク、その下に日付と時刻が表示されているだけの極めてノーマルなものだった。

（あれ、これは何だ？）数字の「0」のボタンの下に、四角く真つ赤なボタンがあった。

ボタンの表面には黒い文字で「STOP」と書かれている。

和人はその文字にちよつとした違和感を感じた。

そもそも赤い色に黒の文字なんて読みにくい。

その他のボタンは白地に黒で表示されているのに、なぜこのボタンだけ読みにくくしたのか。

その文字をじつと見つめる和人の目が大きく見開いた。

よく注意してみないと気付かないのだが、その「STOP」という文字はボタンの少し左側に寄っていた。しかも他の文字と比べて少し太いような気がする。

和人は何気なくそのボタンを押してみた。

しかし液晶画面は何も変化が起きなかった。さらに3回押しても

変化はなかった。

（何かの操作をした時に、それを取り消すためのボタンだろうか。）
そう思いながらも一度そのボタンを押した。

その時どこからか救急車のサイレンが聞こえてきて、和人はボタンを押したまま顔をあげた。

左手の遠くで聞こえてきたようだったが、3秒くらいするとサイレン音がピタツと消えた。

しかも――

サイレン音だけではなく、すべての音が消えたように急に静まり返ったのだ。

何が起きたのか。

和人は手に持っていた携帯電話に目を移した。

なんと液晶の画面が眩いばかりに白く光っている！

そしてその画面の中に、赤い文字でこう表示されていた。

「Time must stop!」

（「時間よ、止まれ！」ってどこか。本当にそんなことが起きればいいけどな。）そう思いながら和人はふと道路側を見た。

すると……

横を通過しようとしていたはずの車が、止まっている。

運転手は前方を見つめてピクリとも動かない。

次に後ろを振り向いた。

20メートルほど後ろを歩いている女の子2人が、不自然に止まっている。片足は地面から浮き、少し前かがみに、そして顔はお互いに見合わして一人の口は横にあいている。それはまるで、話をしながら歩いている二人の体が、突然固まったかのようにだった。

（止まっている。

確かに止まっている。

時間が…止まっている！）

和人は恐ろしくなり、すぐに携帯電話のSTOPボタンをもう一度押した。

すると、・・・時が、動きだした。

第2話

「止まった・・・、よなあ」和人は自分で自分に話しかけた。
「夢じゃない・・・、よなあ」右手のこぶしで軽く太ももを叩いてみた。

少し痛い。確かに夢じゃないことがわかった。

和人はもう一度、ふうーっと大きく息を吐いた。

（やってみるか、でももし、もしもだ、さっきみたいに時間が止まったとして、その後この携帯が壊れたりしたらどうなるんだろう。）

和人は右手の人差し指で左の腕の外側にある3センチほどの古傷を触っていた。考え事をするときの和人の癖だ。

（止まった時の中で一生を終えるんだろうか、誰とも話すことなく・・・。でも待てよ、この携帯の電池が切れたら、そうしたらまた時間が動き出すんじゃないだろうか。）

和人は5秒ほど目を閉じた。

確信はまったくなかった。でも、あれこれ迷っていても永久に答えは出ない。それに何より、和人はこの興奮を抑えきれなかった。テレビや映画の中だけと思っていたSFの世界が、すぐ目の前にある。

和人は恐る恐る「STOP」ボタンを長押ししてみた。

すると、先ほどと同じように液晶の画面が白く眩しく光った。

雑音が消えた。周りを見渡した。部屋の風景は何も変わらない。

当然だ、自分以外に動くものが何もないのだから。

（どうだろう、時は止まったんだろうか。）

和人は息を殺して立ち上がり、窓の外を見てみた。

窓の下の道は誰も通っていないかった。

（何も音がしない。時が止まっている証拠なのかな。）

和人は緊張を沈めるように、ふうつと息を吐いた。

何気なく電柱を見た和人の体が、固まった。

カラスが宙に浮いている！羽ばたいて飛んでいるのではなく・・・、浮いている。

電線から今まさに飛び立ったという感じで、両方の翼を広げたままで電線から10センチほど上に、止まっている。

（やはり、やっぱり、さつきと同じように時が止まった！）

和人は眼を見開き天井を見上げた。全身に鳥肌が立ち心臓の鼓動がやけに速く動いた。こんな緊張の連続は初めてだった。

（落ち着け、少し落ち着かないと・・・）

和人はまた、大きくふうーと息を吐いて先ほどの椅子に座った。

目の前にシャープペンがあった。それを転がしてみる。コロコロコロと音がした。

次に声を出してみた。小さくそつと「あー」。いつもの声だった。窓を開けてみた。風は、ない。

「このままどこか別の場所に行ってSTOPボタンを押したら、どうなるんだろう。」

和人はつぶやいた。

「体が別の場所に移動するっていうことになるんだろうか、つまり瞬間移動？」

和人は頭の中がどうにかかなりそんな感じがして、STOPボタンをもう一度押した。

時がもどった。

和人は窓の外のカラスを見ていた。カラスはせわしく羽ばたき、どこかへ飛んで行った。

「はあ、…疲れた。」

つぶやいて和人はベッドに横たわり、そつと目を閉じた。この携帯を拾ってから30分も経っていないのに、5・6時間も経ったような感覚だった。

でも実際は言うほど疲れてはいない。疲れるところかますます気持ちが高ぶって来て、頭も冴えてきた。

（すごい。すごすぎる！俺は今日から超能力者だ！）

和人は目を瞑りながら考えた。

（明日クラスのみんなに話したらどうなるだろうか。なかなか信じてくれないだろうな。でも本当に時間が止まることがわかったら、みんなこの携帯を使いたがるだろうな。うわさはたちまち日本中に広まって、俺は毎日テレビ番組に引つ張りだこ。でも待てよ。この携帯の持ち主が現れたら…？うーん、当然返さないといけないな。しかも交番に届けなかったことをみんなが何と言うだろう。）

そこまで考えて急に罪の意識が芽生えてきた。

（これはもしかしたら、とんでもないことをしてしまったのかもしれないぞ。落とした人は今頃これを探しているにちがいない。…そうだ、アドレス帳や電話の履歴で持ち主が誰かわかるかも。）

和人はすぐに調べてみた。しかし不思議なことに何一つ手掛かりとなるものはなかった。アドレス帳にも電話の送受信の履歴にも。

この携帯の電話番号さえ見つけることは出来なかった。

（するとこの携帯は、時を止めるためだけにしか使っていないかったということか。）

「和人、お風呂入れたからいつでも入っていいわよ。」

突然ドアの外からお母さんの声が聞こえてきた。

「勉強がひと段落ついてから入るよ。」

和人はドアを開けられるかと思い、ベッドから椅子へ慌てて移動した。

「そう、頑張つてね。今晚はおいしいおかずを作つとくわ。」
お母さんはそう言つてドアから遠ざかつて行つた。

（そうだ。明日大事なテストだった。時間がもつたいない。）

和人は急に現実に取り戻されて慌てた。

（・・・でも待てよ。）

和人は携帯電話に目を向けた。

（時間がもつたいないだつて？）

ごくんと唾を飲み込む。

（とんでもない、時間はいくらでもあるじゃないか！）

携帯電話を見つめる和人の目が輝いた。

第3話

「おはよう、ああ、お腹すいたー。」

台所の前を通りながら和人は母・由紀枝に言った。

「あら、早いわね。でも夕べあんなに食べたのにお腹すいたなんて、もしかしてあんまり寝てないんじゃないの。」由紀枝がいぶかしげに言った。

「いや、その顔は十分に寝たっていう顔だな。」

居間に座っていた父・正和が顔の前の新聞紙を下げながら、話に割って入った。

「今日からテストなんだろう、どうだ自信の方は？」

「うん、けっこう自信あるよ。」和人がすぐに答えた。

「ほう、めずらしいな。和人がそんなに言うなんて。」

父と母は顔を見合わせた。

「さすが私の息子だわ。私も試験のとき、問題が配られるまでは自信満々だったのよ。」

由紀枝が少しおどけて言った。

和人は一人っ子だ。

普通男の子が中学3年生にもなると、親とあまり話をしなくなりがちだが、和人はそうではなかった。

いつも冗談を言い合える雰囲気がこの家にはあった。

父は小学校の教員で、母は近所のデパートのパート社員だ。

父も母も仕事の話は極力家庭に持ち込まないようにしていたし、この家ではいつも和人を中心に物事が決められていた。

「さあ、今日は純日本風の朝食よ。」お母さんがテーブルに料理を運んできた。

ご飯、漬物、味噌汁、焼き魚、生卵、いつもの朝食だ。

「今日は」じゃなくて、」今日も」だろ。いただきます。」
言うが早いか、和人はががつとご飯を食べ始めた。

「それじゃお父さんも、いただきます。」

お父さんが和人の真似をして言った。

すると「お母さんもいただきます。」と続く。

いつもの橘家の朝の風景だ。

和人は試験の日の朝だというのに、とても落ち着いていた。

昨夜はかなり勉強したし、睡眠も十分とった。

止めた時間は正確にはわからないが、だいたい24時間くらいだと和人は計算していた。

その間は食事もした。

食パン1袋とリンゴ2個だけだった。

パンを焼こうとしてオーブントースターを使おうとしたが、電気が働かないらしく熱が発生しなかった。

止まった時間の中では電気製品は使用できないらしい。

水道の蛇口をひねってみた。やはり水は出てこなかった。

圧力も止まった時間では作用しないということか。

重力は、おそらく自分の体にだけしか働いていないのだろう。

何しろカラスが宙に浮いていたくらいだから。

和人はものすごくお腹がすいていたので、すぐに食事を終えてしまった。

「ごちそうさま。」そう言って、部屋に戻り制服に着替えると、和人はすぐに家を出た。

クロベエのワンワンと吠える声が響いた。

「今日はいつもより早いんじゃないか？」

「きつと学校で試験前に勉強したいんじゃない？」

父と母はそう会話した。

でも和人の狙いはそうではなかった。

昨日携帯電話を拾った場所に、もしかしたら落とし主が来ているんじゃないか。

或いはこの時間にはいなくても、昨日探しに来た痕跡があるんじゃないか。

例えば電柱にでもチラシが貼られているような。そんな気がしていたのだ。

和人はその場所にやってきた。

でも探し物を見つけているような人はいないし、チラシなんかもなかった。

いつもと変わったところは何も感じられなかった。

他人の物を拾って持っているということに、罪の意識がないわけではなかった。

でも試験期間中だけ借りていたいと和人は思っていた。

（試験が終わったら交番に届けよう、その日別の場所で見つけたことにして。）

今ここにきて、誰もいなかったことでその思いはさらに強まった。

和人はそのまま学校へと向かった。

しばらくすると前方に英の姿が見えてきた。

和人は早歩きで歩き、やがて英に追いついた。

「よつ、英。今日はサッカーボール持ってないんだな。」

いつもサッカーボールを手放さない英が、なぜか今日は持っていなかった。

「えっ？」誰が話しかけてきたんだ？とでも言うように、英が振り向いた。

そして2秒間ほど和人を見つめて、今度はほっとしたような感じで「ああ、和人か。」とつぶやいて歩きだした。

「ああ、和人か、じゃないよ。どうしたのお前、何かあったのか？」
「いや、何も無いよ。全然、ほんとに、まったく、何にもございませんぜ、橘の旦那。」

英がにつこり笑って答えた。

「じゃあサッカーボールはどうしたんだよ。」

「サッカーボール？ああ、今日はサッカーボールの日だよ。知らなかった？イギリスでサッカーボールが誕生した記念の日。だから、特別に休ませてるってわけ。」

「はいはい、まあ、どうでもいいや。ところで少しは勉強した？」

「勉強？この天才が家で勉強なんてするわけないじゃん。まっ、平凡な頭脳を持つ君たち庶民にとっちゃあ、羨ましすぎるだろうけど。」

「じゃあ、全くやらなかったのか？実力テストの前日だって言うのに。」和人が呆れたように言った。

すると、英が急に立ち止まった。

「実力テスト？おい、今日は実力テストがあるのか？」

「昨日部活が休みだったのは、何のためだよ。」

「・・・」

「別にいいじゃん。クラスで最下位のポジションは誰にも譲れないんだろ。」

「・・・」

「どうしたんだ？やっぱりちよつとおかしいぞ。」

和人がいぶかしげに顔をしかめた。

「・・・いけねえ、どうやら俺は記憶喪失になったみたいだ。先生わかってくれるかな。」

「きつとわかってくれるよ。」和人が突き放すように言った。

学校に着いた。和人は下駄箱で室内用のシューズに履き替えようとした。

だが、なぜか隣のクラスの英が和人にくっついてくる。

「お前は2組だろ。」と和人は2組の下駄箱の方を指さした。

「おう、そうだった、そうだった。俺は2組だったのね。」

と言いながら英はそちらに向かっていった。

和人は気になって英を見ていた。

英の下駄箱は棚の左、一番下の段だったのだが、英は上の段の方を片っぱしから眺め始めた。

その次に真ん中の段、最後に一番下の段に目をやり、やっと自分の名前を見つけたような素振りをした。

英は和人が自分の方を見ていると気づいていたのだろう。

自分の下駄箱を見つけた後、和人の方を振り向き右手の親指を突き出してニコツと笑った。

「記憶喪失ねえ。ちょっとやりすぎなんじゃないの？」

和人は小さな声でつぶやいた。

第4話

試験が始まった。

携帯電話は、かばんの中にあつた。

でも、試験の最中に時を止めるつもりはなかった。

考えなかったわけではない。

時を止めてカンニングをすれば、クラスで一番の成績をとれる。

でも、和人はそれだけはしたくなかった。

そんなことをしても何の意味もないということがわかっていた。

それに、自分だけが時を止めて十分な勉強時間を得ることができたということだけでも、クラスメイトに対してかなりの後ろめたさを感じていたのだ。

1時間目数学、2時間目英語、昼食をはさんで3時間目社会、4時間目保健体育と、あつという間に1日目の試験が終わった。

和人は十分な手ごたえを感じていた。

今日の4教科だけを考えれば、クラスで5位以内に入っているかもしれない。

そして明日のテストでさらに良い点が取れば、1位だって夢ではない。

（よし、今日も納得がいくまでガンガン勉強しよう。そのための時間は十分にある。）

昨日の和人の心境がうそのようだ。

（そうだ、1時間くらいなら英に付き合っってもいいな。）

和人は隣のクラス（2組）の英を探した。

2組は和人のクラスの1組よりも3分程先に下校していた。

（たぶんすぐに追いつけるだろう。）

和人は英に追いつこうと急いだ。

十数人追い越し、やがて前方に英の姿が見えてきた。
英と同じ2組で和人も仲間がいい前川徹也がいつしよだ。

「よつ英、記憶は戻ったか？」

和人が追いついたと同時に話しかけた。

「ん、ああ、だんだん思い出してきたよ。」

英が笑顔で答えた。

「記憶って、何の事？」

徹也が不思議そうに尋ねた。

「今朝、英のやつ自分の下駄箱がどこなのか覚えてないっていうんだよ。」

「なに、もうボケの兆候が出てきたの？英は人の何倍も頭使わないもんな。」

「余計な御世話だ。」

英が徹也の顔の前にこぶしを突きつけて言った。

「ところで英、今日なら1時間くらい付き合ってもいいぞ。」

「何を？」

「サッカーに決まってるじゃないか。」

「ああ、サッカーか。でも明日も試験があるしな。」

和人と徹也が顔を見合わせた。

「まさか英、帰って勉強するつもりじゃないだろうな。」と徹也。

「そりゃあ俺だって試験の前日ぐらい勉強するさ。」

和人と徹也はまた顔を見合わせた。

「ほら徹也、やっぱりおかしいだろう。」

「絶対におかしい。英、熱でもあるんじゃないか。それとも俺は夢を見ているのか。」

「大げさだよ。とにかく、俺は帰って勉強すんの。じゃあな。」

英は二人に向かって軽く手を挙げると、前川サイクリング店の角を左に曲がった。

和人は立ち止まり徹也に向かって「どう思う？」と訊いた。

「そうだな。」

徹也はちらつと空を見上げて、

「明日は雨だな。」

にっこり笑い「じゃあ。」と、前川サイクリング店へ入って行った。
そこが徹也の家だった。

「じゃあな。」和人は、横断歩道を渡り始めた。

（そうだ、何か食べ物を買っておいた方がいいな。）

そう思いつくと、帰り道の途中にあるコンビニエンスストアに入り、菓子パンとジュースを買った。

第5話

家に着くと、和人はすぐに携帯電話をかばんから取り出した。

（今日も頼むぜ、ケータイ君）

携帯電話のSTOPボタンを押そうとしたその時、和人は大事なことに気がついた。

電池表示が3分の2に減っていたのだ。

（そうだ、お父さんの携帯の充電器を借りましょう。この機種に合ってくればいいんだけど。）

母・由紀枝はまだデパートの勤務から帰っていなかった。

週に3度は夕方の勤務になっていて今日はその「遅出」の日だったのだ。

父・正和の帰りはいつも7時頃だ。

和人は居間にある正和の充電器を自分の部屋に持ってきて携帯電話に差し込もうとした。

だが、残念なことにその充電器の差し込み口は若干大きくて合わなかった。

（困ったな、どれくらいもつんだろう。あと1日だけもってくればいいんだが。）

和人が最も恐れたのは、時間を止めた後で電池が切れてしまうことだった。

時間を「再起動」することができなければ、和人は止まった時間の中で、誰とも会話することなく一人寂しく死んでいくことになるかもしれない。

（まてよ、昨日は3回も時間を止めた。しかも3回目はかなり長かったはずだ。おそらく1日分くらいの時間。それでも電池表示が3分の1しか減っていないということは、あと1回くらいの使用は十分大丈夫だろう。電池表示を見て、3分の1になったら「再起動」

すればいいんだし。」

和人は決心した。

そして携帯電話をにらみつけるようにして、STOPボタンを――押した。

携帯の画面が目がくらむような白い光に包まれ、その中に「Time must stop!」という赤い文字が浮かんた。

そして――。

和人は机の上の目覚まし時計を見た。

秒針が止まっている。

時間は確かに止まったようだった。

（電池の表示は？）

はっとして目覚まし時計から携帯電話へ目を移した。

「はあ……」和人の口から安どの声が漏れた。

電池表示は3分の2のままだった。

「さて、しっかり勉強するぞ！」

和人は思わず声を出した。

第6話

「ふう、これで何とかいけるかな。」

和人は椅子に座ったまま大きく伸びをした。

携帯の電池は、3分の1に減っていた。

電池が切れる前に再起動しなければならぬ。

電池が切れたらどうなるのか、それはわからなかったが、試してみるには余りにリスクが大きかった。

和人はSTOPボタンを押した。

――時が再起動した。

夕食までは少し時間がある。

和人はクロベエを散歩に連れていくことにした。

和人の姿が見えるとクロベエは、ワンワンと吠えてはしゃぎまわった。

「クロベエ、お座り。」

クロベエはハッハッと荒い息を吐きながら、きちんと「お座り」をしてリードをつけてもらった。

「よし。」という和人の声で、クロベエが駆けだした。

和人はクロベエに引張られるようにして、軽く走った。

散歩のコースはいつも決まっている。

車の通りが少ない道を約30分かけて歩く。

10分ほど行くと、柴犬のような栗色の小さい犬を連れた女の子が、前方からこちらへ向かってきた。

和人はその女の子を知っていた。

1学年下でバスケット部の月野という苗字の子だった。

いつも明るく愛嬌のある子で、2年生はもとより3年の男子の間で

も可愛いと評判の女の子だ。その女の子との距離が10mにまで近くなった。

すると、その柴犬らしき犬が、クロベエに向かって吠えだした。

クロベエも少し止まって身構えたが、飼い主が柴犬を引き寄せているのを見て、安心したのだろう、前方を向きゆつくりと歩き出した。「だめよ太郎、だめ。」

月野という女の子が必死でなだめるが、吠える声はますます激しくなってくる。

ちょうどすれ違う瞬間、和人と月野の目が合った。

月野は和人を見て、申し訳なさそうに軽く会釈をした。

和人も会釈を返す。

と、その瞬間、

「きゃっ！」

月野が短い悲鳴を漏らした。

手から紐が離れ、太郎という犬がクロベエに向かってきたのだ。

クロベエは素早く身構え、「ぐううう」と低く吠えて威嚇した。

太郎という犬は吠えながら、クロベエの1メートル程前を、跳ねたり飛びつきそうな姿勢をとったりして、右へ左へめまぐるしく動いた。

「大丈夫。クロベエは自分より弱い相手をけがさせたりしないから。」

和人は月野の方に向かって（なるべく目を合わせないようにして）話した。

実は和人はかなりのあがり症で、女の子の顔を見ながら話をするこ

とができなかったのだ。月野は「すみません！」と言いながら犬のひもを捕まえようとしていた。

だが、なかなか捕まえきれない。

「捕まえた！」

月野はようやく引き紐を捕まえて、ぐっとクロベエの方から引き離した。

「本当にすみませんでした。」

「ううん、大丈夫。」

和人は、少しだけ勇気を振り絞り月野の顔を見てみた。

月野はすまなさそうに、ちょっとはにかみながら和人を見ていた。

左のほほにできたえくぼがチャームングで、和人の顔はみるみる真っ赤になった。

「いくぞ、クロベエ。」

和人は急にバツが悪くなって、月野に背を向けて歩きだした。

第7話

翌日の試験も、和人はまずまずの手ごたえを感じていた。

（何とか無事に終わった。それもこれもこの携帯のおかげだ。）

和人は鞆の中に、携帯電話を入れて来ていた。

できれば自分のものにしたかった。

だが、この携帯を落とした人の気持ちを考えると、それはどうしてもできなかった。

和人は授業が終わったらそれを交番に届けるつもりでいた。

ホームルームが終わり、下駄箱に来てみるとちょうど英が靴に履き替えるところだった。

「よう英、今日から部活だな。」

「そうだな…、久しぶりの部活だ。」

英は感慨深げな感じで答えた。

ああ、やっと部活が始まった。長かったあー！　こんな感じの答えが返ってくると思っていた和人はちよつと戸惑った。

「あ、俺ちよつと部活の前に行くところがあるんだ。先に行つてて。」

和人は英にそう言うつと校門の方に向けて歩きだした。

最近急に英の様子がおかしくなった。何か悩みでもあるんだろうか。

（後で直接本人に聞いてみよう。）

校門を出て、交番を目指した。交番は10分ほど歩かなければならない。

話す内容はじっくり考えて決めていた。

それを再度確認しながら歩く。

こう訊ねられたらこう答えて、さらにこう訊ねられたらこう答えよう。

そんなふうを考えながら歩くと、あつという間に交番についた。和人は南町交番と書かれた看板が、いつになく物々しく感じた。交番に入るのは初めてだった。

一人の若い警察官が、椅子に座ってパソコンを操作していた。

「あの、すみません。」

和人は交番に入るなりそう切り出した。

「今朝、歩道でこの携帯を拾ったんですが……。」

若い警察官は元気なきはきはした声で答えた。

「ああ、拾得物ですね。んーと、拾った時の状況を教えてもらえますか？あつその前にここに座って。」

警察官は和人を椅子に座るように促し、書類を出した。

「まず時間だけ……。」

和人は聞かれるままに時間、場所、その時の状況、自分の住所、氏名など、準備していた答えを述べた。

「だいたいわかりました。携帯電話の場合には、落とし主が警察に届け出る場合が多いから、たぶんこれも届け出がされるでしょう。もしかしたらもう出ているかもしれない。そうだ、ちょっと待って。」

警察官は、どこかへ電話し始めた。

「もしもし、こちら南町交番から橋田です。ええ、……はい、実は携帯電話の拾得物がありましたので、そちらに届け出はなかったでしょうか。今朝拾ったそうです。……ああ、はい、そうですか、わかりました。一応書類をFAXします。それでは失礼します。」

ガチャツと電話を切った後、警察官が、

「まだ本署にも届け出はされてないらしい。まあ、すぐに落とし主がわかるだろう。届けてくれてありがとう。」

そう言って警察官は立ち上がった。

それはもう帰っていいということを、意味していた。だが和人は気になっていたことを尋ねた。

「落とし主が現われなかったらどうなるんですか。」

橋田という警察官はちよつとびっくりしたようなしぐさを見せたが、冷静に答えた。

「そうだな、通常の拾得物の場合、拾ってから6ヶ月を過ぎても落とし主が現われなかったら、拾った人のものになるんだけど、携帯電話の場合には個人情報が含まれているし、電話会社との契約がからんでくるから、そうはいかないかもしれないな。」

「じゃあもし、この携帯にそういう個人情報がなく、契約もされていなかったらどうですか？」

和人がくいさがつた。

「確かにその場合には、君のものになるだろうけど、君、使ってたの？」

警察官がいぶかしげに答えた。

「い、いえ、使ってません。それじゃ失礼します。」

和人はそう言う足早に交番を出て行った。

第8話

「ファイト、ファイト！」

1年生の元気のいい掛け声がグラウンドにこだましていた。

和人がグラウンドに着いたのは、練習開始から20分ほど過ぎた頃だった。

「すみません先生、落し物を交番に届けてきたものですから。」

サッカー部顧問の楠田はそんなことはどうでもいいというような顔で、

「わかった。急いでアップを済ませろ。すぐにミニゲームをやるぞ。」

と言った。

楠田は和人のクラスの担任でもある。数学の教師だ。

教師3年目の若手でサッカーの経験はなかったが、とにかく熱い。その持前の情熱で、指導力はこの2年半で各段に進歩していた。

3年生の和人にとっては、中学生最後の大会“県西部地区対抗戦”が1ヶ月後に迫っていた。

県大会や全国大会出場をかけるような大きな大会ではなかったが、県西部地区中学校18校の

威信をかけた大会だった。

サッカー、野球、バスケット（男女）、バレーボール（男女）、卓球（男女）の5種球技の総合

点で、優勝校が決まる。

当然その8つのクラブは、学校全体の注目の的で、否が応でも練習に身った。

楠田は全部員をA B C Dの4チームに分け、総当たりの15分ミニゲームをさせた。

和人はBチーム、英はCチームに決まった。

「おいおい、Bチーム反則じゃねえの？揃いすぎだよ。」

たまたまBチームに主力が集まったため、他のチームから不満の声が出た。

「悪いな、今日は全部勝たせてもらっよ。」

キャプテンでフォワードの清水が笑いながら言った。

ゲームが始まった。

Bチームはやはり強かった。

3 - 0、4 - 1で勝ち、後は英のいるCチームとの対戦を残すのみだ。

対するCチームは意外な強さを見せていた。

5 - 3、6 - 3とこちらも2勝。

特に英の動きがかなり切れていた。

「いいか、英を楽にプレーさせたらだめだ。今日のあいつは何かが乗り移っているぞ。」

清水の声に、和人は笑いながらうなずいた。

「俺ががんばるプレッシャーかけてやるよ。そろそろ英の体力も切れかけるころだしな。」

英はテクニシャン肌だったが、すぐに疲れるという欠点があった。案の定、センターラインに並んだ英の顔は気だるそうだった。

「ちょっと飛ばしすぎたな英、体力は肝心のゲームにとっとなきや。」

和人が余裕っぽく言った。

「笑ってられるのも今のうちだ。俺らが勝ったらコーラおごれよ。」
英が肩で息をしながら返した。

「いいよ。でも負けたらどうする？」

「逆にコーラおごってやるよ。」

「その言葉忘れるな。」

ピーッ。ゲーム開始の笛が鳴った。

第9話

Bチームは2年生ながらチームの要、トップ下の松永がゲームを組み立てた。

ゴールキーパーも2年生で、185センチの長身、金井。ディフェンスで攻撃にも参加するリベロの和人。

そしてキャプテン清水のほか1年生が3人いた。

総合力では、明らかにCチームに勝っていたし、最初の5分間はほとんどボールを支配していた。

英はというと、なんとかパスカットしようと走り回っていたが、Bチームに思うようにボールを回され、荒い息を吐いている。そしてついに清水のボレーシュートが決まった。

「ようし、この調子であと2点取るぞ。」

「清水さん、ハットトリック狙ってください。どんどんパス出しますから。」

松永の声に、すぐに英が反応した。

「おい松永、調子に乗るなよ。ゲームはこれからだ。」

英はそう言つと、Cチームのメンバーに何やら指示をし始めた。

「ポジションを変えるぞ。おれがセンターバックをやる。みんなはおれがボールを持ったらずきに攻撃に切り替えてくれ。加藤はもつと左に寄つて、勝本は……。」

それを聞いて清水が和人に耳打ちした。

「おいおい、向こうは英がディフェンスをやるらしいぞ。かなり走っていたからな、疲れたんだ。こりゃあますます点が入りそうだ。」

「でも英がディフェンスやるつてのはめずらしいな。何か考えがあるのかも。」

「ないって、ほら、ガンガン攻めるぞ。」

清水はそう言つとキックオフのボールにプレッシャーをかけに行つ

た。

相手のパスが英に渡る。

「森田、走れ！」

英は相手ゴールに向かってボールを強く蹴った。

3年生で俊足の森田が、ボールに追いついた。

和人がマークする。

「勝本、フォローだ。加藤はもっと右に。」

英がてきばきと指示すると、Cチームのボールがつながり出した。

「今だ、来い。」

英がボールを持った選手と交差するように走ってきてパスをもらった。

スクリーンプレーだ。

英に和人が詰める。

1対1。

英がフェイントをかけてきた。

ボールをまたぐ、1回、もう1回。

和人はついていくのがやっとだった。

そして英が左にけり出し和人も反応した。

だが、英はボールと一緒に和人の右を抜けて行った。

――鮮やかなフェイント。

完全に置き去りにされた和人の目に、英がキーパーをかわしシュートを決める姿が映った。

（何だ今のフェイントは！こんなの今まで見たことがないぞ。）

和人は悔しいというよりあつけにとられていた。

そして思わず「すげえ…」とつぶやいていた。

「やられたな和人、次は止めてくれよ。」

清水が駆け寄ってきて言った。

「いや、無理だ。俺一人では止められない。それにあいつ…。」

「大丈夫だつて、それにもう英にフリーで持たせないよ。」
清水はそういうとボールをつかみセンターサークルにかけて行つた（そうじゃない。フェイントは確かにすばらしかったけど、それに加えて状況判断がすごいじゃないか。）
和人はそう思ったが、口には出さなかった。
この後のプレーで英がそれを皆に思い知らせるにちがいないと思つていた。

しかし、和人の考えは当たらなかつた。
英の足が両足ともつり始めたのだ。

あつけなく勝負は決した。

大黒柱を亡くしたCチームは、次々に得点を許してしまった。
終わつてみれば5対1。

清水が3点、松永が1点、そして和人も1点入れた。

「ま、ほかのチームにはちよつと気の毒だったな。俺らが強すぎた。」

清水は誇らしげだった。

「ちえつ、俺の足がづらなかつたらゲームはわからなかつたさ。」

「足がつるつてことは、鍛え方が足りないのだよ、園山君。それも実力のうちつてこと。」

「はいはい。」

英はちよつとムツとした顔をしたが、言われていることは当たつていたので、それ以上返さなかつた。

和人はその様子を見て笑つていた。

もちろんゲームに勝つたから気分は良かった。

でも、それよりももっと嬉しいことがあったので、顔が自然とほころんできたのだ。

その嬉しいことは、チームに最も必要な選手――司令塔”の誕生だった。

第10話

「英、ちゃんとコーラおごれよ。」

「わかつてるよ、かつお節に二言はない。」

「えっ？お前かつお節なの？ていうかそれを言うなら武士だろ、ただの武士。」

サッカー部の部室で、練習着から制服に着替え中の和人と英の会話だ。

「でも英、今日のゲームすごかったな。」

「ああすごかったよ、お前のロングシュート。」

「そうじゃないよ、とぼけるな。体のキレ、フェイント、視野の広さ、たった2日間ですればあんなに進化するんだ。楠田なんてノートを取り出してポジション組みなおしてたぞ。たぶん松永をサイドに移動して英がトップ下に入るんじゃないか。」

「ポジションはどこでもいいんだけど、うゝん、一言で言うと”目覚めた”ってとこかな。むずかしい言葉でいえば、…なんだっけ。」

「覚醒とか？」

「そう、それぞれ覚醒。和人、お前中学生のくせによくそんな難しい言葉知ってるな。」

「あほらしい。お前だって知ってるじゃんか。」

「ん、…ああ俺も中学生か。なるほどなるほど。」

「何わけわかんねえこといって…。」

「いててて！あ、足、足つつた！」

英がズボンに片足入れたところで大声を出して座り込んだ。

「重症だな、タクシー呼んでやろうか、橘家経由になるけど。」

英の足を延ばしてやりながら和人が言った。

「普通はけが人を先に送り届けてから帰るもんじゃないのか。いいよ、足つつたぐらいでタクシーなんて使ったら親に怒られちまう。」
和人に肩を貸してもらい英が立ち上がった。

「行こうか。」

二人はゆつくりと部室を出た。

「何にやけているんだよ。気持ち悪いぞ和人。」

「県西部地区対抗戦が楽しみだっと思ってたんだ。」

「ああ、県西部か。異様に盛り上がってるな。うちの学校、今年はけっこういいところ行くかもしれないしな。」

「だろう？バスケと卓球が優勝候補らしいから、これに俺達サッカー部がベスト4にでも入れば20年ぶりの総合優勝も夢じゃないぞ。」

「俺たちがベスト4？県大会で2回戦敗退の俺たちがか？むちゃ言うなよ。」

「いや、あり得ないことじゃないぞ。うちは割と個人の力はあると思うんだ。今まではそれがかみ合わなかったただけだ。英が司令塔になって今日みたいな働きをすれば、絶対に強くなる。」

「おいおい、楠田の熱血がついに感染したな。和人ちょっと離れてくれ、俺にまでうつる。」

「ひどいなあ、こっちは真剣なのに。」

少し考えた後、英が言った。

「でも和人、そのもくろみも俺の体力次第だな。今日みたいに足がつったら俺はアウトだ。」

「今日足がつったのは、必要以上に走り回ったからだよ。1試合ならもつさ。」

「いや、走り回ったせいで足がつったんじゃない。和人を抜いた時みたいにさ、頭で考える動きに無理やり足を動かしたから、足に負担がかかりすぎたってこと。」

「どういうこと？」

「つまり、…体力がないってことだ。」

「わかんねえな。じゃ負担かけないようにセーブしたらいいじゃないか。」

「セーブしてたら今日和人は抜けなかったさ。」

和人は理解に苦しんだ。

自分の頭が足に指令を出すのは、足の力の限界の一步手前までだろう。

すると英は今日のゲームで、足の限界を無視して足に指令を出したってことになる。

そんなことができるんだろうか、自分の足なのに。

「和人、お前がやさしいのはわかってるけど、家まで送ってくれなくとも大丈夫だ。」

気がつく和前川サイクリング店の角を左へ曲がっていた。

和人の家はそこを曲がらずに、まっすぐ横断歩道を歩いたずっと先にある。

「いけね、俺の家はあつちか。」

「実はお前の方が疲れてるんじゃないか？体力つけるよ、じゃあな。」

英が笑って手をあげた。

「じゃあ。」

和人も手をあげて笑った。

第11話

サッカー部の練習は、日に日に厳しくなっていた。

土・日曜日は練習試合が組まれ、対戦相手が見つからないときは高校生とも試合をした。

顧問の楠田は、和人の予想通り英をトップ下に決め、他のメンバーとのコンビネーションを色々と試しだした。

そして試せば試すほど、英のポテンシャルが抜きんでいることを、誰もが認めざるを得なかった。

特に実践での動きは、相手チームが目を見張るほどだ。

英のポジションは、これまでは右のウイングだった。

足が速くトリッキーな動きをしていた。

だが、ミスが多かった。

疲れやすいということが、大きな要因だったのかもしれない。

今の英は、自分の体力のなさを最小限の動きでカバーしているように見えた。

さらに周りの選手をうまく使う。

コンビネーションがうまくいかないときは、その選手が納得するまで詳しく説明した。

まさしく”司令塔”。

英の自信あふれる態度と、目を見張るプレーにチームメートは英を一目置くようになった。

それとともに、チームの实力は急上昇した。

これまでは格上と思っていたチームと試合をすると、互角以上に渡り合えるようになった。

サッカー部が生まれ変わったという噂を聞きつけ、練習試合を見に

くる緑丘中の生徒もしだいに増えて行った。
誰もが県西部地区対抗戦の日が来るのを、待ち望んだ。

「英、そろそろあがろうぜ。」

「ああ、和人、先に帰っててくれ。俺はもうちょっと桑田と練習するから。」

桑田は2年生で控えのディフェンダーだ。

その桑田に英は左サイドバックの練習をさせていた。

「ディフェンスの練習だったら、俺もつきあうよ。」

和人が言うと、英は少し顔をしかめて、

「いや、俺一人で十分だ。和人は早く帰って母さんの…。」

「母さんの、何だよ。」

「あ、ほら、おっぱいでもしゃぶってるよ。」

「だれがしゃぶるか、ばか。」

和人はムツとして部屋の方へ歩いて行こうとした。
すると英がすぐに走ってきた。

「すまん和人、冗談だよ。実はさ、昨日俺の母さんに聞いたんだよ。
お前の母さんが具合悪そうにしてたって。」

「えっ？」

「心当たりはないか？俺の母さん急いでたから話しかけなかった
らしいんだけど、とっても具合悪そうにしてたから、病院に行った
方がいいんじゃないかって、昨日言ってたぞ。」

「そうか、あんまり気付かなかったけど、帰ったらお母さんに聞いて
みるよ。」

「そうそう、そういうことで早く帰れよ。じゃあな。」

「あ、ああ、じゃあな。」

和人はちよつと首をひねって不審な表情をしたが、言われるままに
帰って行った。

英は少しの間、和人の後ろ姿をじっと見ていた。

和人は家に着くと、クロベエの散歩に付き合った。

今日母の仕事は遅番ではなかったが、和人が散歩を買って出たのだ。「助かるわ」。毎日でも連れてつていいわよ。」

母はにこにこしながらリードを和人に手渡した。

和人はいつもどおり元気そうな母の顔を見ながら、英の母の話は取り越し苦労だったと思い安心した。

和人がクロベエの散歩を買って出たのは、月野さんとすれ違つかもしれないという期待からだった。

あの日以降、何度かクロベエと散歩したが、月野さんとは1度も会うことはなかった。

（月野さんが散歩コースを変えたんだろうか。それともあの日だけいつもと違うコースを来ていたのだろうか。）

和人は思い切って、散歩コースを変えてみた。

月野さんの家は知らなかったが、住んでいる地区は知っていたので、その地区に向かって歩き出した。

いつも散歩時間はだいたい30分、片道15分が目安だった。

だが、気がつくともう20分もたっていた。

そろそろ帰らないと、親が心配する。

月野さんに会えなかったのは残念だったが、和人は仕方なく来た道を引き返した。

すると50メートルほど前方に、一匹の犬が見えた。

太郎とかいう柴犬にとてもよく似ていた。

やがてその犬は、和人たちの方に向かって吠えだした。

月野さんの姿は見えない。

別の犬だろうか、和人がそう思った時、月野さんがその犬に向かって走って来るのが見えた。

「太郎、太郎ってば、動かないで、そこにいるのよ。」

月野さんは和人たちに気づき、あわてて太郎の綱を捕まえた。そしてそのまま近くの家の門に入った。

和人たちがその門の前に近づいた時も、まだ太郎は吠えていた。太郎は犬小屋につなげられていた。

「こら太郎！吠えたらだめってば。」

月野さんは必死に太郎を叱った。

和人と月野さんの目が合った時、月野さんは、

「すみません、この犬ったら全然私の言うことをきかなくて。」と申し訳なさそうに言った。

和人は、

「いや、…。」

というのがやっとだった。

本当は、もっといろんな話をしたかった。

散歩は毎日しているのか、どの辺りを歩いているのか、犬は何歳になるのか、部活の後できつくないかなど、月野さんと会った時話す想像はしていた。

だが、いざ本人と向き合くと、緊張のあまりそれ以上の言葉がでてこなかった。

和人の顔は真っ赤になっていた。

すぐにいたたまれなくなつて立ち去ろうとすると門の標識が目に入つた。

そこには「月野」と書かれていた。

第12話

「今日、園山さんとお話ししたんだけどね。」

夕食を終え、居間でテレビを見ていた和人の父・正和に、母・由紀枝が話しかけた。

和人は自分の部屋に入っている。

「園山さんって、英君のお母さんかい。」

「そう、その園山さんよ。英君がね、近頃急に雰囲気が変わったんだって。」

「どんなふうに？」

正和が少し関心を持ったのを確認し、由紀枝は正和の横に座った。そしてテレビの音量を少し小さくした。

「それがね、英君今までお父さん、お母さんって呼んでたのが、父さん、母さんって呼ぶようになったんだって。」

「それだけ？」

「他にもね、無邪気に何でも話してくれてたのが、急に口数が少なくなったり、アメリカの歌手のCDを聞いたりするようになったんだって。」

「へえ…、ま、そういう年ごろになってきたんだろうね。」

「まだあるのよ、家で勉強するようになったんですって。」

正和は、何を言ってるんだというふうに、

「勉強くらいするだろう、宿題も出るだろうし。」

「宿題じゃないのよ、高校受験用の勉強なの！」

由紀枝はほら、すごいでしょと言わんばかりに、身を乗り出してきた。

「…それがどうしたんだよ、いいことじゃないか。」

正和はますます取り合わない。

それならばというふうに、由紀枝は今度は声をひそめて話した。
「そしてね、あんまり話をしなくなった英君だけど、何故か私のことについて話したんだって。」

「君のことって何を？」

「和人がね、こう言っただっていうのよ。私が最近元気がないから病院に言っただけ検査をしてほしいんだけど、聞いてくれないって。」

「へえ、そんなことがあったのか？」

「ないわよ。」

由紀枝は口を尖らせて言った。

「でね、だから英君、私が病院に行くように母さんからそれとなく説得してほしいって言っただけだよ。」

「ふん、おかしい話だな。君、体調が悪かったの？」

「体調？…まあ、確かに少し気だるい感じがするんだけど、疲れがたまっているだけだわ。病院に行くほどのことじゃないのよ。」

正和はしばらく考えて、

「それで、和人にはそのこと聞いてみたのかい？」

「いいえ、まだ聞いてないの。聞いてみた方がいいかしら？」

「うん、気になるんだしたら聞いてみればいいさ。でもどうせ聞き間違いとか、何かの誤解だと思うよ。」

「そうね、英君も思春期で情緒不安定なのかもしれないわね。」

そこまで話すと由紀枝は立ち上がり、キッチンへ向かった。

「私が病気？…まさかね。」

由紀枝は小さな声でつぶやき、少し眉をひそめた。

そして気を取り直し食器を洗い始める。

正和もテレビの音量を大きくして、ゆっくりとくつろぎだした。

第13話

いよいよ1週間後に対抗戦が迫った。
組み合わせは既に決まっている。

緑丘中の1回戦の相手は、県大会ベスト4の葉山中――強豪だ。
しかしその後の組み合わせは悪くない。

1回戦さえ勝ち抜けば、決勝まで行ける可能性は十分にあった。

葉山中とはこの1年間対戦したことはなかった。

不安はあったが、葉山中にとっても緑丘中は未知の相手だ。

しかも近年良い成績を残していないので、もしかしたらなめてかかってくるかもしれない。

その心の隙について先制点をとれば十分に勝てるというのが、チームの共通した意見だった。

ディフェンスは和人を中心に安定していたので、練習の中心は攻撃だった。

ただ、英だけはその練習内容に不満を隠せずにいた。

確かにディフェンス力は高いレベルにある。

ディフェンダーはこの一年間不動のメンバーで、オフサイドトラップをかけるタイミングは絶妙だった。

しかし、その不動のメンバーの一人でも欠けたら、自慢の連携は崩れ去るだろう。

英の心配はそこだった。

そうならないためにも、誰が欠場しても大丈夫なように控えのメンバーを入れて練習しておくべきだと、顧問の楠田に何度か進言したが楠田は、それを否定しないものの練習内容を変えようとはしなかった。

英の急激な”進化”で攻撃の幅が格段に広がったため、攻撃の練習

に重点を置くようになっていた。

仕方なく英は練習時間の前と後に、毎日少しずつディフェンスの練習を桑田にさせた。

オフサイドトラップのタイミングは実戦で覚えていくしかないため、対抗戦では使うことはできない。

マークの仕方、他の選手のフォローなど基本的な練習の繰り返しだった。

「へえ、かなりサマになってきたじゃないか、桑田。」

いつものように部活の後に英と特訓していた桑田に向かって、着替えを終えた和人が声をかけた。

「そうですか？ 橘さんに言われると自信がなくなあ。」

「俺だって同じことを最近言ってるぞ。俺の言葉はあてにならねえってことか？」

英が桑田をにらんだ。

「そんなことはないです。ただ、橘さんはディフェンスの要だから、その…。」

「わかってるって、冗談だよ。まじめなところは和人にそっくりだな。」

英が桑田の頭をぼんと叩いて、笑いながら言った。

「でも英、その左サイドバックは澤田のポジションだぞ。頑丈な澤田がけがをするってのはほとんど考えられないけどな。」

「引つ込むのは澤田とは限らないさ。和人がけがをするかもしれない。そうすると和人のところに澤田が入って、澤田のところに桑田が入るってわけだ。」

「ふうん、何だか英って監督みたいになってきたなあ。前はそんなこと考えもしなかったくせに。」

「…おれも成長してるってことよ。よし桑田、今日はここまでだ。」

英が制服に着替えるのを待っていると、前川徹也が部室の前を通りかかった。

「毎日毎日よく練習なんかやってられるな。汗臭いぞ和人。」

「お前こそこんな時間まで何やってたんだよ。」

「俺か？俺は図書室でお勉強だ。」

「なんだ、マンガか。もったいないな、徹也の運動神経なら何やつてもすぐレギュラーになれるのに。」

「スポーツは好きだよ、特に球技は。でも過酷な練習は俺には向いてない。ところでどうだよサッカー部の調子は。」

「うわさは聞いているだろ？葉山中にだって勝ちそうな勢いだ。」

「英がすごいんだってな。聞いたか？あいつこの前の実力テスト、1教科も赤点がないんだぜ。あの英がだぞ。」

「ごほん、という声がして徹也が振り向くと、そこには英がサッカーボールを持って立っていた。」

「あの英がどうしたって？赤点がないくらいで騒ぐなよ。おれは西城に行くつもりだからな。」

「…」

和人と徹也があっけにとられた。

「西城だって？お前自分のことわかってるのか？お前は園山英だぞ。学年で成績ワースト1の！」

徹也が大きな声を出した。

西城とは県立西城高校のことで、県内でも学力がベスト10に入る進学校だ。

英の今の学力では、まず合格することはできない。

「まあ見てろって。」

英が自信満々で言うと、徹也が、

「和人、騙されるなよ。そんな無謀なことするわけないじゃないか。他の誰が西城を受かってても英だけは受かんねえんだから。」

と、ニヤニヤしながら和人に言った。

だが、和人はそうは思っていなかった。

（おそらく英は本当に西城に合格する。）

根拠は全くなかったが、なんとなく和人はそう思いはじめていた。

第14話

それは対抗戦初戦の1日前の出来事だった。

授業がすべて終わった後、和人たちサッカー部は軽めの練習を行っていた。

軽く汗をかくことと、これまでやってきたコンビネーションや、ポジショニングを確認することがその日の狙いだった。

30分ほど過ぎたとき、教頭先生が血相を変えてグラウンドに走ってきた。

「楠田先生、ちょっと。」

言いながら顧問の楠田の方へ寄って行き、何やら話しかけた。

すると、楠田は大きな声で和人を呼んだ。

「橘、こっちへ来い！」

「はい。」

和人が近付くと楠田は言った。

「教頭先生と一緒に、すぐに滝川病院へ行け。お母さんが意識不明の重体だそうだ。」

「えっ……」

「急いで着替えてこい。気をしっかり持つんだぞ。」

「は、はい。」

和人は部室へと走って行き、すぐに着替えて教頭先生と駐車場の方へ行った。

楠田はサッカー部員を集めた。

「実は、橘のお母さんが倒れて病院に運ばれた。病名とかはつきりしたことはわからないが、意識不明の重体だそうだ。私もこれから病院へ行ってみる。」

部員は誰も口を開かず楠田の話を神妙に聞いていた。

「明日の試合だが…、おそらく橘は出られないだろう。橘のポジション、スリーパーの位置には澤田が入れ。左サイドバックは…。」
「先生、そこには桑田がいいと思います。この半月ずっとそのポジションを練習してきましたから。」

英が進言すると、

「そうか、じゃとりあえずそれでいこう。明日の集合時間はわかっているな、校門前に8時だ。清水、後の練習は任せたぞ。」

そう言うのと楠田も駐車場の方へ走って行った。

「橘先輩が出れないのはやばいですよね。」

2年の松永が切り出した。

「いや、まだ出られないと決まったわけじゃない。お母さんの意識が戻るかもしれないしな。」

と清水。

「仮に意識が戻ったとしても、出られないと思う。清水、桑田を入れてちょっとディフェンスの練習を試みようぜ。」

英がそう言うのと、

「冷たいなあ英、お前と和人は親友だろ？」

「親友だけど、どうにもならないじゃないか。それとも試合を欠場するか？」

「欠場するわけないだろ、こんなに練習したのに。わかったよ、まあ最悪のことでも想定しないとな。よし桑田を入れて練習するぞ。」

それから1時間ほどディフェンス中心の練習が行われた。

桑田の動きには、誰もが目をみはった。

実に危なげない動きで、ほとんどミスがなかった。

「すごいじゃないか桑田、これなら十分いけるぞ。」

清水が太鼓判を押した。

「だが、自慢のオフサイドトラップは封印だ。こればかりは練習できなかった。だから明日の試合はたぶん相手に押し込まれる場面

が多いと思うんだ。そこを耐えてカウンターで一気に攻める。少ないチャンスを実際に決めなければならぬから、清水、お前の出来が大きく試合を左右するぞ。」

英が言った。

「任せとけて。ディフェンスの裏を突くのは自信があるんだ。あとは英や松永が俺にドンピシャのラストパスを出せばいいんだ。」
清水は自信満々だ。

「そのラストパスが難しいんですけどね」

松永が困ったような顔をして言うともみんなが笑った。

「よし、今日はここまで。体操して終わろう。」

こうしてその日の練習は終了した。

第15話

教頭先生の運転する車が滝川病院に着いた。

「救急車で運ばれた橘さんはどこにいるんでしょうか。」

教頭先生は受付にまっすぐ走り、すぐに尋ねた。

「ご家族の方でしょうか、こちらへどうぞ。」

受付の女性が和人たちを急ぎ足で案内してくれた。

手術中——という文字がドアの上で光っている。

和人の父がドアの前のソファーに座っていた。

「和人、早かったな。お母さんは今、手術中だ。」

父は立ち上がってそう言った後、ふうーとため息をついた。

「私は、教頭の中山です。どうですか、奥様の容体は？」

教頭先生が頭を下げた。

「教頭先生ですか、ありがとうございます。先ほど看護婦さんに伺ったのですが、家内はどうも脳出血のようです。・・・もともと血圧が高い方だったのですが、まさかこんなことになるなんて・・・。」

「脳出血、ですか。」

「ええ、だからもし助かったとしても、何らかの障害が残る可能性があると言っていました。」

「障害って？」

和人が尋ねた。

「例えば言語障害とか、半身不随とか、・・・脳死とか。」

父は和人の目を見つめて続けた。

「和人、そういうことはな、和人、覚悟しておかねばならないんだよ。」

「・・・。」

和人は父の説明を他人事のように聞いていた。
全く実感がわかなかった。

今日の朝家を出るまで、いつもと同じ母だった。
その母が、突然倒れた。

そして今、意識不明の重体となつて生きるか死ぬかの大手術をして
いるという。

和人には母が死んだり、重度の障害を持ったりするなんて全く考え
られなかった。

やがて楠田が駆け付けた。

隣町に住んでいる叔母（お母さんの姉）夫婦もやってきた。
他の親戚の家は遠いので、すぐには駆け付けられない。

そして3時間がたち、時刻が午後9時を過ぎたころ、「手術中」の
ライトが消えた。

すぐにドアが開き、医師が出てきた。

医師は少しうつむいていた。

父も叔母も何も言わず、医師の言葉を待った。

「残念ですが…」

医師のその一言を聞くや否や、叔母が口を抑えおおう、と声を上げ
た。

「最善は尽くしました。ですが、病院に運ばれた時すでに、かなり
危険な状態でした。病名は、看護婦から聞いていると思いますが、
脳出血です。・・・どうぞ、中へお入りください。」

父がふらふらと手術室へ入った。
続いて叔母が大声で泣きながら、叔父にもたれかかるようにして入
った。

和人は・・・やはり信じられなかった。
あまりにあっけない母の最期。

和人の表情を読み取った楠田は、和人の肩に手を回し、手術室へいざなった。

手術室へ入ると、叔母が母の遺体の前で泣き崩れていた。

父は母の髪を撫でながら静かに立っていた。

母の顔は、まるで眠っているかのようなうだ。

楠田が和人の右手をつかみ、両手を組んでいる母の手の上に乗せた。母の手は温かくはなかったが、冷たくもなかった。

和人は両手で母の手を覆った。

涙は不思議と流れなかった。

取り乱すこともなかった。

母が死んだのに、涙一つ流さない自分は薄情なのだろうかと思っただ。

しばらくすると、叔父は母が死んだことを親戚に知らせるために、公衆電話へと向かった。

叔母は部屋の外のソファに座り、いつまでも泣いていた。

父が楠田にお礼を言い、楠田は帰った。

それから父は和人に、

「お父さんは少し外の空気を吸ってくる。」

と言い、玄関の方へ歩いて行った。

やがて、父と入れ替わるようにして、叔父が戻ってきた。

叔父は缶コーヒーを4本買ってきていて、1本を和人に手渡した。

和人はそのコーヒーをすぐに飲み干し、空き缶入れがある玄関の方へ向かった。

空き缶を捨てようとした瞬間、和人の動きが止まった。

和人の耳に、父の嗚咽が聞こえてきたのだ。

父の姿は見えなかったが、父が玄関の外で口を押さえながら泣いて

いるのがわかった。

その声を聞くうちに、不意に和人の胸が熱くなった。

和人はその場を離れ、トイレへと駆け込んだ。

トイレのドアを閉めたとたんに、涙がどつとあふれ、嗚咽がこみ上げてきた。

ペーパータオルで口を押さえながら、和人は思っ存分に泣いた。

第16話

翌朝早く、母の遺体は病院から10キロほど離れた葬斎場へ移された。

そして午前7時頃には、祖父母（母の両親）と叔父（母の弟）が関西からいち早く駆け付けた。

叔父が運転する車で夜中に出発して、やっと着いたのだ。

和人は祖父母が遺体の前で泣き崩れたので、また自分も泣き出しそうになった。

いつも優しすぎるほど優しい祖父母の悲しむ姿は、和人の胸を打った。

それから徐々に人が集まってきた。

人が集まると、和人の気持ちもいくらかまぎれた。

だが、昨夜は一睡もしていなかったので、だんだん頭がボーとした。

その和人の様子に気づいたかのように、叔父が

「和人は全く眠ってへんのやる。隣の部屋は休憩室やからちよつと休んどき。兄さんも休んだ方がええで、先はまだ長いよって。」

と言ってくれた。

父は、自分はまだ大丈夫だからと断ったが、和人には休むように言った。

和人は素直に従い、隣の部屋に行き、やがて深い眠りについた。

「監督、橘先輩のお母さんは大丈夫ですか？」

楠田の姿が見えるなり、2年生の松永が尋ねた。

「おっ、さすがに松永は早いな。他の部員はまだ来ていないか。」
集合時間の20分前だった。

松永は2年生ながら3年生を手玉に取るほどのテクニシャンだ。でも実力を鼻にかけるような嫌味がない。

むしろあまり目立ちたがらず、チームを陰で支えるような謙虚なタイプだった。

いつも集合時間には1番に来ていた。

「残念だが、昨晚亡くなった。かわいそうに、橘はものすごくショックだろうな。」

「そうですね・・・。」

松永は和人の母が容体を回復し、和人がゲームに出られるのではないかと期待していたので、落胆の色を見せた。

その後徐々に部員たちが集まって来たが、皆同じ気持ちだった。

一様に和人の母の容体を尋ね、結果を聞くと顔を曇らせた。

「よし、そろったな。バスに乗り込め。」

楠田の号令でバスに乗り込み、一同は試合会場へと向かった。

「皆聞きなさい。」

試合前に部員全員を集め、楠田が言った。

「今日の試合に負けたら、そこで3年生は引退だ。でも勝てば次の試合がある。確かに葉山中は強敵だ。だが全員が持てる力をすべて出せば勝つ可能性は十分にある。この1回戦、必ず取るぞ。」

「はい！」

全員が声を上げた。

「監督、和人は2回戦に出れますか。」

ふいに英が尋ねた。

「来週はまだ無理だろう。出れるとしたら3回戦からだ。本人の気持ち次第だ。なにしろ今まで体験したことのない大きな出来事だからな。」

少しの時間、皆が黙りこくった。

「みんな・・・。」

清水が意を決して声を発した。

「今日の試合と2回戦、必ず勝とう。」

皆がいつせいに清水を見つめた。

清水は全員の顔を見渡し、続けた。

「そして和人を・・・、和人を迎えに行くぞ。」

「おう！」

氣勢をあげて、選手がグラウンドに飛び出した。

第17話

3年生の部員が制服を着て学校に集まってきた。

和人の母の葬式へ向かうためだ。

葬斎場は学校からは少し遠かったが、顧問の楠田がワゴン車で連れて行ってくれることになっていた。

「おっ、みんな揃っているな。」

楠田は部員より少し遅れてやってきた。

すぐに3年生6人と楠田は車に乗り、葬斎場へと向かった。

「なあ、線香のあげ方って知ってるか？」

「いや、たしか線香じゃなくて粉みたいなのをおでこにつけて燃やすんじゃないか？」

「どうしよう、俺やり方わかんねえよ。」

「俺もだよ、とりあえず俺一番最後な。」

車の中で、部員たちはずっとしゃべりっぱなしだった。

だが、英だけは一言も口をきかず、ずっと窓の外を眺めていた。

和人の母親を知っているのは英だけだったし、英と和人が親友だということとは当然知っていたので、だれも英に気を使い話しかけることはしなかった。

15分ほどで車は着いた。

皆車から降り、神妙な顔つきで楠田を先頭に葬斎場へ入った。

受付で名前を書き奥へ進むと、祭壇の前の親族席に座っていた和人が気づいたらしく、楠田に会釈をした。

楠田も会釈を返し、後ろの方の席へ部員と一緒に座った。

葬式は1時間ほどかった。

それが済むと次は親族が遺体とともに火葬場へと向かう。

すると葬斎場が用意したバスへ乗り込もうとする和人に、英が寄って来た。

「和人、・・・ごめんな。」

英がいきなり謝りだしたので、和人は驚いた。

「ごめんなって、何をだよ。」

「いや、その・・・とにかく早く元気になってくれ。」

英はそう言つと、慌てて仲間のところへ戻つて行つた。

和人は英が何を言いたかつたのか考えた。

そして、昨日の試合の結果が悪かつたのだという答えを導き出した。
（そうか、負けたのか。中学校での俺たちのサッカーは終わったんだな。）

和人はそう思いながら、楠田や部員達に礼をしてバスに乗り込んだ。

「いけね、昨日の試合のこと和人に言いそびれた。」

清水の声で、皆がはつとした。

「そうだった、見事な勝利を報告するつもりだったのに。」

「グラウンドで待つてゐるってこともな。」

走り去つていくバスを見ながら誰もが残念がつた。

葉山中は思っていた通り強かつた。

序盤から葉山中のフォワードが、緑丘中のゴール前に何度も攻め込んで来た。

だが、緑丘中は少しポジションを下げ気味にし、決定的チャンスを与えなかつた。

押せ押せムードの葉山中は、ディフェンダーも次々に攻撃に参加しだした。

（いいぞ、もっと攻めてこい。カウンターの餌食にしてやる。）

英はじつと味方のチャンスが来るのを待つていた。

そしてその時がきた。

前半23分、葉山中のディフェンダーがオーバーラップをして自陣に攻め込んできた。

澤田と桑田が体を張って止めに行く。

ボールを奪い返した瞬間、英から声がかかった。

「桑田、こっちにパスだ。」

桑田がパスを出して、英が受け取った。

英からすぐに攻め上がった松永にパス。

松永は逆サイドの敵ディフェンダーの裏にふわっとしたボールを蹴りこむ。

清水が驚異的なスピードで飛び出しワントラップ、前に出てきたキーパーをかわし、ゴールを決めた。

見事なカウンター攻撃だった。

葉山中は前半のうちに何とか同点にしようと、さらに攻撃を厚くしてきたが、緑丘中の選手たちは、清水以外下げ気味のディフェンスに徹し、なんとかしのいでいた。

そして前半終了間際、葉山中のコーナーキック。

緑丘中はヘディングに強い清水をゴール前に置き、全員ディフェンスの態勢をとった。

誰の目にも緑丘中が前半を1点リードで終了しようと思っているように見えた。

「松永、俺はディフェンスしないぞ。」

「えっ？」

英が松永に耳打ちした。

「俺はこっそり前線に移動する。味方がボールを奪ったらおれの前にボールを蹴りだすように指示してくれ。」

「わかりました。」

英の意図を読み取った松永が、にっこり笑った。

コーナーキックのボールがゴール前に飛んできた。

清水がマークする長身のフォワードに合わせているようだ。

清水が競る。

だが一瞬早く相手の頭がボールを捕らえた。

ボールはワンバウンドしてゴールの左隅へ。

ゴールの左端にいた澤田が反応よく足を延ばす。

ボールはその足に当たり密集している選手たちの頭を越えた。

そのルーズボールに最初に追いついたのは松永だった。

松永はダイレクトにボールを大きく蹴りだす。

英と一人の相手ディフェンダーが追った。

ボールは緑丘中から見て中央よりかなり右に、センターラインから葉山中側コートへ10メートル程の地点に落ちた。

先に追いついたのは英だった。

相手ディフェンダーが行く手を阻む。

1対1。

英がドリブルしながらフェイントをかける。

ボールをまたぐ、1回、2回。

そして和人を抜いた時のフェイント。

次の瞬間、相手ディフェンダーは置き去りにされていた。

独走だった。

キーパーがシュートコースを狭めようと英の方へ飛び出す。

英は冷静にループシュート、ボールは無人のゴールへと吸い込まれた。

そしてここで前半終了のホイッスルが鳴った。

「よく走ったな、英。」

仰向けに倒れ込んで荒い息をついている英に、清水が寄ってきて声をかけた。

「ハーフタイムになって助かったぜ。きついなのって。」

「肩貸そうか、ベンチで監督が待ってる。」

「いいよ、怪我したわけでもないのに。」
英がにっこり微笑んでゆっくりと立ち上がった。

第18話

「みんないいぞ、その調子だ！」

楠田が興奮しながら選手を迎えた。

「園山、見事なカウンター攻撃だったな。まさに『してやったり』という感じだな。」

「でも監督、相手は攻め方を変えてきます。たぶんカウンターはもう使えません。」

言いながら英はグラウンドに寝そべった。

「なあに、相手は2点を取り返しに遮二無二攻めてくるさ。カウンターはさらに有効だ。」

楠田はそう言ったきり、戦術について何も語らなかった。

「園山先輩は、葉山中がどういう攻めをしてくると思いますか。」

松永が小声で聞いてきた。

「さあな、攻め方はわからねえが、俺のマークはきつくなるだろうな。」

「大丈夫ですか？かなり疲れているようですけど。」

「まあ、なんとか持つさ。後半、松永には俺の分まで動いてもらうことになるだろうけどな。」

「俺は大丈夫です。どんどん使ってください。」

「頼りにしてるぜ、先輩。」

英はそう言つと、目を閉じ、時間いっぱいまで休んだ。

ピーッ。後半開始の笛が鳴った。

葉山中はバックラインを前半よりもかなり下げてきた。

明らかにカウンターを警戒した守りだ。

さらに案の定、英には葉山中ミッドフィルダーがガチガチのマンマーク。

実力に勝る葉山中は、緑丘中の攻撃の糸口を切り、確実に勝つ作戦を選んできた。

（ちつ、やはりその手で来たか。）

英は思い切った作戦に出ることにした。

「松永、トップ下に入ってくれ。俺はボランチだ。」

「はい。」

（なるほど守りを強化して、勝負どころで相手のマークを振り切つて反撃に転じるということか。ミニゲームの時の戦法だな。）

松永は英の考えをすぐに理解した。

英がディフェンスに回ったことで、葉山中の攻撃がいくぶん鈍った。しかし緑丘中はいいに相手に得点を許してしまった。

桑田の守備力が弱いことを知り、そこをついてきたのだ。

サイドライン際をドリブルしてきた相手のフォワードが、桑田を振り切り鋭いセンタリングを上げた。

ボールは長身のセンターフォワードにドンピシャだった。

キーパーは一步も動けず、ゴール右隅に決められた。

（ちくしょう、ついに1点入れられたか。それも後半が始まって10分も経っていないというのに……。）

英は中腰になり荒い息をついていた。

（でもここで守りに入ったら、一気にたたみかけられてしまう。ここは勝負だ！）

だが、キックオフのボールを受けた英は、味方にパスをすると、後方に下がってしまった。

「園山、なに下がっているんだ。ここは攻める時だろ。」

楠田が怒鳴る。

その時、葉山中が味方のボールをパスカットした。

そしてまた桑田がいる方のサイドから攻めてきた。

ディフェンスの選手がライン際を駆け上がり、パスを受ける。

桑田が振り切られた。

だが、桑田が抜かれた瞬間、桑田の後ろから英が現れ、ボールを奪った。

「松永！」

英はそう叫んだ後、敵を一人かわし猛然と走りだした。

相手の選手が3人くらい詰めてきたが、近づいてきた松永にパスを出した。

松永はダイレクトで英に壁パス。

さらにパスを受けた英はゴールへ向かって突き進んだ。

松永はいつでもパスを受けられるように英の右側を走っていた。

清水が前線で相手ディフェンスをかき回す。

ボールはハーフラインを5メートル程超えた。

（まだ、清水にはパスが通らない。もう少しゴールに近づかないと……。）

「逆サイドにパスだ！」

松永にパスしながら英が叫んだ。

チーム一の俊足、ウイングの持田がライン際を走っていた。

松永がパスをだす。

「松永フォローに行ってくれ。清水ニアサイドだ。」

そう言いながら英は持田の逆サイドへと走った。

清水がニアサイドに走りこむ。

持田からパスを受けた松永がセンタリングを上げた。

そのボールは清水の頭の上を越えて、フリーの英へ。

胸でワントラップしてシュート。

ボールはサイドネットに突き刺さった。

この1点が葉山中の反撃ムードを一変した。

葉山中は、焦りからミスを連発し、緑丘中に攻め込まれる場面が多くなった。

そして葉山中が意地の1点を取り返したところでゲームが終了した。
「やられたよ。」

葉山中の長身フォワードが英に話しかけてきた。

「お前、園山っていうのか。お前みたいな選手がいるなんて知らなかったぞ。なんで県代表に選ばれなかったんだ。」

「さあ、そんなこと知らねえよ。」

「なあ園山、俺北高に行くんだけど、お前も行くんだろ?」

北高はサッカーの名門で、6年連続全国大会に出場している。

「いや、俺は西城に行く。」

「西城?…そうか、お前頭いいんだな。」

「頭はよくないけど、西城に行かないやならないんだ。西城に行つて北高を倒す。」

「わかった、じゃあ敵だな。高校では負けないぞ。」

「ああ、よろしくな。太刀中舜君。^{たちなかしゅん}」

英は太刀中に背を向けて、味方のベンチに歩いて行った。

(俺の名前、何で知ってるんだ?)

太刀中は不思議そうに英の後ろ姿を見ていた。

第19話

月野さんの家の前を通ると、いつものように太郎が吠え始めた。

「おい太郎、いい加減に俺たちがあやしくないと気づけよな。」
太郎を見下ろしながら、和人はあきれたように話しかけた。

それでもますます吠え方はひどくなるばかりなので、和人とクロベエは足早にそこを遠ざかった。

和人の母が死んで6日目だった。

クロベエとの散歩が和人の唯一の仕事だった。

その日一人と一匹は、いつもより遠出して景色のよい川原へ向かった。

ちようと学校の授業が終わり、生徒たちが帰る時間だったが、その場所なら生徒たちと出会うことはまずなかった。

和人はクロベエのリードを外し、川原の草むらに寝転がった。

空が透き通るほど青く、気持ちの良い風が吹いていた。

クロベエは川原を走り回ったり、川へ入ったりして楽しんだ。

和人は目を閉じて、体中の力を抜いた。

それから20分ほどした時、遠くから犬の吠える声が聞こえた。

（ん？この声は…）

和人が体を起こしその声の方を向くと、月野と太郎の姿が見えた。

すぐにクロベエが和人の方に走り寄ってきた。

月野は和人に気づくと不思議そうに首をかしげた。

「あの、サッカー部は…」

月野が和人に話しかけてきたが、太郎が例のようにけたたましく吠えるので、

「すみません。」

と謝り10メートルほど引き返して、太郎を道のそばの木につない

で戻ってきた。

和人は月野さんが話しかけてくるとは夢にも思っていなかったので、
ときどきしながら見ていた。

「すみません、臆病な犬で誰にでもすぐ吠えて困っているんです。
その犬のようにお利口になってくれるといいんですけど。」

和人に近づきながら、月野がほほ笑んだ。

和人は自分の顔が真っ赤になっていることに気づき、うつむいた。

「あの、サッカー部は1回戦勝ったって聞いたんですけど、今日は
練習なかったんですか。」

「えっ？」

「先輩、サッカー部辞めてないですよ。」

「え、ああ辞めてはいないけど…、この前うちの母親が死んじゃっ
たもんだから…」

月野ははつとして、

「すみません。そんなこととは知らずに…」

と言葉に詰まった。

「いや、いいんだ、気にしないで。でも、サッカー部が1回戦勝っ
ていたなんて知らなかったな。」

和人はなるべく目を合わせないようにしてしゃべっていた。

「松永君がクラス中に自慢していましたよ。このまま優勝しちゃう
んじゃないかって。」

「へえ、松永と同じクラスなのか。でも、つ、月野さんたちの女子
バスケは…」

「はい、私が今ここにいるってことは、負けちゃったってことです。」

「月野の左ほほにえくぼができた。」

「でも惜しかったんですよ、1点差なんですから。悔しくて悔しく
て…。絶対に来年はリベンジしてみせます。」

こぶしを握りしめてそう言うと、月野は太郎の方へ歩きだした。

2・3歩歩いたところで月野が振り返った。

「サッカー部、勝ち進んでくださいね。男子バスケの試合と重ならなかったら応援に行きますから。」

月野はにっこり笑って軽く会釈をし、太郎と歩いて行った。和人はその後ろ姿をずっと見ていた。

月野の方から話しかけてきた。

それなりに会話もできた。

夢のようだった。

体が緊張してガチガチになっていた。

「クロベエ、帰ろうか。」

そう言っただけで和人は大きく背伸びをした。

なんだか久しぶりに力が湧いてくるような感じがした。

第20話

和人はその次の週から学校へ行った。

1時間目が終わりに休み時間になると、3年生のサッカー部員が和人のもとにやってきた。

「驚くなよサッカー部は1回戦の葉山中を3対2で破ったんだぜ！」

「それだけじゃねえぞ、昨日の2回戦は守屋中に4対1で勝ったんだ。」

「次の試合は高浜中だ。あそこも攻めのチームだけどオフサイドトラップが使えればたぶん楽勝だな。」

皆が矢継ぎ早に話した後、英が口を開いた。

「待ってたぞ、和人。」

「サンキュー、でも1回戦で負けたとばかり思っていたよ、英があの時『ごめん』で言ったから。」

「ああ・・・あの『ごめん』は何ていうか・・・その、別の『ごめん』だ。」

「何言ってるんだよ、とにかく和人、今日から練習に出れるんだろ？」

清水が割って入ると、英がほっとした顔をした。

「うん、そのつもりだけど、ちょっと運動不足だからきついだろうな。」

「なあに、もともと和人の運動量はチーム1なんだから、みんなと同レベルの動きに落とせば問題ないさ。」

「そうそう、俺たちの運動量なんて、和人の7割くらいしかないんだから。」

「そう考えれば和人はバケモンだな、今日だけは普通の人間でいてくれよ。」

皆の言葉は優しくかった。

（自分にはこんなに優しい仲間がいる。）

和人はとても幸せな気持ちになった。

「じゃあな和人、部活であおうぜ。」
清水が言った。

「ああ、後で。」

皆を見送りながら和人がほほ笑んだ。

放課後の部活では、和人は久しぶりに気持ちのいい汗をかいた。

「なあ英、もうちょっと遊ばないか。」

練習後に和人が言うと、

「へえ、めずらしいな、和人から誘うなんて。もちろんつきあうぜ。」

辺りは少し暗くなって来ていたが、二人は30分ほどリフティングや1対1をして楽しんだ。

帰り道で和人が言った。

「お父さんがさ、とっても落ち込んでるんだ。本人はそのことを俺に悟られまいと妙に明るくふるまうんだけど、それがまた見てられなくってさ。」

「そうだろうな、とっても仲良しだったからな和人の父さんと母さん。ところで飯はどうしてるんだ？」

「朝はトースト、夜はお父さんが料理の本買ったりして頑張ってるけど、失敗ばかりだな。昼の給食がとってもありがたいよ。」

「そんな事だろうと思った。うちの母さんがさ、今度の土曜日に和人を連れて来いって言うんだ。昼飯をごちそうするってよ。」

「サンキュー、そうだなお言葉に甘えて久しぶりにお前んちに行くとするか。」

「そうしろよ。なんなら晩飯まで食っていくか？」

「いいねえ。そのまま泊まり込んだりしてな。」

二人は顔を見合せて笑った。

「でも・・・。」

急に和人が真顔になって切りだした。

「本当にサッカー部が勝ち抜いててくれて助かったよ。今の俺にサッカーがなかったらほとんど廃人状態だったかもしれない。」

「そうさ、みんな和人が戻ってくるまで負けないって、そりゃあ気合が入りまくってたんだから。」

「・・・決めたよ。」

「何を？」

「俺、高校に行ってもサッカー部に入る。」

「ふうん、俺と同じだな。で、どこの高校に行くんだ？やっぱり修学館か？」

修学館高校は、電車で20分の場所にある県内でも有数の進学校だ。
「前はそう思っていたけど、うちのお父さんどうやら来年転勤らしいんだ。どこの学校に赴任するかわからないから、家の近くの高校を選ぶってことはできないしな。」

「だから？」

「サッカー部が強くて寮があってそこそこのいい学校にしようと思っている。」

「まさか・・・。」

「そう西城高校だ。徹也も受験するって言ってたし、英も行くんだろ？」

「そのつもりだけど・・・、俺の場合はどんなに良くても合格ラインぎりぎりのはずだから、ライバルは一人でも少ない方が・・・。」

「その分勉強教えてやるから、そんな冷たいこと言うなよ。」

和人が英の背中を叩いて笑うと、

「ちえっ、仕方ないな。でも俺がもし西城を落ちたら責任とってもらうからな。」

英も和人を睨んで笑い返した。

第21話

日曜日の朝がきた。

今日の試合に勝てば、ついに決勝進出だ。

この県西部地区対抗戦での緑丘中の成績は、今のところ上出来と言
ってよかった。

バスケット男子、卓球男子、卓球女子、それにサッカー部がベスト
4に勝ち進んでおり、その他の種目ではバレー女子がベスト8にな
っていた。

各競技での採点は優勝20点、準優勝15点、3位13点、4位1
1点、5位8点8位8点となっており、緑丘中は現時点で52点とな
る。

これは参加18校中、堂々3位の成績だった。

1位は県内随一のマンモス校、奥山中の60点で、2位浜里中55
点、4位川原中49点と続く。

「高浜中は県大会予選で負けた相手だな。みんなあの時の悔しさを
思い出せ。うちのチームは確かに強くなっている。だが、向こうも
さらに強くなっているに違いない。おそらく力は五分と五分。実力
が拮抗した試合でものをいうのは何だと思う？」

楠田の問いに選手全員が顔を見合わせた。

「それは絶対に勝つ、という強い思いだ。」

楠田はグラウンドの周りを見渡したあと続けた。

「今日は応援もいっぱい来てくれてるぞ。応援に来てくれたみん
なのためにも、今日は絶対に勝つ。いいか！」

「はい！」

総合優勝の可能性が強まってきたということで、グラウンドの周り
は緑丘中の生徒が大勢応援に来ていた。

高浜中の応援の2倍以上だった。

「先制点をとって相手をビビらせようぜ。」

円陣を組んですぐに清水が言った。

「いいですね。高浜はうちが強くなったことを知らないんじゃないですか。」

「松永、俺たちは1回戦で葉山中に勝ったんだから、高浜はきつと警戒してくるぞ。攻めるのはいいが、ディフェンスもしっかり頼むぜ。」

英がくぎを刺した。

「緊張感のない顔だな、和人。」

清水が少しにやけている和人を冷やかした。

「だって仕方ないだろ、全然負ける気がしないんだから。みんなもそう思わないか。」

皆が顔を見合せて笑った。

「確かにな。じゃあサクツと勝って決勝へ進もうぜ！」

「おう！」

清水の掛け声に呼応し、選手がグラウンドに散った。

キックオフ直後に高浜中の度肝を抜くプレーが起きた。

清水がキックオフのボールを松永へパスし、松永は後方の英にボールを戻す。

そして英は、何と、――シュートした。

ボールは清水の頭上を越えて相手ゴールへ。

前に出ていた相手のキーパーが慌ててゴールの方へ下がる。だが、間に合わなかった。

ボールはゴールのほぼ中央上部に見事に突き刺さった。

両手を突き上げた英に、和人が駆け寄ってハイタッチ。

他のチームメイトが次々に英に飛びついてきた。

グラウンドの周りを取り囲む応援団が大きな歓声を上げた。

開始5秒の出来事だった。

「ちくしょう、涼しい顔をして狙ってやがったのか？」

清水が英の背中をポンと叩いた。

「たまたまキーパーが出ていたからとつさにシュートしたんだ。最初はサイドにはたこうと思っていたんだぜ。」

「何が『ディフェンスもしっかり頼むぜ』ですか。自分は攻める気満々じゃないですか！」

松永が冷やかす。

興奮が冷めないまま、相手のキックオフが始まった。

英はふと和人の方を振り向いた。

すると和人が右手を軽く上げた。

（まかせとけて、ディフェンスは手を抜かないよ。）

英が頷いた。

ゲームは終始緑丘中のペースだった。

緑丘中は前半終了間際に1点、後半にも1点を入れ、3対0で高浜中を下した。

「松永、こんなところにいたのか、監督が探していたぞ。」

ゲーム終了後、和人は、水道の水で右足を冷やしている松永を見つけた。

「はい、すぐに行きます。」

「お前足をどうかしたのか？」

「ちよつと足首を捻挫したみたいです。でも大したことないと思います。」

「そうか、ひどいようだったら監督に言うんだぞ。」

「はい、ありがとうございます。」

和人と松永はみんなのところへ歩き出した。

松永はほんの少しびっこをひいていた。

第22話

試合後の月曜日の朝、緑丘中はざわついていた。

バスケット男子は惜しくも敗れたものの、卓球男女と和人たちサッカー部が決勝にコマを進めたのだ。

現時点での成績は1位奥山中68点、2位緑丘中64点、3位浜里中59点、4位川原中57点と続き5位以下は50点を下回る。

卓球女子とサッカー部の相手は奥山中で、卓球男子の相手は浜里中だ。

つまり緑丘中の残った3チームが優勝すれば、総合優勝の可能性は極めて高いと言える。

昼休み時間に和人と英が話をしていると、バスケット男子のキャプテン鶴田が二人に話しかけてきた。

「よう、橘に園山、プレッシャーに押しつぶされそうになってるんじゃないか？お前たちサッカー部には優勝してもらわないと、何しろ20年ぶりの総合優勝がかかってるんだからな。」

「これはこれは、誰かと思ったら、残り5分でファイブファールをして相手に逆転を許したバスケット部の鶴田君じゃありませんか。」英がからかうと、和人が吹き出した。

「な、なんでそんなことまで知ってるんだ？というよりあれはミスジャッジだからな。本当なら俺たちが決勝に進出したはずなんだ。」実直な鶴田が少しむきになって言った。

「何がプレッシャーに押しつぶされそうだよ、お前たちバスケット部が勝つてりや俺たちの負担はぐっと減ってたのにさ。責任とれよな。」今度は和人が攻撃した。

「ぐっ…、それを言われると…、申し訳ない。」

素直に謝る鶴田をはさんで、和人たちは大笑いした。

「決勝戦は応援に行くから頑張れよ。」

手をあげて去つていこうとする鶴田に英がダメを押した。

「まだわかつてないな。行かせてもらいます、だろ？」

鶴田が振り向き、英にあっかんべーをした。

その日の練習は休みだった。

サッカー部の部室では、和人と英、それに前川徹也がいた。

「暇だなく、そうだボウリングでもやらないか？」

「おつ、それもいいかもね。」

徹也の提案に英が乗ったが、和人はにべもなく断った。

「クロベエを散歩に連れて行かなきゃならないから。」

「あのバカ犬か。一日くらい散歩しなくても大丈夫だろ？鉄也と二人きりでボウリングなんて考えられねえよ。」

「確かにホモかと疑われるぞ。」

「悪いな、散歩のほかにも飯炊いたり掃除したりしなくちゃならないから。」

「それを言われると何も言えないじゃないか。」

英が和人を睨む。

「父子家庭はつらいんだよ。じゃ、そういうことで。」

和人はにっこり笑って部室を出た。

「英、いつそのことクラスの女でも誘うか？」

「クラスの女って誰をだよ？」

「そうだなあ、江本と木村なんてどうだ？あの二人いつも一緒にいるじゃないか。」

「木村はいいけど、江本はちょっとな。それより徹也、あそこを歩いている二人はどうだ？」

徹也は英が指さすほうに目をやった。

「おいおい、バスケ部の2年じゃないか。しかも部活の最中だろ。」

「いや、どうも終わったみたいだぞ。というより部員が集まらなくて練習を休みにしたつてところだな。」

「じゃあ英が声かけてみるよ。」

「いいけど、成功したら俺右側の子と組むぞ。」

「待て、あの子は月野さんじゃないか、2年で一番人気がある子だぞ。」

「へえ、詳しいな。でも付き合ってるやついないんだろ？当たって砕けるだ！」

言うが早いか英は二人の方へ近づき、声をかけた。

「ほんとに行っちゃったよ、今日の英はやけに積極的だな。」

徹也はちよつと首をかしげながら、3人の方へ寄って行った。

第23話

「よし、クリアーだ！」

和人の声に、左サイドバックの澤田がボールを大きく蹴った。

ボールはハーフウェイラインをわずかに越えて奥山中陣地に落ちた。

決勝戦が始まって15分が過ぎていた。

得点は0対0、互角の戦いだ。

応援団の歓声が轟き、グラウンドは異様な熱気に包まれていた。

それというのも、このサッカーの試合で勝った方の学校が総合優勝を獲得することが決まっているからだ。

5種8大会のうちすでに7大会が終了し、残すはこのサッカーの試合のみ。

現時点での成績は、1位奥山中75点、2位緑丘中74点、3位浜里中と川原中64点と続く。

奥山中と緑丘中の生徒たちでグラウンドの周りはぎっしりと埋め尽くされていた。

その観衆の中に、月野がいることを和人は確認していた。

試合中もボールがコートの外に出ると、月野の顔を探した。

月野は2人の友達といっしょに大きな声援を送っていて、和人と目が合うことはなかった。

だが、この大舞台で活躍すれば、月野の気を引くことができるかもしれないと、和人は大きな期待を寄せていた。

「松永の調子が悪いみたいだな、俺たちのサッカーができていない。」

英が和人に近づいてきて小さな声で話した。

「この前の試合で右足を痛めていたんだ。あの様子だとかなり無理

をしてるんじゃないかな。」

「ちっ。」

英が少し顔をしかめた後、松永の方へ寄って行った。

「おい松永、足は大丈夫か？」

「え？あ、はい、大丈夫です。ちよつと踏ん張りが利かないですけど。」

「そうか、でもお前のことだ、かなり無理してるだろ。前半はあと5分で終わる。でもその前に1点取っておきたい。」

「どうするんですか？」

「お前はボールを受けたら、無理せず俺か和人に返せ。そしてお前はゴール前に走って相手をかく乱するんだ。」

「はい。」

「さてと、ハーフタイム前にちよつと無理してみようか。」

英はそう呟き、ふーっと息を吐いた。

大粒の汗が英の額から流れている。

「見てろよ奥山中、超中学級のテクニクを見せてやるぜ。」

英の顔が引き締まった。

奥山中は英へ厳しいマークを付けていた。

そのため英は味方からのパスは受けることがなかなかできない。

自然とボールは松永へ集まる。

だが、右足を負傷している松永は思っような動きができずにいた。

また松永へボールが入る。

その瞬間、英がマークを振り切り前線へと駆け上がった。

松永は英の指示通り和人へボールを返す。

和人から英へボールが渡った。

相手のディフェンダーが詰めてくる。

英は素早くボールをまたぎ、そのディフェンダーを抜いた。さらにもう一人詰めてきた。

その相手も得意のフェイントで抜き去る。

敵が二人同時に詰めてきた。

英は右ウイングの選手にパスを出し、壁パスを受けてそのままタッチライン沿いを走った。

「こつちです！」

ニアサイドに走りこんできている松永が大声を出してパスを要求した。

すると敵のストッパーとゴールキーパーがあわてて松永に張り付く。英がセントリングを上げた。

ボールは、松永を通り越してゴール正面の清水へ通る。

完全にフリーの清水は落ち着いてヘディング。

ボールはゴール中央へ見事に突き刺さった。

その瞬間、どつと歓声がわきあがった。

英が膝をつき、両手のこぶしを空へ向って突きあげた。

「やっぱり英は違うな。」

和人が両手を腰に当てて、呆れたような顔をした。

そこで前半終了の笛が鳴った。

ベンチへ引き上げる選手たちに、周りから大きな声援が飛ぶ。

和人は月野の顔を捜した。

月野は、――英にタオルを渡していた。

英はそれを受取りながら、月野と二言三言会話をした。

笑いながら、いかにも仲がよさそうに。

（うそだろう、英と月野さんがあんなに仲良く話すなんて…）
和人は眼をぱちぱちと瞬いた。

第24話

ハーフタイムの間中、和人の頭の中は月野と英のことについてばいだった。

（二人が知り合いだったなんて聞いたことがない。おそらく最近知り合ったはずだ。共通の友達がいるのだろうか。男子バスケット部キャプテンの鶴田？いや、あいつが女子バスケット部員と話しているところなんて見たことがない。だとすると、いったい・・・。）

いつそのこと英に直接聞いてみようかと思ったが、和人はその考えを振り払った。

中学校最後にして最大の試合をやっている最中だ。

月野と英のことは気になったが、これから30分間はそのことを忘れなければならない。

試合が終わってからそれとなく英に聞くことにしようと心に決めた。

「さあ、泣いても笑ってもあと30分だ。お前たちの力をすべて出し切れ。そうすれば必ず勝てる。いいか、1点リードしてはいるが決して守りに入るなよ。逆にもう1点取れば相手の気力が落ちる。追加点を狙っていけ！」

「はい。」

楠田の指示に全員が呼応した。

「松永は残念だが交代だ。代わりに山中がはいる。山中、ガンガン動き回れ。そしてチャンスだと思ったらシュートを狙っていけ。」

「はい。」

山中は松永と同じ2年生で、試合経験は少なかった。だが、身長が低くすばしっこい動きをする。

疲れが見える英のパートナーにうってつけだった。

「よし、行ってこい。」

「はい！」

選手がコートに向かって駆け出した。

「監督の言う通りだ。清水、もう一点取りにいくぞ。」

「そうだな、誰かさんの体力はあと少ししか持たないもんな。点を取るなら今しかない。」

センターサークルで清水が英を見てニヤツと笑った。

ピーッ！

後半開始のホイッスルが鳴った。

清水からボールを受けた英が和人へ戻す。

和人から山中へ、山中からもう一度英にボールが渡った。

しかし英は3人からすぐに囲まれた。

やはり敵は英を徹底的にマークしてくるようだ。

英が必死に抜け出そうとするが執拗なマークはそれをゆるさない。

3秒、5秒、英はボールを奪われまいと必死にフェイントやボディバランスでこらえる。

と、その時、囲まれていたはずの英がボールとともに飛び出してきた。

相手が一人遮ったが、巧みなステップで抜きさる。

そしてまた相手の二人が英に迫って来ようかという時に、英はゴール前にふわっとパスを出した。

すると予測していたかのように清水がディフェンスの裏へ飛び出す。

ボレーシュート。

惜しくもクロスバーに当たりボールが跳ね返った。

だがそのボールは、運よく英の方へ向かった。

英が胸でトラップ。

ボールが地面に落ちる前にシュート。

相手のキーパーは一步も動けない。

ゴール左隅に飛び込んだボールを眼で追うのが精いっぱいだった。
強烈なシュート。

英が応援している緑丘中の生徒へ向って高々と手を突き上げた。
湧き上がる大歓声。

味方の選手たちが英の方へ駆け寄っていく。

だが歓喜の渦の中で、和人の表情だけは曇っていた。

和人には英が誰を見ているかがわかっていたからだ。

英の視線の先、そこには月野の姿があった。

ぎっしりと埋め尽くした生徒たちの中で、月野も英に向って何か叫びながら両手を振っていた。

和人は、――手を腰に当て、天を仰いだ。

第25話

（考えるな。今は試合に集中するんだ。2点差で勝っているからってまったく油断はできない。）

和人は、英と月野のことを懸命に考えまいとした。

だが、目線はつい月野の方へ向ってしまふ。

ボールがタッチラインを割った時、英がボールに触った時、自分がボールをクリアした時、月野の表情が気になった。

と、相手の選手から大きなパスが出た。

和人の後ろへ飛び出した敵のセンターフォワードへ、ぴったりのパスだった。

ペナルティエリアでノーマーク。

敵の応援団から「ワー」という歓声があがり、味方の応援団からは悲鳴が聞こえた。

万事休す、と思われたその時、審判の笛が鳴った。
ピーッ。

和人たちがオフサイドトラップを仕掛けていたのだ。

敵はまんまと緑丘ディフェンダーの罠にはまった。

（やった。完璧に決まったぞ！）

和人は真っ先に月野の方を見た。

だが月野の表情は和人の予想に反し、呆れたような顔をしていた。

”決定的なピンチの場面だが、相手のミスによって救われた”

そう誤解しているような表情だった。

（ちがう。俺たちは攻めたんだ。高度なプレーを完成させたんだ。）

そんな和人の思いは届くはずがなかった。

「いいぞディフェンス、伝家の宝刀がついにでたな。」

英が和人の肩をぽんと叩いた。

和人は英に向って軽く手を挙げた。
次の瞬間、和人が月野の方に目をやると、月野はこっちを見ていた。
（さてよ、これじゃまるで俺が英に励まされているみたいじゃないか。）

和人は釈然としないまま、フリーキックのボールを蹴った。

ザッ。

「あっ……」

和人の口から気のない声が漏れた。

山中めがけて強いボールを蹴ったつもりが、ボールの下の中もいっしょに蹴ってしまったのだ。

ゴルフでよく言う”ダフリ”という行為だ。

ボールは力なくころころと転がり、敵の選手が楽にインターセプト。そしてそのままドリブルでゴールへ突き進む。

和人は追いつけなかった。

キーパーと1対1。

キーパーは難なくかわされ、無人のゴールへシュートが決まった。

あっという間の出来事だった。

緑丘の応援団から「あーっ」という悲鳴が漏れた。

当然、奥山中の応援団からは割れんばかりの歓声が起こる。

和人は呆然と立ち尽くし、うなだれた。

「すまない……みんな。」

和人は声を振り絞ったが、果たして何人に聞こえたのだろうか。

和人の声はそれほど弱々しかった。

「お前がこんなミスをするなんてな。」

英がニコニコ笑いながら近寄ってきた。

「あの2点で楽に勝てるとは思っていなかったさ。でもまさか和人が……って感じだな。ドラマを作ってくれるぜまったく。そんなに落ち込むなって、まだ1点リードしているんだからさ。」

英の声はやさしく、それでいて力強かった。

（これが本当に自分と同じ中学3年生なんだろうか。）

サッカーのプレーとともに心までも急激に成長している英を、和人は遠い存在に感じていた。

そして初めて、英に対して劣等感を抱いた。

和人は自分の両ほほを両手でぱちんと叩いた。

「ちくしょう、負けてたまるか、絶対に。」

言いながら和人は英を見つめた。

「お、おう・・・でも敵はあつちだからな、あつち。」

英が奥山中の選手を指さしながら笑った。

「さあみんな、和人のアドレナリンがあがったぞ。和人に近寄るなよ、吹き飛ばされるからな。」

英が声を張り上げると、みんなの表情がゆるんだ。

（ちくしょう、やっぱり英は1歩前を歩いてやがる。）

そう思いながら、和人もつられて笑った。

それからの和人のプレーは目を見張るものがあつた。

味方の選手に大きな指示を出し、サポートに動き回った。

英へのマークは依然として厳しく、さらに疲労もかなり蓄積しているようだった。

その英の分をカバーするかのようには、和人は精力的に動きまわった。奥山中は、失点を覚悟でどんどん攻めてくる。

試合終了間際、一瞬のすきを突き奥山中の強烈なロングシュートが放たれた。

誰もが息をのんで、ボールの行方を追う。

ボールは、――大きな音をたててゴールポストに当たり跳ね返った。そしてそこで試合終了の笛。

2対1、緑丘中の歴史的勝利だった。

沸き起こる大歓声。

緑丘中の選手たちが一斉にベンチへ走ってきて、楠田を胴上げした。

試合前に、あらかじめ選手全員で決めていたことだった。

楠田は感極まって泣き出し、選手たちはそれを見て笑い合った。

月野が英を祝福している姿が和人の目に入ったが、それでも和人は満面の笑みで仲間と喜びを分かち合っていた。

和人にとって中学校最後の公式戦は、最高の形で幕を閉じた。

第26話

「おい、その天才君、それ以上勉強してどうするんだ。」

和人が下校していると、後ろから英の声がした。

振り向くと英がにこつと笑った。

英は一人ではなかった。

隣には女の子――月野が並んで歩いていた。

「絶対に受かるという保証はないよ。やるだけやっとならば自信もつくし。」

「お前が落ちるんなら俺なんか夢の中でも受からねえよ。」

「あら、私は園山先輩が合格するのを一週間前に夢で見たわ。」
にこにこしながら月野が話に入ってきた。

西部地区対抗戦の最後の試合から実に5か月が経とうとしていた。サッカー部のヒーロー英と2年生一かわいいと噂される月野のカップルは、学校中の話題の的になっていた。

英と月野が知り合ったきっかけを、前川徹也から和人はきいた。

最初は英と徹也、月野とその友達の4人でボウリングに行ったのだが、英と月野はすぐに仲良くなり、次の日は二人だけでボウリングに行ったという。

聞いた直後はかなり落胆していた和人であったが、しかたがないことだとあきらめざるを得なかった。

ただ、月野が笑った時にでる左ほほのえくぼを見る度に、和人の胸は高鳴った。

「その夢は西城高校だったのか？本当は北高だったんじゃないか？」

「ううん、確かに西城だったわ。『サッカー部に入って、橘先輩と一緒に北高を倒すぞ。』って息巻いてたもの。」

「ようし、聞いたか和人。千波の夢は未来を写す夢なんだ。なんか

そんな言葉があつたよな、なんて言つたつけ。」

月野の名前は千波といった。

「予知夢のことか？」

「そうそう、その予知夢だ。俺は必ず合格する。きっと、たぶん、もしかしたら……。」

「おいおい、本当は自信がないんだな。受験まで1か月を切つたつていうのに。」

「橘先輩、実は今日、園山先輩つたらね、担任の勝見先生から『合格する確率は、今のままなら5%だ。』つて言われたんですよ。」

「え？50%じゃなくて、5%？」

和人がぶつと噴き出した。

「担任の発言として、いくらなんでも5%はないだろう。俺を落ち込ませてどうするんだつて感じだよ。消費税じゃあるまいし5%なんて。」

「でも英、本当に落ちちゃつたらどうするんだよ。私立も受けなかつたし、高校浪人なんて聞いたことがないぞ。」

「心配ご無用、長い人生のほんの一年間じゃないか。例え浪人しても千波と同級生になれば、それはそれでまた面白いかも。」

「橘先輩、騙されないで下さいね。本当は滑り止めをちゃんと確保しているんですから。」

「おい、それは言わない約束だろ。」

英は千波をちよつとにらんだ後、和人に説明した。

「実は西部地区対抗戦の後に、北高の和田監督と会つたんだ。」

「えつ、和田監督つてあの、和田監督？」

「そう、で、言われたんだ、うちに来ないかつて。」

「ええつ？和田監督自ら勧誘しにきたの？」

「ああ。奥山中との決勝戦を見に来ていたらしいんだ。」

「すげえ、それつてすげえじゃんか。で、英はなんて言つたの？」

「誘つていただいたのはとてもありがたいんだけど、持病を抱えて

いてとても北高の練習についていけないから、すみませんって。」
「持病？」

「ほら、おれ体力が極端にないじゃん。あれってたぶん内蔵のどこかが悪いと思うんだよな。」

「そんなことわからないじゃないか。」

「いや、十中八九間違いない。」

「もったいないなあ、和田監督がそれだけ目をかけてるってことは、もしかしたら一年生でレギュラーに抜擢されるかも知れないのに。」

「いや、北高の練習は半端じゃないよ。たぶん俺には無理だ。」

「でもさつき滑り止めって言ってたのは？」

「ああ、和田監督が言ってくれたんだ。もし西城に受からなかったら北高が拾ってやるって。」

「ふうん、そういうことか。でも、本当にすげえ。なるほど、それなら西城に受からなくても大丈夫……。」

「それは違うぞ、和人。俺は本気で勉強してるんだ。本当に高校浪人してもいいと思っている。俺の人生のわかれ道なんだ。」

和人の言葉を遮り、英が矢継ぎ早に話した。

そしてふーっと息を吐いた。

「すまん、柄にもなくちよつと興奮した。……まあ、そういうことだから和人、これからも勉強を教えてくれ。」

「わかった。」

いつの間にか前川サイクリング店の交差点に来ていた。

和人は英と千波に「じゃあ。」と手をあげた。

すると英が、

「おいおい、今言ったこと聞いてなかったのか？俺んちにきて勉強を教えてくれよ。」

「えっ、今から？だって、デート中だろ？」

「違うよ、千波はこの先の友達んちへ行くところなんだ。なっ。」

「はい、実はそういうことだったのです。」

千波が笑った。

「しかたないなあ。じゃあ1時間半だけだぞ。」
和人は英の家の方角へ向きを変えた。

第27話

「ただいま。」

いつものように和人がクロベエを散歩させて帰ると、居間に父がいた。

今日は残業をせずに帰ってきたようだ。

「お帰り、今日はなぜこんなに早く帰ってきたと思う？」

「知らないよ。」

「ふっ、今日は月に一度の給料日なのだよ、和人君。」

「それで？」

「なんだよ、お父さんが毎日身を粉にして働いているっていうのに、感謝の心はこれっぽっちもないんだな。」

「そりゃ感謝してるけど、それと早く帰ってくるのとどう関係があるの？」

「お父さんは決めたんだ。給料日の日には出前を取る。しかも寿司だ。」

「おう、それはすばらしい。」

「だろ？6時半に届くことになってるから、間もなくだな。それと今日は携帯電話を買い替えたぞ。フォーマっていつてなんとテレビ電話ができるのだ。」

父は自慢げに携帯電話をハンドバックの中から取り出した。

「それは！」

取り出された携帯電話を見て和人は眼を見開いた。

「どうした、和人。」

「いや、それと同じ携帯を前に見たことがあったから。」

「そんなはずはないだろう、3日前に発売されたばかりだぞ。でもまあ、もしかしたら広告か何かを見たのかもしれないな。」

ピンポン。

玄関の呼び出し音が鳴った。

「おっ、寿司が届いたかな？」

父が財布を持って玄関へ向かった。

和人はその携帯電話をじっと見ていた。

（あの携帯と同じだ。）

――時を止める携帯電話、半年ほど前に拾って2、3日使ったあと交番へ届けたあの携帯電話に瓜二つだった。

でも父は3日前に発売されたばかりだと言っていたし、和人が拾ったやつは、かなり古ぼけている感じがしていた。

（記憶違いだろうか？でもよく似ている。）

「0」のボタンの下の「STOP」と書かれたボタンは、当然なかった。

和人は右手の人差し指で左の腕の3センチほどの古傷を触っていた。考え事をするときの和人のいつもの癖だ。

「ほら、寿司だぞ、うまそうだぞ。」

父がにこにこしながら寿司を運んできた。

「どうした和人、ぼかんとして。さあ皿を持ってきてくれ、俺はビールを持ってくる。」

和人は言われたとおりに皿をもってきて座った。

父はコップにビールを注いで飲みだす。

「く、うまいねえ。さあ和人どんどん食べよ。」

「あ、うん、いただきます。」

和人も牛乳をコップに注いだ。

（そういえば交番に届けてそろそろ6カ月だな。持ち主が現れたんだろうか。それとも持ち主が現れずに、俺のものになるのかな。それに、なぜニューモデルのやつと同じデザインなんだ。）

和人は箸をつかんだ。

（・・・まあ、携帯のことは後でゆっくり考えよう。まずは寿司だ。）

ト口をめがけて和人の箸が飛んだ。
そして口の中へ。

「うめえ！」

「そうだろう、たくさん食べろよ。」

父の顔はビールですでに赤くなり始めている。
和人は久しぶりの寿司を堪能した。

第28話

その電話はついに来た。

和人が漫画喫茶へ行こうという徹也の誘いを断って家に帰ると、留守番電話に録音されていたのだ。

「もしもし橘和人さんのお宅ですか。8月28日に拾得物の届け出をされた携帯電話ですが、持ち主が現れませんでしたので、ご希望通りお渡しいたします。南町交番へお電話ください。番号は○○○。○○○○です。」

和人はその音声をじっと聞いた後、受話器を取り言われた番号へ電話をかけた。

「はい、南町交番です。」

かなり低いが何となく優しそうな声の男性が電話に出た。

「あ、あのう、電話をいただいた橘和人といいますが。」

「あ、はいはい、橘さんですね。えーと、8月に拾われた携帯電話ですけども、受け取りを希望されますか？」

「はい、もちろんです。」

和人が勢いよく答えると、相手の警察官はちよつと意外そうにこう言った。

「はあ、そうですか。しかし、かなり古ぼけてますよ。お店に行けば安くて上等の携帯が売っていますけどね。」

「それでも欲しいんです。」

和人はしっかりとそう言った。

「そうですね。では今日5時半までに受け取りに来られますか。それとも後日になさいますか。」

「今から行きます、30分以内に。」

「えー、では印鑑を持ってきてくださいね。」

「わかりました。」

和人は電話を切るとすぐに、印鑑を探しポケットに入れた。

（とうとう待ちに待ったこの日が来たぞ。ついにあの携帯が俺のものになるんだ！）

和人は急いで靴を履き玄関を出ようとしたが、はっとして電話の前に戻った。

（いけね、留守録を切つとかなきゃ、お父さんに聞かれてしまう。）はやる気持ちを抑えながら和人は留守録を消去した。

そしてもう一度靴を履き、散歩をせがむクロベエをにべもなく振り切って走った。

交番へは20分ほどで着いた。

中に立っていたのは届け出た時の警察官ではなかった。

ちよっと年配のやさしそうな感じの人だった。

「橘です、先ほど電話した。」

和人は息を整えながら小さな声で言った。

額には汗がにじんでいる。

「走ってきたのかい？明日でもよかったのに。どうぞ。」

警察官は椅子に座るように手で合図した。

そして机の引き出しからあの携帯電話を出した。

携帯電話はビニール袋に入っており、ビニールには「8/28南町

交番」と黒のマジックで書かれていた。

「こんな古ぼけたのを欲しがるなんて君も変わってるね。それとも珍しい特別なもののかい？」

言いながら警察官は和人の前にその携帯電話を置いた。

「いえ、その、…まあ何となく。」

「うん、ま、いいか。別にこちらが困るわけでもないからね。この携帯は、念のため確認させてもらったんだが、確認っていうのは個人情報が入っていないかってことなんだが、最近個人情報がどうのってけっこうつるさいからね。」

警察官は座って話した。

「若い警官にもみてもらってね、調べたわけなんだが全く何も登録

されてないみたいなんだよ。電話をかけた形跡も、受けた形跡もないしね。個人情報但至少でもあればこうやって第三者に渡すことはできないんだけど、まあ君にとってはそれが良かったってことだね。それと昨日までは電池が少し残っていたんだが、本署の連中がその個人情報データをエックするっていうんでいろいろ操作するうちに電池が切れちゃったらしいんだ。ま、仕方ないことだね……」

「あのう……」
警察官は話好きらしく、黙っていると話が終わらないようなので、和人が口をはさんだ。

「印鑑を持ってきたんですけど。」

「ああ、それならこの紙に今日の日付と名前を書いて、こここのろに印鑑を押してもらおうかな。」

和人はすぐに言われるとおりにした。

「はい、じゃあこれで良しと。携帯電話をお渡ししますね。ああ、急いできたみたいだからのどが渴いたんじゃないかな。今お茶を入れるからちょっと待っててね。」

警察官がお茶を入れようと立ち上がると同時に、和人も立ち上がった。

「いえ、ちょっと急ぐもので、これで帰ります。ありがとうございます。」

「え？あ、ちょっとゆっくり……」

警察官が止めるのも聞かず和人は急いで立ち去った。

第29話

（やはりこの携帯はお父さんの買ったものと同じだ！）

家に帰った和人は携帯電話を机の上に置いた。

よく見ると「FOMA」という文字が液晶画面の上の方にある。

6カ月も前からFOMAが発売されているはずはない。

しかも表面の消耗の度合いは、購入して1年以上は使っていると思われる。

（すると、この携帯は…）

すぐに和人は一つの答えを導き出し、全身に鳥肌が立った。

（もしかしたら”未来からやってきた”ということになるのでは！）

和人は父の携帯の充電器を居間から持ってきて、充電を始めた。

6か月前と同じように時間を止めることができるかどうか、一刻も早く試してみたかった。

だが、充電にはしばらく時間がかかる。

充電が完了するまでの間、クロベエの散歩に付き合うことにした。

以前は千波と出くわすことを期待して散歩をしていた和人であったが、千波と英が付き合うようになってからは、むしろ出会わないようにと思っていた。

というのも、和人の千波への思いが変わっていないため、英に対してなんとなく後ろめたい気持ちがあるからだった。

千波の姿を見れば見るほど、胸がときめいてしまう。

だから今はできるだけ会わないようにしなければならぬと思っていた。

最近の散歩コースは、千波の家と反対方向を選んでいた。

幸い、千波は部活をしていて夜遅いため、太郎の散歩は小学校6年生の弟に任せているらしい。

犬の散歩で出くわすことはほとんど考えられなかった。

だが、その日はいつもと違っていた。

バスケット部の練習が早く終わったのだろうか。

和人たちが10分ほど歩いたところで、道の正面から千波が太郎を連れて歩いてくるのが見えた。

和人は自分の心臓の鼓動が急に速くなって来るのを感じていた。

（何でこんな道を歩いているんだよ。）

和人の気持ちとは裏腹に、千波と太郎はまっすぐこちらへ歩いてくる。

さらに太郎がいつものようにいち早くこちらに気づいて吠えだした。脇道もないし、いまさら引き返すわけにもいかない。

双方の距離は瞬く間に縮まっていった。

「まったくこの子ったら、いつまでたっても進歩がなくて……」

ワンワンとけたたましく吠えさかんに動き回る太郎のリードをしつかりと握りながら、千波が話しかけてきた。

「千波ちゃんを守ろうと必死なのかもしれないよ。」

「いつしか和人は千波を”千波ちゃん”と呼ぶようになっていた。

顔がそれほど赤くならないのは、千波と話をすることが幾度となくあったからだ。

「英は？今日は一緒じゃなかったの？」

「いつもいつも一緒にいるわけじゃないですよ。園山先輩は最近受験勉強に忙しいし……。それじゃ、失礼します。」

ぺこりと頭を下げ後ろ向きで太郎を引っ張りながら、千波が離れていった。

和人は前を向き、ふうーと息を吐いた。

（相変わらずかわいいな。それにそれほどドキドキせずに話ができた。俺にしては上出来だ。それにしても英は今大変だろうな。時間が足りなくて焦ってるんじゃないだろうか。）

顔をしかめながら猛勉強している英の姿が目に見えた。

（そうだ、時間を止める携帯電話のことを英に話してみたらどうだろう。）

この和人の考えはこれまで何度もあった。

だが、その度に打ち消してきた。

誰か一人、たった一人に話しただけで、噂は世間に広まってしまう。例えば「誰にも言うなよ」と念を押しても、今度はその人が別の人に「誰にも言うなよ」と念を押して話してしまう。

噂とはそういうものだ。和人は思っていた。

だから、今まで誰にも携帯電話のことを話さなかった。

（でも英は信頼できる親友だ。その親友が追い詰められている。それなのにだまって見過ごしてよいのだろうか。困っているときに助けないなんて親友として失格ではないのか。）

そこまで考え、和人は決心した。

（とにかく明日英に会ってみよう。そして本当に追い詰められているとしたら、携帯電話のことを教えてやろう。英は歓喜するに違いない。）

「走るぞ、クロベエ。」

和人は散歩を早く切り上げたくて、走り出した。

第30話

和人は散歩から帰るとすぐに携帯電話を手に取った。
充電はまだ完了していない。

だが、もうそろそろ父が帰ってくる頃だったので、充電機を外し居間に戻した。

（さて、ちゃんと動くだろうか・・・？）

和人は真剣なまなざしで「STOP」ボタンを長押しした。
すると液晶の画面が眩く光り、赤い文字で「Time must stop!」という文字が浮かび上がった。

和人は置時計に目を移した。

時計の針は、――止まっている。

（よし、大丈夫だ。時は止まった！）

和人はほっと息をついた。

「さてと、ちょっと探検でもしてこようかな。」

背伸びをしながらそう言うと、和人は携帯電話をポケットに入れた。

「どっちに行こう？」

玄関を出た和人は少し迷った。

「とりあえず学校の方だ。」

時を止めた瞬間から、完全な静寂（無音）の状態が続いている。

和人がわざと声を出すのは、誰からも聞かれる心配がないことはもちろんだが、無音がとても気味が悪いということを感じているからだった。

妙に落ち着かなく、ストレスがたまっていくような気がする。

しばらく行くと、スーパーマーケットが見えた。

ちょうど人が出てくるところで、自動ドアが全開になっている。

和人は中に入ってみた。

店内は夕飯のおかずを買いに来る客で込んでおり、奥の方まで入るためには誰かに触れる危険があった。

「あんまり知っている人はいないみたいだな。おっ、あれは徹也のお母さんじゃないか。」

5 mほど先に前川徹也の母がいた。

隣に立っている同年代の女性と話をしているらしく、大きな口をあけて笑っている。

「おっ、あっちには幸雄がいるぞ。コーラとお菓子がかごに入っているな。」

幸雄は2年生の男子で、和人の幼馴染だ。

和人は何か思いついたらしく、ニヤツと笑い幸雄の方へ歩いて行った。

幸雄の前に立つとかごの中のコーラの缶を取り、冷蔵庫の中にあるトマトジュースと変えた。

「ははは。」

時が戻ったときレジの前でびっくりする幸雄の姿を思い描いて、和人は笑った。

レジの方を振り向いた和人は、笑っていた口を閉じた。

店員がレジからおつりを出しているところだった。

レジの中からは1万円や5千円札、千円札が何枚も見えている。

和人ははっとして思った。

（なんてことだ！泥棒をしようと思えばいくらでもし放題じゃないか。防犯カメラにも映らないでレジの中からも、客の財布からもお金が抜き取れる。しかもお金だけじゃなくてこの陳列棚のものだっていくらでも・・・。）

和人はあわててスーパの外へ出た。

そしてポケットから携帯電話を出し、握りしめながらしばらく歩いた。

（まずい、俺は泥棒なんかしたくないのに、これを持っているといつかはやってしまうんじゃないだろうか。この誘惑は・・・、まずい、絶対にまずいぞ。）

少し落ち着いて考えたかった。

「とりあえず中央公園に行こう。」

100メートルほど歩くと中央公園についた。

ベンチにどっかりと腰を下ろすと、和人はじっとその携帯電話を見つめた。

第31話

「欲しいものは何でも手に入る・・・。」

和人は目をつむり携帯電話をぎゅっと握りしめた。

「お金、ゲーム機、パソコン、サッカーシューズ・・・そりゃあ今急に金持ちになって何でも上等のものを持っていたら、みんな不思議がるし、第一お父さんがすぐに疑うはずだけど。でも・・・。」

和人は眼を開けばんやりと遠くを見つめた。

「でも、高校生になれば寮生活だし・・・。お父さんと会うことはそんなにない。それに、その時にいろんなものを持っていたってお父さんには気づかれないようにすればいい。後はみんなに、お父さんからの仕送りが多いと言えればいいんだから。」

ふうつと和人は息を吐いた。

「すごいな。ほんとうにすごい。」

だが、和人の表情は曇っていた。

それで、そんなことでいいのだろうか。

ただの泥棒に成り下がって、何の苦労もせずにこのまま大人になつていく・・・。

”寄生虫”——ふと、和人の頭をそんな言葉がよぎった。

”止まった時間に寄生する気味の悪い虫”。

そんな虫の生き方を自分は望んでいるんだろうか。

和人は10年後、20年後の自分の姿を思い描いた。

他人からくすねた金で外国に旅行し、高級ホテルを転々とする。

ブランド物のスーツを着飾り、遊んではかりの日々。

周りにはいつもスタイルのいい美女が寄ってくる。

もちろん金目当ての頭が悪そうな女だ。

自分は幸せな顔をしているだろうか・・・？

すると、その未来の自分が、こつちを振り向いた。

――笑っている。

だが、その笑顔は情けないほどにゆがんでいた。

ひきつった口元、どんよりと曇った眼、かん高い笑い声……。

およそ自分が望む将来の姿と大きくかけ離れている。

”自分が望む将来の姿”――それは……

たとえ貧しくとも楽しみや希望を見つけながらしつかりと生きていく自分、そしてやさしい妻（千波？）とやんちゃな子供に囲まれ、取るに足りない事件に悩まされたり喜んだりしている自分の姿だ。その表情は誰からも愛されるように、朗らかでなければならぬ。

和人はすつと立ち上がり、携帯電話をズボンのポケットにしまいこんだ。

「よし。」

小さくそう呟くと、花壇に咲いている小さな白い花を一輪摘んだ。

「時間を止めるのは、なるべくひかえよう。困ったことが起きた時にだけしか使わないようにすればいい。そうだね。」

和人は砂場の砂を山のように盛り上げ遊んでいる幼稚園の子どもたちに向って話しかけた。

「この山が一瞬で壊れたらびっくりするだろうな。」

そう言うとき和人はその中の一人の女の子の髪にそつと白い花を挿した。

和人は、公園から立ち去ろうとしていた。

この究極の静寂から早く解放されなくなっていたからだ。

「早く家に戻って時間を動かすでしょう。……ん？待てよ、今の場所で時間を動かせばどうなるんだ？」

和人は少しの間立ち止まり考えた。

そしてすぐににこつと笑った。

「つまり俺は、自分の家からここへ瞬間移動したことになる！すげえ、すげえぞ。」

和人は携帯電話をポケットから取り出し、辺りを見回した。

「この場所はちよつと悪いな。向こうのおじさんなんか完全にこつちを見ているし。誰からも見つからない場所は……。そうだトイレの中だ。」

和人は急いでトイレに行き、トイレの中に誰もいないことを確認すると、ゆつくりと「STOP」ボタンを押した。

ざわざわと木の葉の揺れる音が聞こえた。

――時間が動いたのだ。

和人はトイレを出ると、自分の家に向かって歩き出した。

「あれ、マリちゃん、髪にお花がついてるよ。」

「えっ、どうして？誰がつけたの？」

砂場から園児のかわいらしい声が聞こえてきた。

第32話

翌日は大雨。

和人は玄関から出たものの、あまりの土砂降りに立ちつくした。

（ちえっ、小降りになるまで待つか。）

だが、もう一度玄関を開けて中に入ってはみたものの、5分たっても雨は衰えない。

父は30分ほど前に出勤している。

和人はため息をつき、玄関のドアを開けようと手を伸ばしたが、あるアイデアがひらめいた。

（そうか、瞬間移動だ。あれを使えば濡れずに学校へ行ける。）

和人はカバンの中から携帯電話を取り出した。

「時間よ止まれ。」

小さな声でそう言いながら、和人は「STOP」ボタンを押した。

まばゆい光とともに、（あれほど大きな雨音がすっと消え）静寂が和人を包んだ。

自分の耳が聞こえなくなったような錯覚。

「よし。」

微笑みながら玄関を開けた和人は、目を見張り立ち尽くした。無数の小さな雨粒が空中に浮いている。

「うわあ、すげえ！」

雨粒は細くもなく、イラストで描く涙のような形もしていなかった。完全な球体。

それが空中にぎっしり浮かんでいた。

和人はそつと手を伸ばし、そのうちの数滴を押してみた。

するとその雨粒は球体を維持したまま、押されて止まった。

「へえ、おもしろいな。」

ふうつと息を吹きかけると、小刻みにぶれながら後退する。

和人は手を伸ばし傘をさしてみた。

パラパラパラ、と雨粒が傘に当たる音がする。

傘を閉じてみると、傘を開いていた場所には雨粒がなく、ちょうど透明な傘がそこにあるような感じがした。

「よし、行ってみるか。」

和人はもう一度傘を顔の前にさして歩きだした。

パラパラパラ、雨粒を押しながら前に進む。

膝から下の部分は傘でカバーできないため、雨粒が足に当たる。

雨粒はズボンにはしみ込まずにやはり移動するのみだ。

歩くうちにだんだんと傘の受ける抵抗が強くなってきた。

おそらく傘の前にぎっしりと雨粒が重なっているに違いなかった。

和人は傘を少しすばめながら歩いてみた。

すると急に傘にかかる圧力が弱くなった。

「ようし、このまま進もう。」

前川サイクリング店の前の交差点に差し掛かった。

信号は赤だが関係ない。

車と車の間を歩いた。

「今、時が動き出したらアウトだな。ノーブレーキの車にはねられちまう。」

そこから少し行くと、徹也の姿が見えた。

傘をさし、カバンを脇に抱えているが、両足が地面についていないところを見ると走っているということだろう。

歯を食いしばり、顔をしかめている。

「ははは。」

その顔を見て、和人は笑ってしまった。

「がんばれよ、徹也。俺は先に行かせてもらっぜ。」

徹也を追い越そうとしたとき、ふと和人は気づいた。

横を走る車のタイヤのところから、徹也の体のすぐそこまで水がき

ている。

おそらく水たまりを車がはねたのだろう。

このままだと確実に徹也の胸のあたりまで水がかかることになる。

「俺と出会えてラッキーだったな。といってもお前は俺のことは見ることはできないけど。」

言いながら和人は徹也に降りかかりそうな水を、傘を使って徹也の後方に移動させた。

「これは”貸し”だからな、徹也。いつか礼をしてもらうぜ。」

それから10分ほどが経ち（時計は動いていないが）、和人はようやく学校へ着いた。

後ろを振り向くと、和人が歩いてきたところだけばかりと雨粒がない。

まるでトンネルができたみたいだ。

「あそこを戻れば、簡単に家に帰ることができるんだな。ま、戻る必要もないけど。それにしても早く着きすぎた。せつかくだから受験勉強でもするか。」

和人は上履きに履き替えトイレに向かった。

そしてトイレに誰もいないことを確認して、「STOP」ボタンを押した。

第33話

時が動き出した。

和人はトイレを出て自分の教室に向かった。

途中、玄関の前を通ると、生徒たちが濡れた制服への対応であわただしく動いていた。

（かわいそうに、あのズボンじゃ着替えなきゃどうしようもないな。）

和人はその中の一年生男子の姿を見て思った。

教室に着くと、クラスメートはまだ数人しかいなかった。

「おはようつす。」

皆に聞こえる声でそう言いながら、和人は教室の中に入った。

「あれ、今日は早いじゃないか、和人。」

声をかけてきたのはバスケ部の北島だった。

「さては、車で送ってもらったな。」

「そういうこと。こんな土砂降りの日に傘をさして歩いてくるなんて考えられないね。」

「歩いてきて悪かったな。うちからは歩いてすぐだからって送ってもらえないんだよ。」

「それにしても本当に車で来る人が多いな。」

和人は教室の窓から外をみた。

「おっ、あれは英んちの車じゃないか。正門の前に止まったぞ。ドアを開けて、傘をさして、――出てきた出て……きた。」

和人の声のトーンが急に下がった。
（嘘だろう……。何で千波ちゃんが英んちの車に乗っているんだ！）

「ヒューヒュー。我が校のベストカップルが同じ車に乗ってきたぜ。もしかしたら彼女は昨夜園山の家泊まったのでは！」

北島がクイズのアナウンサーの如く、マイクを握り締めたような恰好で大きな声を出した。

「和人、これは親友として園山に真実を問いただすべきだぞ。」

「あ、ああそうだな。真実を問いただしに行こう。それに別の話もあるし。」

和人は笑顔でそう言ったが、頬のあたりが少しひきつっていた。

「朝っぱらから見せつけてくれるな。」

廊下を歩いてくる英にむかって和人が言った。

「見たたのか。だから正門の前でおろすなって言ったのに、うちの親父ときたら。」

「親公認の仲ってことか。」

「昨日千波をうちに呼んだんだよ。そしたらうちの親、妙にちやほやしゃがって俺の部屋にジュースやお菓子を持ってきたりさ、千波のことじろじろ見たり。今日だって俺だけ送ってもらはずだったのに親父ったら『千波ちゃんも乗せていこう』ってきかないんだ。」

「そうか。でも昨日俺学校終わってから千波ちゃんと会ったんだけどな。」

「ああ、確か千波もそんなことを言っていたな。犬の散歩で会ったんだろ？」

「そうなんだけど、あの時千波ちゃん、お前が受験勉強で忙しいから会えないようなことを言っていたぞ。」

「ところがな、どうしても会いたくなっちゃったわけよ。」

「それで夜に呼び出したのか？信じられないぜ。」

「夜って、まだ5時にもなっていないかったよ。それでな・・・。」

「まあいいや、それより英、とつてもいい話があるんだけどな。」

和人は千波の話を遮って、例の話を打ち明けようと意を決した。

「へえ、何だろ、いい話って。」

英は少しだけ興味を持った表情をしたが、構わず自分の話を続けた。
「でもその前に俺のいい話も聞いてくれよ。実はな高校受験を目前

に控えて、さすがの俺もちよっぴり不安だったわけよ。それで千波に泣きついたんだ。」

「泣きついた？」

「本当に泣いたわけじゃないぞ。元気づけてくれって頼んだんだよ。」

「それでお前の家に来たってわけか。」

「ほとんど無理やりだけだな。でも千波のやつ俺の親に初めて会って緊張しちゃってさ。それがまた可愛かったりするわけだ。」

「ふうん、それで？」

和人は平常心を装っていたが、内心は嫌な予感がしていた。

「ま、さっきも言ったように親がお菓子やジュース運んできて、初めのうちは落ち着かなかったんだけどさ、落ち着いてきてから千波に言ったんだ、不安で不安でたまらないって。」

「そしたら？」

「そんな弱気なのは園山先輩らしくない、大丈夫だからしっかりしてって言われたよ。」

「ほう。」

「でも最近不安で夜も眠れないから、力を貸してほしいって頼んだ。・・・キスさせてくれないかって。」

「・・・。」

「で、めでたしめでたしって訳だ。」

「したのか？キス。」

「そう！・・・千波可愛かったぞ。その後千波んちまで送って行ったんだけどさ、ずっと真っ赤になったままなんだ。おかげで俺様の気合もばっちり入りまくって、2時まで勉強しちまったぜい。すごいだろ？」

「おお、・・・すげえな。・・・とうとうキスまでしちゃったのか。」

和人は努めて明るく言った。

「ま、和人も早く彼女見つけろよ。そうだ、千波の友達紹介しても

らおうか？」

「いいよ、今は受験で精いっぱいなんだから。」

「それもそうだな、じゃあ受験が終わってからということ。ところでさっき何かいい話があるって言ってたな？」

「あ？ああ、あれは・・・、そう、レンタルビデオのただ券をお父さんにもらったから、よかったら英にやるよ。」

「・・・それだけ？しかも今の俺、ビデオ借りる余裕ないってわかってるくせに。おい和人・・・。」

和人は英の声に耳を貸さず足早に立ち去ってしまった。

第34話

（俺は何をパニクッてるんだろ。英と千波ちゃんはいいいカップルで俺が間に入る余地なんかないのに。親友として一緒に喜んでやらないのにな……。）

教室に戻った和人は自己嫌悪に陥っていた。

自分がとても小さな人間に思えて情けなかった。

だが、千波を思う気持ちはまったく変わらない。

どうしようもなく好きで、好きでたまらなかった。

いっそ告白した方が楽になるんじゃないかとさえ思った。

雨は今も激しく降っていた。

「どうだった？和人。」

ふいに北島が近寄ってきた。

「うん、北島の言うとおりだった。月野さんは昨日英の家に泊まったらしい。」

「な、なに！」

「て、アホか。親がそんなこと認めるはずがないだろ。英の親父さんが月野さんも送って行こうって言ったらしいんだ。」

「あたりまえだろ。リアクションだよ、リアクション。」

北島が顔の前に人差し指を出し、チツチツと横に振った。

「でもそうか、いよいよ家族ぐるみの付き合いになったんだな。あの純真な千波ちゃんが……園山の毒牙にかかって……一段、一段と堕ちて行くんた。南無阿弥陀仏……。」

「大げさな。とにかく俺は今から勉強するんだから、自分の席に着いてくれ。」

「ひゅー、和人は受験生のかみだな。赤まきがみ青まきがみ黄ま

きがみ、受験生のかがみ……。」

「何わけのわからないこと言ってるんだよ。」

言いながら和人はふつとかすかに吹き出した。

今の北島との会話で、空気がいくぶん軽くなったような気がした。

（まあ、英には千波ちゃんがついている。それに時間が止まることを教えたって、何時間かごとには充電しなくちゃならない。充電の時間は時間を止めておくことはできないんだから、よく考えたら3日後の受験まであまり時間は取れないんじゃないかな。）

和人は自分で自分の考えに納得し、頷いた。

（それにむしろ、時間を止めれることを英に話したら、カンニングのために使うかもしれない。それだけは絶対にさせてはいけない……いてっ。）

和人は考え事をする時に、左腕の傷をかく癖がある。

今もまたきつくかきすぎたらしく、ごく僅かに血が出てきた。

和人はティッシュでその血をふき教科書を開いた。

「さあ、がんばるとするか。」

誰にも聞こえないような小さな声で和人は呟き、ふうつとため息をついた。

「和人、ちょっと部活に顔を出さないか？」

放課後、正門を出たばかりの時に英が追いついた。

雨は降っていない。曇り空だ。

「冗談だろう、よくそんな余裕でいられるな……。」

「余裕じゃないよ。ただダメなんだ、運動しないとき、体が調子悪いんだ。受験前に体調を崩したらまずいだろう。」

「いや、下手に汗かいて風邪でも引いたら最悪だな。」

「そんなこと言わずに1時間だけ付き合えよ、な。今日はグラウンドが使えないからたぶん第2体育館でフットサルをやると思うんだ。」

英の一生懸命な説得に和人の気持ちが揺らいだ。

「本当に1時間だけだぞ。」

「さすが和人！そうこなくっちゃ。」

笑いながら英が和人の目の前に体育館シューズを出した。

そのシューズには「橘」と名前が書いてある。

「それは俺のシューズじゃないか。手回し良すぎだぜ、まったく。」

二人は第2体育館に向かって歩き出した。

第35話

第2体育館は人家がない小高い丘の上にあり、プールやテニス場など複合スポーツ施設として使用されていた。

もともとは市が管理する市民体育館だったのだが、市民体育館の建て替えに伴い、部活動用として中学校に移管されていた。

かなり老朽化が進んでおり、あと2年後には取り壊す計画らしい。中学校からは歩くと30分もかかる程の距離だが、使用する部はジョギングをしていくため、ちょうどよい準備運動になっていた。

「1時間だけ付き合うつて言ったのは、練習時間のことだからな和人。この移動の時間は当然含まれないぞ。」

「はいはい、どうにでもしろ。」

和人たちが体育館に着くと、松永が血相を変えて飛び出してきた。

「よう松永、あわててどうしたんだ？」

和人が尋ねると松永が体育館の中を指さし叫んだ。

「大変なんです！桑田の手首の動脈のところが切れてしまって、血が止まらないんです。楠田先生はまだ来ていないし、救急車を呼ぶうにも電話がないんです！」

「しまった！今日は高校受験の3日前だったんだ。」

英がはじかれたように血相を変えて体育館の中へ駆け込んだ。

和人も遅れて中へ入る。

体育館の壁近くにはサッカー部員が集まって騒いでいた。

その中心には桑田が倒れている。

「どけ、みんな！誰かタオルを持ってこい！ほかのやつは外に出て誰でもいいから大人を捕まえるんだ。携帯を借りて救急車を呼べ！」
英がてきぱきと指示を出し、1年生が持ってきたタオルを桑田の肩の近くできつく縛った。

「ちくしょう・・・俺はなんてバカなんだ、こんな大事なことを忘れるなんて・・・」

英の顔は恐怖で歪んでいた。

和人は英が何を言っているのか理解できなかったが、桑田の手首のおびただしい出血と蒼白な顔を見て鳥肌が立った。

（これは1分1秒を争う時間との戦いだ！早く救急車を呼ばないと、桑田は死ぬ！・・・そうだ！）

和人は目を大きく見開き、体育館の外に向かって走りだした。

外に出ると、あたりを見渡し、身を隠す場所を探す。

そしてプールとボイラー室の間のわずかな隙間を見つけ潜り込むと、携帯電話を靴から出した。

和人はすぐにSTOPボタンを長押し。

白い光とともに「Time must stop!」の文字が浮かぶ。

――時間が止まった。

和人はふうつと一息ついた。

「よし。とりあえず民家があるところまで行ってみよう。」

和人は声に出し歩き始めた。

10分ほど歩くと、先の方に松永の姿が見えた。

「さすがだな、もうこんな遠くまで来ていたか。でもまだ民家まで5分はかかる。」

やがてその松永に追いつき追い越した。

松永の顔は苦しそうだっ

きつと全速力で走ってきたのだろう。

「こんな時に限って車が一台も通らないなんてな・・・」

和人は静止している松永に語りかけた。

さらに和人は歩き続けた。

ずっと遠くに家の屋根が見える。

「あと少しだ。あと少しで電話ができる。」

和人はさらに歩を速めた。

そしてとうとう一軒の民家についた。

「さて、このうちの人、いてくれよ。」

言いながら和人はドアノブに手をかけた。

ガツ。

回らない。

カギが閉まっているのだ。

留守の家に上がりこんで電話をするのはさすがに無理がある。

下手すれば留置所行きだ。

「仕方ない、次の家をさがそう。」

和人は、先へ進んだ。

「あつた、家だ。しかもおじさんが庭の植木にホースで水をまいている。・・・よし。」

和人は周りを見渡し、そのおじさん以外に誰もいないことを確かめると、おじさんの後方へ回り「STOP」ボタンを押した。

「すみません、おじさん！友達が怪我しているんです。電話を貸して下さい。」

和人がおじさんの後ろから叫ぶと、そのおじさんはびっくりしてホースを放り投げた。

「おわっ！な、なんで後ろにいるんだよ。びっくりするじゃないか！」

「すみません話は後です。とにかく電話を貸して下さい。」

和人の必死の訴えに、おじさんがたじろいだ。

「わ、わかった。玄関の電話を使え。」

おじさんがそう言った時には和人はもう玄関を開けていた。

119番をダイヤルする。

ガチャッ。

「はい消防署です。火事ですか、救急ですか？」

「救急車を、すぐに緑丘中の第2体育館へお願いします！」

「第2体育館と言えば、以前に市民体育館だったところだね。」

「はい、そうです。出血がひどいんです。すぐをお願いします。」

「大丈夫です、救急車は今出発しました。けがしたのは誰ですか？どこをけがしたんですか？」

「中学生です。部活中に手首の動脈のところを切ってしまったんです。」

「君の名前は？」

「たち……、すみません急ぐので切ります。」

ガチャッ。

和人はふうつとため息をついた。

（あせった。あやうく自分の名前を言いそうになった。それにしても早く来てくれよ救急車。）

玄関の前におじさんが立っていた。

「第2体育館から走ってきたのか？大変だったね、どれ、おじさんが車で送ってやろう。」

「いえ、いいんです。電話を貸していただいただけで。ありがとうございます。」

「あ、君。」

おじさんが止めるのも聞かず、和人は飛び出していた。

そして、周りに誰もいないことを確かめると、もう一度「STOP」ボタンを長押しした。

第36話

「さあ、やれるだけのことはやった。後は桑田、お前が頑張るしかない……。頑張れ桑田。絶対に死ぬなよ！」

和人はもと来た道を引き返しはじめると、途中でまた松永とすれ違った。

松永は、留守の家のドアの前にいた。

ドアの前で口を大きくあけ、げんこつを振り上げている。顔中に汗が流れ必死の形相だ。

「松永、残念だけどこの家は留守だ。それにしても、よくがんばったな。桑田が助かったらアイスでもおごってやるからな。」

そういうと和人はその場を離れ、先を急いだ。急いでのうなるものでもなかったが、和人は桑田の状態が気になって仕方がなかったのだ。

体育館に着き、桑田のそばへ来て見ると、英が桑田の左手首をハンカチで押さえていた。

桑田は仰向けの状態で、積み上げられたバッグの上に足を乗せている。

表情は――目をつむり眉間にしわを寄せていた。

「よし、まだ意識はあるみたいだ。でもいったいなぜ手首をけがしたんだ？」

和人はゆっくりと桑田の周りを見回した。

桑田の血しぶきが広い範囲で床に散らばっている。

この血をたどるとすぐに原因がわかった。

桑田が倒れている場所から10メートルほど先に窓があり、窓を保護するために鉄の格子がついている。

その格子の左下の角の部分を止めるためのビスがかなり緩み、壁と格子の間に2センチほどの隙間ができていた。

「これか。この隙間に桑田の手が入りこんで、角の部分が手首を切り裂いたんだ。」

そう納得した和人は、体育館を出て、プールとボイラー室の間のわずかな隙間に入った。

そして、――時が動き出した。

和人が体育館に入ると、すぐに英と目が合った。

「和人、まだ救急車に連絡は取れないか!？」

「・・・近くを走りまわったけど、車も誰も通らない。でも松永が民家がある方へ走っていったから、もうそろそろ連絡が取れるんじゃないかな・・・。」

「そうか。」

「それにしても楠田先生は何をしているんだろう。」

「松永先輩に今日は遅くなるからって伝えたそうです。」

一年生の部員が和人の問いに答えた。

「たぶん臨時の職員会議か何かだ。・・・学校へは誰か連絡に行っただか？」

「はい、川本と戸高が行きました。」

「よし。」

英の目はその一年生部員をちらつと見た後、桑田の手首へ移った。

鋭い眼光。

歯を食いしばり、どんな小さな変化も見逃さないだろうと思えるほど集中している。

ピーポーピーポー・・・。

遠くから救急車のサイレン音が聞こえてきた。

英と和人が目を合わす。

「桑田聞こえるか? 救急車が来たぞ。もう少しの辛抱だ。」

英が声を張り上げた。

答えるように桑田が小さく首を縦に振った。

体育館の前に救急車が到着し、すぐに担架が運び込まれた。

そして3名の救急隊員が手際よく桑田を担架に乗せ、救急車へ運び入れた。

「桑田は・・・、桑田は助かりますか？」

英が絞り出すような声で救急隊員に聞いた。

「さあ、それはわからん、医者じゃないからな。先生は？誰か大人はいないのか？」

「いません。先生は遅れてくると言っていました。」

「そうか、じゃあキャプテンは？」

「松永ですが、今ここにはいません。」

「じゃあ、君が病院まで同行してくれるかい？」

「はい。」

「僕もいいですか？」

和人が聞いた。

「もちろんだ。さあ行こう。」

救急隊員は英と和人を救急車に乗せ後部のドアを閉めた。

第37話

「止血をしたのは君たちかい？」

桑田の腕をゴムチューブできつく縛っている救急隊員が英と和人に話しかけた。

「英がしました。」

和人が英を指さした。

「タオルではきつく締めるのは難しいんだ。このゴムチューブなら簡単だけどね。でも、よく縛っている。しかも足をあげて頭を低くしていた。応急処置は上等だ。・・・誰かに訓練を受けたのかい？」

「保健体育で習ったことがあるような気がします。」

「そうか、でも実践できるなんてすごいぞ。救急隊員になったらどうだ。」

「はあ。」

英が少し照れたような表情をしたが、すぐに言葉をつづけた。

「桑田は大丈夫でしょうか？」

「意識はしっかりしている。病院に着くのがよほど遅くならない限り、大丈夫だろう。」

救急隊員がほほ笑んだ。

「本当ですか？」

和人と英が同時に言った。

「それもこれも君たちのおかげだ、感謝状ものだぞ。」

助手席に座っている隊員が振り向きながら言った。

救急車は滝川病院に到着した。

第2体育館を出発してから5分ちよつとしか経っていない。

普通の車で法定速度を守りながら走ると10分はかかるのだが、救急車はさすがに早かった。

桑田はすぐに手術室に運ばれた。

英と和人も手術室の前に行こうとしたが、救急隊員に呼び止められた。

「患者さんのこととかいろいろと教えてくれないか。調書に書かなきゃならないからね。」

二人は聞かれるままに質問に答えた。

「いろいろとありがとう。これで大体のことはわかったよ。ただ、患者さんの電話番号と通報者だけが不明なんだよな。誰が119番したのか君たち知らないかい？」

「たぶん松永じゃないですか。真先に民家に走って行ったから。」
和人が答えた。

「木へんの松に永久の永で松永君だね。下の名前は？」

「秀樹。優秀の秀に樹木の樹です。」

「そうか、じゃあ後は患者さんの電話番号だけだな。」

「それは・・・。」

その時顧問の楠田が走ってくるのが見えた。

「今先生が来ました。先生なら分かるかもしれません。」

「そうか、じゃあ先生に聞きましょう。」

そこへ楠田がやってきた。

額から汗が噴き出している。

「橘、桑田はどこだ？」

「今手術室に入っています。」

「で、どうなんだ、容体は？」

「たぶん大丈夫じゃないかって、この人が・・・。」

楠田は救急隊員の方を見た。

「どうもすみませんでした、監督不行き届きで・・・。桑田は・・・、本当に大丈夫なんでしょうか？」

「確証はありませんが、まだ意識がありましたので、大丈夫ではないかと思います。」

「はあ、よかった！」

楠田はへなへなとその場に座り込んだ。

肩で息をしている。

「まだ安心はできませんよ、あくまでも私がそう思ったただけですから。ところで先生、この二人の生徒さんにいろいろと話を伺ったんですが、患者さんの電話番号がわからないんですよ。」

「それは、学校へ電話すればすぐにわかると思います。教頭先生がいましたから。」

楠田が携帯電話で学校に電話をし始めるのを見て、和人と英は、手術室の方へ向った。

第38話

「そうか、ここは和人の母さんが亡くなった病院だったな。」
まったく迷いなく手術室へ向う和人を見て、英が言った。

「うん……。」

「あの時は病院に来れなくてすまなかった。」

「いいんだ。対抗戦も控えてたし……。」

二人は手術室の前に着いた。

ほかの人はまだ誰も来ていない。

二人はソファアーに並んで座った。

「でもあの時、……ほら葬式の後には、英が俺に『ごめん』て言
ったよな。」

「そうだったかな？」

「とぼけるなよ、確かに言った。」

「ふーん、なんで謝ったわけ？……そうだ、ほら、今言ったこと
だよ。病院に駆け付けられなかったことさ。突然なに思い出してるん
だよ。」

「……ずっと気にしてなかったけど、今日のこと思い出したん
だ。」

「今日のこと？」

「ああ、松永に桑田のことを聞いた時、お前変なことを言ったよな
？」

「えっ？」

「確か、『何でこんな大事なことを忘れてたんだ。』って。」

「……そうかな？よく思い出せない。」

英は明らかに動揺していた。

視線があっちに行ったりこっちに来たり、できるだけ和人と眼を合
わせないようにしているようだ。

「わかってたんじゃないのか？俺のお母さんが死ぬことも、桑田が

大怪我することも。」

和人が英の眼を見つめて小さな声で聞いた。

「そう言えば、俺のお母さんが死ぬ何日か前に、部活の居残り練習を手伝おうとしたら、お母さんが具合悪そうだから早く帰れって言ったこともあったな。」

「ばかなこと言うなよ。頭おかしくなったんじゃないのか？・・・やれやれ受験勉強のしすぎだな。」

英がソファァーから立ち上がりかけたその時、廊下を駈けてくる足音が聞こえた。

桑田の母親だった。

和人は桑田の母親の顔を知らなかったが、その人の表情を見たとき、桑田の母親だと確信した。

「純一はこの中にいるの？」

桑田の母親は英に聞いた。

「はい。」

「どんな様子だった？血がいつぱい流れていたの？息はしてた？」

「気は失っていませんでした。救急隊員の人がたぶん大丈夫だろうって言っていました。」

「そう・・・、そうなの・・・。」

桑田の母親はふうつと息をつき、ドスンとソファァーに座った。

そして洋服の袖で額の汗を拭きはじめた。

ハンドバックもハンカチも、何も持ってきていないようだ。

ただ、財布だけ右手につかんでいた。

「ごめんなさいね、とり乱しちゃって。君たちは確かサッカー部の先輩ね。」

「はい、僕が園山といって、こっちが橘です。僕たちも救急車に乗って来ました。」

「ありがとう。純一をみていてくれたのね。まあ、こんなに血が付いているわ。制服はこれでクリーニングしてちょうだい。」

英の制服の上着にはたくさんの血が付いていた。

黒の学生服で遠くからは血の付着に気付きにくいだが、近くで見るとはつきりとわかる。

桑田の母は財布から五千円札を出し、英に渡そうとした。

「いえ、そんな、大丈夫です。」

「ううん、これは受け取ってもらわないと困るわ。でももしかしたら買い替えないといけないかもしれないわね。その時は弁償させてもらうから。」

桑田の母は、英の手に五千円札をつかませた。

「それにしてもびっくりしたわ。松永くんから電話をもらった時はあわてちゃって、ほら、このスリッパ右と左が違うでしょう。財布だけつかんでタクシーに飛び乗ってきたわ。」

確かに桑田の母のスリッパは、左右どちらも黒色だったが、あきらかに形が違っていた。

その後続々と人が集まってきた。

楠田、桑田の父親、兄弟、祖父母、学級担任、サッカー部員、クラスメートなど、わずか30分の間にその数は50名を超えていた。

やがて、医師と看護婦が出てきた。

医師は、桑田の家族に手術が成功し、輸血と点滴を続ければ翌日には歩けるだろうということと、今のところ桑田は眠っているので、家族以外は病室に入ることができないということを告げた。

和人と英は、桑田に会うことなく楠田の車に乗せられ、帰宅した。

第39話

翌日の学校は、桑田のけがの話題でもちきりだった。

和人はクラスの皆から質問攻めにあい、なかなか勉強に身が入らない。

「なあ、もう俺が知っていることは全部話したよ。いい加減に勉強しようぜ。受験は明後日なんだから。」

「そうは言ってもなあ、受験生にはショッキングすぎるぜ。・・・血つて手首からどんなふうに流れたんだ？」

おしゃべり好きの北島の質問は止まらない。

そこへ、2年の松永が廊下を通りかかった。

「おつ、ちょうどいいところに松永が来た。俺なんかより松永の方がずっと詳しいぞ。なんて言っただけがをする瞬間を見たんだから。」

「けがする瞬間は見てませんよ。叫び声のする方を見たら桑田の手から血が噴き出していたんですから。」

松永の発言で、クラス中の目が松永に集まった。

「松永君、それからどうなったんだ？」

案の定、北島が飛びついた。

「え、え〜と・・・僕は一刻も早く救急車を呼ばなくちゃと思って、携帯を持っていてる人を探しに外へ出たもんで、そこから先はわかりません。」

「わからない!？」

「はい、残念ながら。」

「それだけ?それじゃあ救急車に乗った和人の方が、まだましじゃないか。」

「そういうことになります。」

「なあんだ、つまんねえの。それで・・・松永君はすぐに救急車を呼べたの?」

「それが・・・、人が住んでいる家の方へ走って行っただけです。その途中で携帯を持っている人に会えばいいし、会わなければ民家の電話を借りようと思って。でも、誰にも会わないし、民家に着いた時にはちょうど救急車のサイレンが聞こえてきました。」

「え？でも民家まではかなり遠いだろう？」

「10分以上全力で走りまわった。」

「で、自分より先に誰かが救急車を呼んだわけだ。」

「はい。」

「ぶっ！と、ごめんごめん。でもそれおもしろすぎるぞ、はっはっは。」

「・・・。」

見るに見かねて、和人が口をはさんだ。

「おい笑うなよ、松永は必死に走っただけ。桑田が死ぬかもしれないと思って。・・・悪かったな松永、もう行つていいぞ。」

「はい。でも僕、橘さんに聞きたいことがあつて来たんです。」

「聞きたいこと？」

「はい。救急車を呼んだのが誰か知りませんか？」

和人は少しどきつとした。

「残念ながら知らないな。救急隊員の人も知らないみたいだった。おそらく携帯を持っている人が体育館の近くを通りかかったんだろうな。」

「それが、携帯からじゃなかったんです。」

「えっ？」

「昨日救急隊員の人から僕の家に電話があつただけです。楠田先生から電話番号を聞いたって言って。で、その人の話だと、その時の電話は池田さんという家からかけられたそうです。」

「池田さん？」

「僕が走って行つた先の家です。正確には2件目の家だったんですが、1件目は留守だったんで。」

「その池田さんが救急車を呼んだと？」

「いえ、それが・・・中学生が池田さんの家にやってきて、電話を借りに来たらしいんです。」

「それってお前のことだろ？」

「だから、僕がその家に着いた時にはすでに救急車のサイレンが鳴っていたんですって。」

「わけわかんねえな。お前、桑田が怪我したとき真っ先に飛び出したんだろ？」

「そうです。」

「しかも民家までは一本道。」

「そうです。」

「足の速いお前が全力で走って抜かれるわけないしな。・・・わかった、お前途中で立ちションしただろ、立ちション。その時に抜かれたんだよ。」

「立ちションなんてしてませんよ。」

「じゃあ、どういうことだ？」

「わかりません。何が何だかさっぱり・・・。」

すると、このやりとりをじっと聞いていた北島がニヤニヤしながら口を開いた。

「ミステリーだ！こりゃあおもしろくなってきたぞ。」

北島は歩きながら熱弁をふるいだした。

「俺が推測するに、その電話を借りに来たという中学生は、恐らく幽霊だな。しかもとってもやさしい幽霊だ。たぶんその幽霊は女で、第2体育館に彷徨っていたんだ。そしてサッカーをする桑田少年に恋をした。きっとそうだ、その中学生は女だったんだろ、松永君。」

「松永はもう行ったよ。」

和人がぶっきらぼうに答えた。

第40話

「よう英、桑田の見舞いにはいかないのか？」

下駄箱で靴を履きかけている英に、後から来た和人が話しかけた。

「楠田の話だと桑田のやつ、ぴんぴんして歩き回っているらしいぞ。おとなしくベッドに寝ていれば見舞いのし甲斐もあるんだけど、歩いてるんじゃない意味ないだろ？」

「へえ、そうなの？じゃあ俺も行くのはやめにしよう。ところで徹也はどうした。」

「ああ、風邪で学校休んでるよ。」

「風邪？受験前なのに……。」

「ほんとドジだよな。昨日の雨で徹也のズボンけっこう濡れてて、体操服に着替えるって言ったんだけど着替えなかったからな。あれで体が冷えたんだ。いつそのこと上着も濡れてりや着替えたかもしれないなかったけど。」

「……しまった。」

「ん？なにが『しまった』なんだ？」

「いや、何でもない何でもない。」

和人はあわててごまかした。

二人が校門を出て5分ほど歩いたところ、急に英が真剣な顔をして話し出した。

「ところでな、昨日手術室の前で俺に聞いただろ？桑田がけがするのを知ってたんじゃないかって。」

「ん？ああ、言ったな。」

「実は確かにその通りなんだ。だけど忘れてしまった。」

「どういうことだ？」

和人がごくんとつばを飲み込んだ。

「驚くなよ、これは誰にも話していないことなんだ、千波にもな。」

「……。」

「和人、昨日見た夢を覚えてるか？」

「えっ？突然何言い出すんだよ。」

「朝起きた時は覚えていても、ほんの2、3分で忘れてしまつような。」

「それがどうした？」

「見たんだ。二週間前だったか一月前だったかわからないけど、確かに見たんだ、受験の3日前に桑田が大怪我する夢を。」

「まさか……。」

「信じるか信じないかはお前の勝手だ。」

「予知夢ってやつか……。」

英がうなづいた。

「予知夢に最初に気づいたのは、練習試合だ。」

「練習試合？」

「ああ、西部地区対抗戦が始まる1ヶ月くらい前にやっただろ？ほら、俺のチームがお前や清水、松永たちの最強チームに勝つたじゃないか？」

「あれか。」

「あの練習試合の何日か前に、見たんだよ。コーラをお前からおごってもらつ夢をさ。コーラを飲みながら思ったんだ、あれ、このシンは確か夢で見たよなつて。それから何度か同じように夢が現実になることがあったんだ。」

「……俺のお母さんが死ぬ夢も見たのか？」

英が目をつむりながら首を縦に振った。

「正確には対抗戦の1回戦、葉山中との試合の夢だった。試合が始まる前に楠田がお前の母さんが亡くなったことを告げたんだ。そして清水が2回戦、3回戦と勝つてお前を迎えようつてげきを飛ばした。」

「……そしてその通りになった。」

「ああ、でも夢がすべて現実になるとは限らないんだ。夢と違うこ

とが起きたり、突拍子もない夢を見たりしてさ。だから、お前の母さんも本当に死んじゃうかどうか確信がなかった。」

「そうか。」

和人がそう言ってから、二人はしばらく無言で歩いた。

やがて前川サイクリング店の前の交差点についた。

「それで・・・」

和人が不意に声を出したため、英が少しびっくりしたようにぴくつと動いた。

「それで、明後日の受験、お前合格するのか？」

英が首を横に振った。

「わからない。受験に関しては何にも夢を見ないんだ。・・・でもはつきりと言えることがある。」

「えっ？」

「それはお前が間違いなく合格するってことだ。」

英がにっこり笑った。

「さあ、どうだかな。」

和人もつられて笑った。

「ところで和人、明後日は何時に行く？」

「そうだな、8時45分までに受付しなきゃならないから、ちよつと早いけど7時半にここで待ち合わせっていうのはどう？」

「よし決まった。受験票だけは忘れるなよ。お前の場合、それさえ忘れなきゃ落ちることはないからな。徹也には俺から連絡しとくよ。じゃあ明後日7時半な。」

「じゃあ。」

和人は軽く手をあげて、英と別れた。

「予知夢か・・・。本当にあるのかな、そんなことが・・・でもまあ、俺の場合もつとすごいことが起こっているもんな・・・。」

和人はぶつぶつ呟きながら歩いて行った。

第41話

「さあ、今日はお父さんが腕によりをかけて作ったトンカツだ、味わって食えよ。」

高校受験の前日の夜、和人が居間に入ると父がニコニコしながら話してきた。

ほとんど料理をしたことがない父であったが、母が亡くなってからというもの、本を片手に料理に取り組み、今ではなかなかの腕前になっていた。

「おつ、うまそうじゃん。」

和人はすぐに箸をつかんだ。

「そうだろ、サラダも食えよ。牛乳もあるし、デザートはミカン。」

「いっただきまゝす。」

「ほら、味わって食えと言っているだろ。」

「味わってるよ、すげえおいしい。」

「そうか。・・・ところで和人、明日はいよいよ受験だな。今日はゆっくり休めよ。」

「うん、明日早いからね。」

「でも、今更こんなこと言うのもなんだが、修学館狙ってみるのもおもしろかったけどな。お父さんの転勤だって、そう遠くに決まるとは限らないし、仮に遠くになったってその時はおばさんちに下宿させてもらえばいいんだから。」

「いいんだ。修学館のサッカー部では北高と張り合えないし。」

「西城のサッカー部って、そんなに強いのか？」

「今年はだめだったよ、レギュラーのうち3年生は4人しかいなかったから。でも、来年はいい線行くと思うんだ。」

「北高に勝てるかもしれないのか？」

「難しいと思う。でも勝てなかったとしてもその次の年か、その又次の年、つまり俺の高校3年間で必ず勝つ。」

「ほう、頼もしいな。」

「やれそうな気がするんだ、英がいれば。」

「園山君か。そんなにすごいのか？」

「この半年間でもものすごく伸びたんだ。何といっても北高の和田監督がスカウトに来たくらいだから。」

「えっ？和田監督が、本当に？」

「うん。そしてその誘いを蹴った。」

「何？断った？どうして？」

「英は極端に持久力がないんだ。北高に入ってもあの厳しい練習についていけないだろうからって。」

「・・・驚いたな。」

父・浩一郎は本当に驚いたらしく、箸を置き腕を組んで首をかしげた。

「でもひとつ大事な問題があるんだ。」

「大事な問題って？」

「英が西城に入る確率は5%しかないってこと。今でこそテストで赤点を取らなくなったんだけど、1学期の終わるころまでは学年ワースト1の成績だったんだ。」

「それはまた、よく西城を受験する気になったもんだ。・・・とすると、高校3年間で北高に勝つのは可能性が薄いな。」

「英は西城に受かるよ。」

和人は当然のように言った。

「なぜ？」

「何となく。・・・とにかく英が本気になれば何だってできるような気がするんだ。」

「園山君は前はよく家に来ていたけど、このところ会っていないかな。そんなに変わったのならぜひ会って話をしたいもんだ。」

浩一郎がようやく食事をし始めようとしたところ、和人はもうほとんど食べてしまっていた。

「御馳走さま。明日の用意をして早めに寝るよ。明日7時半に前川サイクリング店に待ち合わせだから、6時半に起こしてくれない？」
「6時半だな、わかった、まかしとけ。目覚ましを5つくらいかけて寝るから大丈夫だ。」

浩一郎は早速携帯を取り出し、アラームをセットし始めた。

（そうだ、念のため今晚携帯を充電しておこう、何が起きてもいいように。）

浩一郎の持つ携帯を見つめながら和人は思った。

第42話

翌日、和人は6時前に目が覚めた。

すぐに受験に必要なものがそろっているかどうかを確認し、鞆にづめる。

（そうそう、これも持っていかなきゃな。）

和人は昨夜充電しておいた携帯電話を取り、学生服の内ポケットに入れておいた。

窓を開けてみると、風が部屋に吹き込む。

ちよつと冷たいがさらつとしていて気持ちよかった。

今日は天気もよさそうだ。

やがて、父の寝室から目ざまし時計のアラームがいくつも聞こえてきた。

どこか物音がしアラーム音が次々に消えていく。

「和人、起きろ！6時半になったぞ。」

廊下から父の声が聞こえてきた。

和人は部屋のドアを開け、

「もう起きてるよ。」

と言った。

ドアの前には父が立っていた。

「おつ、さては緊張して早く目が覚めたな。それともまさか眠れなかったとか？」

「すっかり寝たよ。さっき起きたばかりなんだ。」

「それならいいが・・・、ところしちゃおれん、急いで飯の支度をしなきゃな。」

言いながら父は台所へと急いだ。

和人が顔を洗いで着替えを済ませて居間に行くと、すでに食事が用意されていた。

「さあ、超特急で作った純和風料理を召し上げ。」

「へえ、本当に早いね。」

「実はすべて昨日作っておいて、温めるだけにしておいたのだ。」

父は自慢げに言った。

テーブルにはごはん、みそ汁、アジの干物、目玉焼き、牛乳がのっている。

和人はすぐにそれらを平らげ、用意を済ませると元気よく家を出た。

（さて、英と徹也はちゃんと用意できてるかな？）

前川サイクリング店の前に着くと、すでに徹也が待っていた。

「早いな、徹也。俺が一番だと思ったのに。」

「家の前で待ち合わせなんて、ちよつとプレッシャーだぞ。親にせかされて落ち着けるもんじゃない。」

ふと前川サイクリング店の窓を見ると、徹也の両親がこちらを見て手を振っている。

和人は軽く会釈した。

「なつ、ずっとこつち見てるだろ？」

「親心だな、うちのお父さんだって今日はテンションが上がったもの。」

「英は何分に来ると思う？」

「どうせぎりぎりだろ、28分とみた。」

「俺は33分だな。英んちの親はのんびりしているから、たとえ受験の日だとしても俺たちみたいに早く来ることはないさ。」

「それはそうと、風邪は治った？大雨の日に風邪ひいたんだろ？」

「ああ、根性で治したよ。おかげで最後の復習ができなかったからちよつと不安だけど。」

「先生に言ってジャージに着替えればよかったんだよ。」

「まったくだ。濡れたのがズボンだけだったから油断したんだな。」

「やっぱり・・・、余計なお世話だったのか。」

「何が？」

「あ、いや何でもない、何でもない。でもお前はいいよな、私立海陽に受かっているから西城に落ちても問題ないし。」

「まあな、俺にとってはどっちの高校でもいいからね。でも和人だつて落ちる心配はないから、一番心配なのは英だな。あいつ落ちたら本当に浪人するのかな。」

「さあ、どうだろう。あいつの考えることは最近分らないから。」
「確かに。」

「おつ、来た来た、走ってきたぞ。でも残念ながら1分くらい遅刻だな。」

「きつと今走り出したんだ。それまではずっと歩いていたはずだ。」
英が到着した。

「はあ、はあ、少しだけ遅刻したかな。」

「ずっと走って来たの？」

「当たり前だろ、和人。はあ、この荒い息遣いを、はあ、見りやあわかるだろ？」

「それにしても汗一つかいてないな。」

徹也はそう言いながら和人と眼を合わせて笑った。

第43話

3人は20分ほどで緑丘駅に着いた。

受験会場の西城高校がある町田駅までは電車で15分かかる。

そこから5分歩けば受験会場だ。

電車の待ち時間を考えても、受付終了時間には十分に間に合う。

「英、何度もあくびをしているってことは、寝不足なんじゃないか？」

「あくびっていうのは緊張しているときにも出るもんなんだよ。俺にとっては今日が一世一代の大勝負なんだ。受かって当り前のお前や、落ちてもどうってことない徹也と一緒にするんじゃないか。」

「ということはちゃんと寝たんだな？」

「寝たよ。なかなか眠れなかったけど。」

「何時間くらい眠ったんだ？」

英が少し下を向いた。

「・・・実は4時間くらいなんだ。寝ころんだのは早かったんだけど、なかなか寝付けなくて眠ったのはおそらく2時半すぎだな。」

「大丈夫かよ。」

「コーヒー飲んできた。」

「それで最後までもてばいいけど。」

「休憩時間にも飲むよ、ほら。」

英は切符の自動販売機の前で鞆を開けて、和人と徹也に中身を見せた。

缶コーヒーが3本入っている。

「そういうところはちゃっかりしてるんだよな。え」と、250円分買えばいいんだな？」

徹也は財布を取り出し、販売機にお金を入れた。

「250円ね、え」と財布、財布・・・。」

英が財布をズボンのポケットから出そうとしたとき、鞆が肩から外れて床に落ちた。

ガチャン、コロコロ・・・。

缶コーヒーが床に散らばる音だ。

英が鞆を閉めていなかったために、缶コーヒーが2個、鞆から飛び出し床を転がってしまった。

「わっ、やべえ！和人そっちのを取ってくれ。」

英は真下に落ちているのを取ろうとしたが、販売機の前は人だからできていたため、缶コーヒーは何人かの足に当たり3メートルほど離れた所まで移動した。

「ちくしょう、だせえ。」

言いながら英は小走りに移動して缶コーヒーを拾った。

和人もあわててもう一本を拾う。

「ほら、英。同じ学校のやつに見られなくてよかったな。」

和人が英に缶コーヒーを渡した。

「まったく。早く来たのが幸いしたぜ。」

英は缶コーヒーを受け取り鞆に入れると、今度はすぐに閉めた。

徹也はすでに切符を買い、改札の方で待っている。

「徹也のやつ、他人のふりをしているぜ。友達がいない奴だな。」

「いいから急ごうぜ英。」

和人と英は切符を購入し、徹也の方へ向った。

「あははは、うけたぞさっきのは。」

改札を抜けた後、徹也が立ち止まり笑った。

「いいから行けよ、できるだけ早い電車に乗ろうぜ。」

英は少しむっとしたようだが、話に乗らなかった。

階段を降りていると電車が止まっているのが見えた。

発車のベルがちょうど鳴っている。

「おっ、ラッキーだ、乗り込もう。」

徹也の声に和人と英が頷く。

3人は駆け出し、ベルが鳴り終わらないうちにその電車に乗り込んだ。

電車の中の椅子はすべて空いておらず、通路にも人がぎっしりと立っている。

3人は仕方なく扉近くの吊皮を握った。

それから町田駅までの15分間は3人ともほとんど無言のまま過ごした。

「はあ、息が詰まるかと思ったよ。」

町田駅を出ると、英が背伸びをした。

「でもまあ、かえって眠くならないでよかったじゃないか。」

「さすがポジティブ和人君、言うことが違うねえ。」

「からまない、からまない。ところで今さらだけど英、忘れ物はしてないよな。」

徹也がふと気になったことを聞いた。

「当たり前だろ、さっきも言ったように一世一代の大勝負なんだ。

何回も点検したよ。」

英は歩きながら鞆を開けた。

「筆記用具に受験票、筆記用具に……。あれ、受験票が、受験票が……。」

英の声がか細くなった。

顔も見る間に真っ青になっている。

「まさかテレビドラマじゃあるまいし、受験票がないなんて言わないよな？」

徹也が英の顔を見つめた。

「……。ない。受験票が、本当はない。」

英が茫然自失の表情でつぶやいた。

第44話

「まじかよ。よく探してみろよ。」

和人が英の手から鞆を取り上げ、中を探してみた。

徹也もすぐに近寄って鞆の中を覗き込む。

英は・・・その場に座りこんだ。

「家を出る前にしっかり確認したんだ。その時にはちゃんと鞆の中に入っていた。」

英は二人が鞆の中を搜している様を見ながら力なく話した。

「あっけなかったなあ、今日の受験で俺の人生は変わるかもしれないかったのに。いや、変えてみせるつもりだったのに・・・、ちくしろう！」

英はそう吐き捨てるように言い、天を仰いだ。

「英、あきらめるのは早いぞ。ダメもとで探しに行こうぜ！」

「無理だよ、徹也。受験票が無くなったのはおそらく缶コーヒーを落とした時だ。電車であの駅に戻って受験票を探して、見つけてまた電車で戻ってくるとしたら、受付時間をオーバーするに決まっている。」

「電車を使えば確かに間に合わないかもしれないけど・・・。」

徹也が英の眼を見つめながら言った。

「そうか！タクシーを使えば各駅停車の電車より早く着ける！」

英の目が輝いた。

「和人鞆をくれ、俺は最後のあがきをしてくる。間に合わなくてもお前たちは気にせず受験に集中してくれ。」

英は和人から鞆を受け取ると駅へ向って走り出した。

駅へ戻ればタクシーが数台止まっているからだ。

駅は30メートルほど先の角を左に曲がってすぐそこだ。

「待てよ、お前はどうせお金を持っていないだろう？俺も一緒に行くよ。」

徹也が言いながら追いかけて来た。

「徹也、何を言ってるんだ。もし間に合わなかったらどうするんだよ。」

「どうするって、俺の場合は間に合わなくてもどうってことないよ。それに一人より二人で探した方が早く見つかるじゃないか。」

「だめだ、戻れ。」

「戻らねえよ。」

「いいから戻れ。戻らないと絶交だぞ！」

「絶交か、それもいいかもな。」

「・・・正気かよ、どうなっても知らねえぞ。俺のせいじゃないからな！」

二人は角を曲がり、和人の視界から消えた。

その時和人は右足の靴ひもを結ぶ格好をしていた。

うつむき加減で左足を跪いている。

だが右足の靴の上にある両手は、靴ひもを持っていない。

持っているのは開いた状態の携帯電話だった。

和人の正面10メートルほど前からは、二人の男性が和人の方に向かって歩いてきているし、その後ろからも5人の姿が見える。

後方もやはり10メートル近く離れた所を何人かが歩いている。

身を隠すようなものは和人の周りに何も無い。

このような状態で時間を止めるのは初めてだった。

時間を止めることには問題ないが、後で時間をスタートしたときに和人の体が時間を止めた時と同じ位置で、同じ姿勢をしていないと、周りの人に異変を気づかれる恐れがある。

だが、今の和人にとっては一刻の猶予もなかった。

和人は二人が角を曲がったのを見届けると、躊躇なく「STOP」

ボタンを長押しした。

第45話

「止まった？・・・か。」

和人はそのままの姿勢で顔をあげ、辺りを見回した。確かに時は止まっている。

和人は自分の足もとに目を移した。

1メートルほど右側に街路樹があり、その根元から自分の方に卵ほどの石がひとつ落ちている。

その石をつかむと、和人は右足の靴をなぞるように石のどがつた部分で歩道に線を描いた。

次に左足のひざの部分、最後に左足のつま先の部分を同じようになぞると、その石を元の場所に置いた。

そしてゆっくりと立ちあがる。

「とりあえずこれでいくしかないか。」

和人の足もとには3つの楕円が描かれていた。

「それにしても英はやってくれたな。探しに戻ったって間に合うわけじゃないじゃないか。朝のラッシュアワーだから、タクシーも飛ばせやしない。どちらかと言えば電車の方が速いだろう？」

和人は駅の方へ歩き出した。

角を曲がるとすぐ近くに英と徹也の姿があった。

二人とも必死の形相で走っている。

「待つてろよ。俺が探し出してくるから。」

和人は二人を追い越し、駅へ入ろうとしたが、急に立ち止まった。

「電車は動かないのに俺は何で駅へ来たんだ。・・・おいおい、歩くとなると片道1時間はかかるぞ。うっそだろっ！」

和人は肩を落とし、車道を歩こうと引き返した。

そのとき、和人は駅へ向っている（今は止まっているのだが）ある

ものを見つけ、ひらめいた。

そのあるものとは、和人の目の前10メートルほど先でおばさんが乗っている自転車だった。

自転車を使えばずいぶん楽に移動できる。

ただし、人が乗っている物はやめた方がいいと和人は思った。

物であれば移動した後には元の位置から少しずれても問題はない。

しかし止まっている人の手や足は、正確に元の場所へ戻す必要がある。

そうでないと、時間が再起動した後にはその人が違和感を感じるはずだし、さらに自転車だと転倒するかもしれない。

和人は自転車置き場へと移動した。

「おつ、あれなら良さそうだ。」

和人が目をつけたのは会社員のような服装をした人が乗ってきたばかりの、サイクリング用の自転車だった。

その自転車はスタンドを下ろして立てかけており、今からちょうど鍵をかけるところのようだ。

しかも都合の良いことにその人は自転車には全く触れておらず、右手に持った鍵を見つめている。

これならその人に触れずに自転車を動かすことができるし、少しくらい戻す位置がずれても気づかないだろう。

和人は鞆をその場に置いた後、他の何にも触れないように、自転車のハンドルを握って後方に移動した。

そして慎重にスタンドをあげてみる。

スタンドは通常であれば勢いよく上がるはずだが、止まった時間の中ではゆっくりとしか上がらない。

「ちゃんと動くのかな？」

和人はサドルにまたがり、ペダルを踏んでみた。
動く。

だが、通常に比べてペダルが重いような気がした。

ギアを一番軽いところにあわせるとずいぶん軽くなったが、やはり通常よりは重い。

なぜかはわからないが、そういうものなのだろう、と和人は思った。

歩道は人が邪魔になるから車道を走った。

交差点の赤信号も関係ないし、車線変更もお構いなしだ。

無音の空間で、自転車のペダルが回る音だけが低くからからと鳴った。

「ようし、この分なら30分もかからずに緑丘駅に着けるぞ。」
和人はそう言うと、自転車のスピードを上げた。

第46話

「何年振りかな、遊園地に行くなんて。」

「私もよ、大学3年生の時以来だわ。」

30代後半くらいの夫婦が、歩きながら話している。

「私は行ったことないのよね？」

お母さんと手をつないでいる小学校2年生くらいの女の子が、二人を見上げて言った。

「もちろん初めてよ。楽しみね、いつぱいいろんな乗物に乗ろうね。」

「でも怖いのは絶対に乗らないからね、絶対乗せないでね。」

「お父さんも怖いのは苦手だなあ。ジェットコースターなんかに乗る人の気がしないよ。」

「えー、怖いからいいんじゃない！ぐるんぐるん回るジェットコースターに私は乗るわよ。」

「お母さんだけ乗ればいいよ。俺は加奈といっしょにお母さんが乗るところ見てるから。」

やがて3人は緑丘駅へと着いた。

「さて、切符売場はこっちだったな。」

「待ってあなた、加奈ちゃんに切符を買ってもらおうと思うの。加奈ちゃん、できる？」

「うーん、できるかな？」

「大丈夫よ、ほらあそこの販売機にこの千円札を入れて、350円で書いたボタンを2回押すのよ。そうしたら350円の切符が2枚出てくるからね。そして加奈ちゃんの切符は170円よ、170円のボタンを1回押すの。」

「350円を二つと170円を一つね。」

「そしてその後に、販売機の下の方に『おつり』と書いたボタンが

あるから、それを押しておつりも持つてきてね。」

「わかった、行ってくるね。」

女の子は千円札を受け取ると、販売機の方へはりきって歩きだした。
「頼んだわよ、お母さんたちこの椅子に座って待ってるからね。」

その女の子の後ろ姿に向かって母が言った。

「大丈夫かな。」

「大丈夫よ、切符を買うところは何回も見ているから。」

そついうと母は3人掛けの椅子に座り、夫へも座るように目で促した。

娘は10メートルほど先の切符販売機の方へまっすぐに向かい、到着すると迷わず千円札を吸い込み口に入れた。

そして同じボタンを2度押し、違うボタン1度押す。

そこで女の子は両親の方を見てにこつと笑い、出てきた切符をつかむとスカートのポケットに入れ、両親の方へ歩き出した。

だが、母が首をかしげている。

女の子ははつとして販売機に戻り、「おつり」ボタンを押した。

もう一度両親の方を見ると、どちらも首を縦に振り微笑んでいる。

安心して女の子はおつりを握り、それもポケットへ入れもう一度戻り始めた。

だがすぐに何かが気になったらしく、急に立ち止まった。

そして左に3歩ほど歩き、かがんでその何かを右手でつかむと、ばたばたと走ってきた。

「行ってきたよ。ちゃんとできたからね。」

そついうと女の子はポケットから切符とおつりを出して、母の手のひらに置いた。

「よくできたわね。うん、間違いないわ。さすがにお母さんの子だわ。」

「俺の子でもある。」

「そうね、おつりを取らずに戻りかけたところはお父さんの子らしいわ。でも・・・。」

母親は目を女の子の右手に移した。

「何を拾ったの？」

「何だかわからない物。」

女の子はその何かを母親の目の前に出した。

時が止まったのは、その瞬間だった。

第47話

和人の乗った自転車は、思ったとおり30分ほどで緑丘駅へ着いた。といつても、時間が止まっているのだから和人の感覚でしかない。和人は自転車を止めると、すぐに駅の中へと進んだ。

駅の中は多くの人で密集していた。

ちらほらと受験生らしき中学生の姿も見える。

改札口には同級生の女子が二人歩いていた。

「おっ、川口と大野じゃないか、それほど寒くないのに二人ともマフラーなんかしちゃって、おしゃれのつもりか？それに髪型もいつもと違うみたいだし、大変だな女って。」

和人は人に触れないように、かなり遠回りをしながら缶コーヒーが落ちたあたりへ慎重に移動した。

「さて、だいたいこの辺りのはずなんだが、受験票は・・・落ちていないな。」

和人は視線を徐々に広げていった。

しかし、それらしきものは見当たらない。

「まさかとは思うが・・・。」

和人の目にとまったものは壁際のゴミ箱だった。

近づくとそのゴミ箱は三つに仕切られているのがわかった。

「燃えるゴミ」、「カン」、「ペットボトル」と右から順に蓋に張り紙がしている。

和人が「燃えるゴミ」の蓋を開けてみると、紙くずが箱の3分の1ほど入っていた。

和人は手を箱の中へ入れ、紙くずを少しずつ箱の外に置いていった。だが残念ながら受験票は見つからなかった。

和人は紙くずをゴミ箱に戻した。

次にカンとペットボトルの蓋も開けてみると、どちらも半分くらい埋まっている。

迷わずそれらをゴミ箱から取り出し空の状態にした。

「やっぱり入ってないか・・・。」

受験票が入っていないのを確認すると、和人はカンやペットボトルを戻した。

「ゴミ箱に入っていないとすると、考えられるのは・・・、誰かが拾って駅員さんに預けたというパターンだな。」

和人は駅員が出入りする事務室の方へ行き、窓から中を覗いた。

だが、デスクの上にはそれらしきものは見えない。

「ここからじゃよく見えない。」

空いている窓から和人はそつと中に入った。

部屋の中には名札をつけた3人の事務員がいる。

だが、3人とも淡々と仕事をしている風で、受験票を預かったような特別な表情はしていない。

机の周りにも部屋のどこにも受験票は見当たらなかった。

「まずい、本当にない・・・。」

後で英がこの部屋にきて、途方に暮れる表情をするのが目に見えるようだった。

和人は部屋の外に出て周りを見渡した。

「あきらめるな。どこかに、どこかにきつとあるはずだ。」

しかめっ面をして、もう一度床をすべて見直した。

ゴミ箱の下、会社員が切符を買ったために床に置いたバッグの下、歩いている人の靴の下に受験票の端がないかどうかまで、しっかりと確認した。

だが、やはりどこにも見当たらなかった。

和人は次に改札を抜けて、ホームに行ってみた。

そして、ホームの端から端までくまなく探した。

もしかして、風に吹き飛ばされたかもしれないと思い線路の上にも下りてみた。

だが、しばらく探しても見つからなかった。

「この駅には本当にないかもしれない……。とすると、英の家からここに来るあいだの道か、それともさっき乗った電車の中か。」
和人は天を仰いだ。

「……もしかしたら今日はとても長い一日になるかもしれないぞ。」

和人はため息をつき、駅の入り口まで戻った。

「少し休憩してから、英の家の方へ行くでしょう。」

ちょうど3人掛けのベンチが、一人分空いている。

和人はそこに腰を下ろし、隣に座っている30代後半くらいの女性の方を見た。

女性の横の席には同年代の男性が座っており、女性の膝もとは小さい女の子が立っている。

どう見ても親子だった。

母親は娘の顔を見てほほ笑み、娘はまん丸い目で母を見上げている。自分にもこういう時期があった。

お父さんとお母さんと自分の3人でデパートへよく行った。

お母さんはこの母親のように自分を見ていつも笑っていた。

自分はお母さんの笑顔が大好きだった。

だが、その優しかったお母さんはもういない。

和人は女の子がとてもうらやましくなった。

「お母さんにいっぱい甘えるんだよ。」

女の子に語りかけながら席を立ちあがった和人の目に、あるものとびこんだ。

座っているときには女の子の手の甲でちょうど死角になって見えなかったが、女の子の手にしっかり握られている白くて四角い紙。

「まさか！」

和人は椅子の裏に回り、その紙がよく見える位置に立った。それはまぎれもなく受験票だ。

「あつた！ついに見つけた！」

和人の声が駅の中にこだました。

第48話

和人は女の子の指を拡げ、受験票を抜きとった。

やはり英の受験票だ。

「握っていた紙が消えたらびっくりしてしまうだろうな。そうだ・・。」

和人はもう一度事務室の窓から中に入り、事務員が胸に付けている名札を取り外した。

そして、女の子の手にその名札をつかませた。

「これでよし、あとは町田駅に戻るだけだ。」

和人は駅を出て自転車に乗ると、町田駅を目指してペダルを漕いだ。

「この自転車のおかげでずいぶん楽になった。これがなかったらくたくなっていただろう。」

和人は口笛を吹いたり歌を歌いながら帰路を楽しんだ。

町田駅に着くと、自転車を戻し時間を止めた場所へ向った。

途中、曲がり角を過ぎ、3メートルほどの地点に受験票を落とす。

あとは時間を止めた場所の地面に石で描いた楕円へ、両足と左ひざを合わせて携帯電話を開いて持った。

「さて、時間再開だ。」

携帯電話が白く光り、人が動き出した。

「おい、英、もどってこい！あつたんだ、道に落ちてた！」

和人が曲がり角のところまで走ってきて叫ぶと、英と徹也が踵を返して戻ってきた。

「なんだって？和人、本当か？」

「ほら見てみるよ、間違いなくお前の名前が書いてある。」

英は受験票を受け取ると、まじまじと見つめた。

「いったいどこに落ちてたんだ？」

「あそこだよ、こことさっきいた所の間くらいだ。」

「なんでそんな所に・・・？」

「知らないよそんなこと。」

「鞆か学生服のどこかに引っ掛かっていたんじゃないか？英が走り出したことでそれが落ちた。」

徹也が間に入った。

英は難しい顔をして首をひねっている。

「よかったじゃないか。冷汗もんだったんだから。」

「そうそう、さっきの英の顔、真っ青だったぞ。」

和人と徹也が英の肩をたたくと、ようやく英がにこっと笑った。

「そうだな、とにかく見つかったんだ。それより受験に集中しなきゃ。」

ふいに、和人はとても大事なことに気がついた。

鞆を自転車置き場へ忘れてしまっていたのだ。

「あ、そうだ。ちょっと俺トイレに行ってくる。ここで待っていて。」

「

「あ、ああ。」

いきなり和人が大きな声で話したので、英と徹也はあっけにとられた。

和人は駅のトイレでストップボタンをもう一度押した。

「あぶなかった。」

自転車置き場へ行くと、置いた時の状態で鞆があった。

しかも5人ほど人がいるが、鞆の方は誰も向いていなかった。

和人は鞆を取るとトイレに戻り、時間を再起動した。

自動販売機でジュースを買い、和人は二人がいる場所へ走った。

「おっ、気がきくじゃないか。」

英が和人の持つジュースを見て、ニヤツと笑った。

「いや、これはまず俺が飲んでからだ。」

「お前はのど渴いていないだろ、俺と徹也が飲んでもし余っていた

「和人が飲めよ。」

「そんな、俺が買ってきたんだぞ。」

横から徹也がジュースを奪った。

「あつ。」

「いただきます。」

その頃緑丘駅では――、

「ねえ、ママってばー、それじゃなかったんだって。」

「何言ってるの。」

「でも、駅員さんの写真なんてついてなかったよ。」

「そんなはずないでしょ。ほら駅員さんに届けましょうね。」

「それじゃなかったんだけどな。」

女の子のふくれっ面はしばらく続いた。

第49話

「いいなあ、お前たちは同じ教室で。俺だけ別かよ。」

試験会場は和人と英が同じ教室で、徹也は別だった。

「隣の教室じゃないか、試験が終わるたびに廊下で会おうぜ。」
と英。

「そうだな、じゃあ、また後で。健闘を祈る。いや、英の場合『奇跡を祈る』ってところか。」

「確かに。やれるだけやってみるさ。『溺れる者はわらをもつかむ』ってね。」

「それ、ここで使う言葉じゃねえぞ。」

英がまじめな顔をして言うと、すかさず徹也がつっこんだ。
和人が笑っている。

試験が始まった。

和人の席は真ん中の列の後ろから2番目だった。

少し離れた右斜め前に英の姿が見える。

顔が若干紅潮しており、集中しているのがわかった。

（ようし、俺も負けてられないぞ。）

和人は配られた答案用紙をにらみつけた。

と、その時だった。

和人の視界が一瞬まばゆく光った。

目がくらむほどの光ではない。

ほんの瞬きほどの短い時間、確かに光った。

——ただそれだけだった。

だが、周りを見渡しても誰一人変わった行動をとる者はいない。
あの光は、教室中を覆ったはずなのに、誰も気づいていないかのよ

うだ。

（何だ、何が起きたんだ？どうしてあの光を誰も気づかないんだ。）
和人は眼を見開いて、もう一度周りを見渡した。

「君、どうしたんだね？試験は始まっているんだよ。」

和人はふいに後ろからポンと肩を叩かれた。

40代後半くらいの男性の試験官だった。

「あ、はい。すみません。」

和人は短くそう言うと、答案用紙に目をやった。

試験官は2、3秒間じつと和人を見ていたが、ゆつくりと前列へ歩いて行った。

（そうだ、今はそれどころじゃない。しっかりやらないと間に合わないぞ。）

和人は小さく深呼吸をして、試験に集中した。

「あれ、和人だったんだろ？何があったんだ？」

1教科目の試験が終わって廊下へ出ると、早速英が聞いてきた。

「光だよ。答案用紙が配られた時さ、一瞬教室が光っただろ？」

「教室が光った？・・・いや、特に気づかなかったけど。」

「やっぱり英も気づかなかったのか。確かに白く光ったのに。」

「おいおい、大丈夫かよ。変な病気にかかったんじゃないのか？」

「そんなばかな。」

と、そこへ徹也がやってきた。

「どうだった英？」

「おう、悪くない出来だと思うぞ。ヤマが結構当たってたんだ。お前はとうだ？」

「

「俺か？80点は確実に取れたんじゃないかな。最後の問題がどうしても解けなかった。和人はとうだ？」

「一応全部答えは書けたけど、自信がないのが2問あったな。それ

より徹也、試験が始まりそんな時に一瞬教室が光らなかったか？」

「和人のやつ、きよろきよろして試験管から注意されたんだぜ。」

英が笑った。

「へえ……。そんな光はなかったと思うけどな。蛍光灯がつきにくい奴つてあるだろ？それがその時についたつてところじゃないか？」

「さすがは徹也、名推理だぜ。よかったな和人、これで一件落着だ。お前の座ってた椅子の上にある蛍光灯がついたんだよ。だから他の人は気付かなかった。」

「そんな光じゃなかったと思うけど……。」

「まだ言ってるのかよ、その話はこれで終わり。おれはちよつとトイレに行ってくるから。」

「おつ、俺も行つところ。じゃあな和人。」

英と徹也はトイレへと向かった。

和人は教室へ入り自分の席へ座った。

（あの光は蛍光灯の光なんてもんじゃない。確かに部屋中が白く光ったんだ。白く……。）

和人ははっと目を見開いた。

白い光……。一瞬体が包まれるようなあの光は、時が止まる瞬間に発せられる光のようだ。

（そうだ、あの光と同じだ。あの光……。でもなぜ？）

時を止めたわけではないのに、白く光った。

しかも自分ひとりだけがそれを感じた。

いったいどういうことなのか、和人は左腕の古傷を右手で触った。

第50話

「はい、終了です。鉛筆を置いて下さい。」

最後の教科が終了した。

英は天井を見上げ、目をつむりふうつとため息をついている。

「英、どうだった？」

教室から出るなり、和人が駆け寄った。

「良かったのか、悪かったのか、わからないよ。でもやれるだけはやった、まちがいない。和人は？名前書き忘れなかっただろうな。」

「当たり前だろ。」

「何だつまんねえの。100%合格じゃん。こんな時は『え？やべえ書いてないかも！』って焦ってみせるもんだぜ。」

「そ、そうか……。」

「真面目に考えんなよ、まったく。お前は絶対に漫才師にはなれないな。」

そこへ徹也が駆けつけてきた。

「よう英、120%の力は出せたか？」

「115%だ。」

「微妙だな……、せめて118%は欲しかったのに。」

英が和人の方を見て笑った。

「な？徹也ならその才能があるだろ？」

「確かに。」

さすがと言わんばかりに和人が頷いた。

「ま、後は天に祈るのみだ。合格発表は来週だろ？また3人で来ようぜ。」

英の提案を二人は即座に了承した。

「さーてと、和人、これからサッカー部の練習に行かないか？」

「ええ？嘘だろ？俺、精神的に疲れたから今日はやめとくよ。でも、

英は元気だな。」

「こいつはマグロみたいなもんだ。」

徹也が突拍子もないことを言った。

「マグロは常に泳いでないと死んでしまうんだ。英の場合はサッカーだけだな。」

「俺は魚並みか？まあいい、今に見てろ。俺たち西城高校が北高を倒して全国大会に行くんだ。そして国立（競技場）で逆転のシュートを決める。」

「国立だ？北高を倒す？その前に西城に合格するっていう奇跡が必要だろ？何だその超ポジティブな発想は！」

「ふっ、蒼いな徹也君。願いの強いものが勝つと決まっているんだ。織田信長を見てみる、尾張の小大名から天下を統一したじゃないか。」

「じゃあもし俺や和人が西城に合格してお前が合格しなかったら、お前の願いが弱かったってことだな。」

その一言で英の顔はしかめっ面になった。

「ぐっ……。それは……。その……。参りました！」

「はっはっは、聞いたか和人。蒼いのは英の方だったぜ。」

3人は町田駅から電車に乗って緑丘駅に着いた。

和人は改札の手前で一人の女の子がこちらに向かって手を振っているのに気づいた。

千波だった。

厚手のスカートにハイソックス、薄いピンクのハーフコートを羽織っている。

「冬だというのに誰かさんは暑いね。こっそり待ち合わせか？」
徹也が英の方を見て言った。

「待ち合わせなんてしてないよ、こっちがびっくりだ。」

3人は改札を抜けた。

「どうだった？できた？」

千波が寄ってきて真ん丸な目で英に話しかけた。

「俺の全身全霊をかけてがんばった。結果は・・・『神のみぞ知る』
つてとこだ。」

「くっつ『神のみぞ知る』ときたぞ。カッコつけやがって。さあ和人、俺たちお邪魔虫は先に帰るとしようぜ。」

「そうだな。」

和人と徹也は足早に歩きだした。

英と千波は立ち止まり何事か話しこんでいる。

すぐに徹也が和人へ小さな声で言った。

「おい、英のやつ俺たちを止めないぞ。ふつう止めるよな、さつきまで一緒にサッカーの練習に行こうぜって和人に言ってたくせによ。」

「まったくだ。こんなに薄情な奴だとは思わなかったぜ。」

「ちくしょう！彼女が欲しいな。和人もそう思うだろ？」

「今の英を見ていたら、確かにうらやましい。」

和人が振り返って二人の方を見た時だった。

一瞬、白くまばゆい光が和人の体を包んだ。

和人はとっさに右手で両目を押さえた。

（まただ。またさっきの光だ！）

周りを見渡しても、誰ひとりとして和人と同じような反応をする者はいない。

「どうしたんだ和人？まさかまた頭の上が光ったって言うんじゃないだろうな。」

和人の不思議そうな顔を見て徹也が聞いた。

「いや、何でもなし。ちょっと考え事をしただけだ。」

和人はほほ笑んだが、少し顔が引きつっていた。

第51話

「和人、ちょっと待って。帽子の代わりにほら、これを頭にかぶせましようね。」

母は和人の頭にバンダナをかぶせて頭の後ろで縛った。

「かつこいいい？」

「超かつこいいわよ。そうだ、お父さん、ちょっとそのカメラで撮って。」

ちょうど父が、家の前の畑に所狭しと咲き誇っているひまわりを撮影していた。

「ん？ああ、わかった。こっち向いて……。」

かがんでいた母が和人の肩に手をまわす。
カシャッ。

「ちゃんと撮れた？」

「大丈夫だよ、俺の腕を信じろ。」

「じゃあ和人、おじちゃんここでテレビなんか見ちゃだめだからね。荷物渡したらすぐに帰ってくるのよ。」

「わかつてるって。」

和人は母に渡された荷物を500メートルほど離れた叔父の家へ届けに向かった。

和人は小学4年生だった。

学校が夏休みに入っただけで、家族そろって祖父母の家にお世話になっていた。

それからもう1週間が経とうとしている。

母から渡された荷物は、叔父のショルダーバックだ。

お昼時にやってきた叔父が忘れて帰ったもので、明日仕事で必要だという。

今の時刻は午後5時を少し回っていた。

「私も一緒に行けばよかったかしら。」

祖母が和人の後姿を見送りながらつぶやいた。

「大丈夫ですよ、お母さん。外はまだまだ明るいですから。」

「でもな、葛島川は水の流れが速いよって、もし足でも滑らして川に落ちたりしたらと思うと・・・。」

「こちらに來た最初の日にお母さんが和人に言っただじゃないですか、葛島川には気をつけろって。和人もうなづいてたから大丈夫ですよ。」

「そうやね、和人はしっかりしとるしな。」

和人の祖母の家は、大阪市ではあるが、大阪駅から車で2時間ほど離れた割と田舎っぽい場所にあった。

近くにスーパーはあったが、コンビニは10キロほど離れた所にしかない。

観光名所と言えるようなものもなければ、電車の線路も通っていない。

だが、和人はこの町が気に入っていた。

今まで田舎の生活をしたことがなかったからかもしれない。

そういえば、なんとなく空気がおいしいような気がしてくる。

和人はスキップしながら叔父の家に向かった。

しばらく進むと右手に川のせせらぎが聞こえてきた。

葛島川だ。

その葛島川と道路が最も近い場所へ、和人は近づいてきた。

しかし、川の付近一帯は深い藪に覆われているため、車でこの道を通っても3mほど離れた場所に川があるとは誰も気づかない。

川の広さは約5m、水深は40cmほどであろうか。

それほど深くはないが、川の流れが速く、子供が足を取られると流

される可能性がある。

「ねえ。」

どこからか和人を呼ぶ声がした。

和人がきよろきよろしていると、

「ここよ。」

藪の茂みから和人と同年代の女の子がひょっこり顔を出した。

ピンクのワンピースを着てサンダルをはいたその女の子は、髪はショートカットで小麦色に日焼けしていた。

女の子は和人を見てにっこり笑った後、両手を顔の前で合わせた。

「お願いがあるの。ね、ちょっとこっちに来て。」

和人は言われるままに藪の裏の方へついて行った。

「ほら、あそこにあるでしょ、帽子が。」

見ると、リボンのついた小さな麦わら帽子が、川の中ほどに浮いていた。

正確に言うと、2つの岩が水面よりも上に突き出ており、帽子はその2つの岩の間に引っ掛かっていた。

「私ね、この川のずっと向こうから、あの帽子を追って来たのよ。止まっててくれて良かったわ。でも問題はどっやってあの帽子を取るかなのよね。」

女の子は小首をかしげた。

「長い棒が何かないかな。」

和人が辺りを見回すと、上流のほうに2mくらいの枯れ木が横たわっているのが見えた。

和人はその木を持ってきてみた。

「これならちょうどいいかもね。」

女の子は和人から木を受け取り、突き出ている枝を2、3本折ると、ジワリジワリと川に近づいて行った。

「もう少して届くわ。ねえ、ちょっと私を捕まえてもらえる？」

「え？どこを持つの？」

「腰に手をまわしてしっかり踏ん張ってて。」

「こゝ、腰？」

「そう腰よ。恥ずかしがつてる場合じゃないわ。あの帽子はおばちゃんか昨日買ったばかりなんだから。」

和人はちよつと恥ずかしそうにしながら女の子の腰に両手をまわし、おなかのところで手を組んだ。

第52話

「行くわよ。」

女の子が川辺の岩に足をのせ、手を伸ばし前かがみになった。

「き、気を付けて。」

「わかってるって。」

和人は歯を食いしばった。

枯れ木の先は帽子に届きそうだが、うまくひっかけないと流されてしまう。

女の子は慎重に木の先を水面につけ、少し持ち上げてみた。

なんとか帽子に引っ掛かったようだ。

さらに持ち上げてみる。

「かかったわ。」

女の子は木を手前に引いた。

「やばい……。」

今度は帽子が揺れて今にも落ちそうになった。

「ええい！」

一か八か、女の子は木の先を上跳到ね上げた。

すると帽子は木から少しはじかれて、女の子の方に近づいたが、回転しながら川に落ちて行った。

「あっ！」

女の子は短く叫ぶと、帽子へ手を伸ばしながら思わず右足を川に踏み入れた。

「だめだ！」

今度は和人の声。

女の子は帽子をつかんだもののバランスを崩し、前のめりに倒れた。両手と右足が川底についた状態。

和人も引きずられて倒れる。

その時、和人の左腕が藪から突き出た尖った木の枝にこすれた。

「うっ！」

和人が顔をしかめる。

女の子はなんとか岩の上に戻る事ができた。

「やだ、濡れちゃったわ。でも帽子は取れた。おかげで……。」

助かったと言おうとした女の子は、和人が右手のひらで左腕を抑えているのに気づいた。

顔が苦痛で歪んでいる。

「大丈夫？ちよつと見せて。」

和人が右手を取ると、左腕の側面が3センチほど横にぱっくりと裂けていた。

血がぼたぼたと流れ出してくる。

「大丈夫、おじさんちがこの先なんだ。頭のバンダナをとって腕に巻いてくれない？」

叔父の家はまだまだ先だったが和人は、精一杯強がってみせた。

女の子は急いでバンダナを腕に巻いて縛ってくれた。

「それじゃ。」

和人は女の子に向かって言った。

「ごめんなさい。本当に大丈夫？痛くない？」

「うん、そんなに痛くないよ。帽子とれてよかったね。」

「……ありがとう。あの、名前はなんていうの？」

「山口素弘。」

そう言っていると和人は格好よくその場を去った。

山口素弘はサッカーのJリーグで活躍している選手の名前だ。

和人は、本当の名前を言うのがなぜか照れくさかった。

（記憶がかなりあやふやになってきているな。）

和人は机の上に乗っている写真立てを見つめていた。

その中にはあの日母と写った写真が入っている。

（あの時の女の子、なんとなく千波ちゃんに似ているような気がする。）

和人は女の子の名前を聞かなかったことを悔んだ。

言葉が関西弁でなかったということは和人と同じように旅行中だったのかもしれない。

（あの後女の子は僕のことを両親に話しただろうか。そして僕を探しただろうか。）

「山口素弘か・・・。」

和人は部屋の壁に張っているサッカー選手のポスターに目を移した。

”横浜フリューゲルス 山口素弘”

そのポスターの下の方にはそう書かれてあった。

第53話

受験の日から4日が過ぎ金曜日となった。

（まただ、またフラッシュだ。）

和人は毎日一度は目の前が一瞬だけ明るくなる現象（和人はそれをフラッシュと名付けた）に悩まされた。

もしかしたら、時を止めた副作用として起きるようになったのだろうか。

だが、受験の日以来時を止めてはいないにも関わらず、フラッシュは無くならない。

それとも本当に目の病気なんだろうか。
だとしたら父に相談すべきだ。

でもあの光は時を止めたときに発生する光そのもの。

和人はやはり副作用の可能性が高いと判断して、もうしばらく様子を見ようと考えた。

幸い夜寝ているときにはフラッシュは起きたことがない。

「何をしている和人、早く行こうぜ。もう部活が始まっちゃう。」

玄関の前で英が待ち伏せしていた。

「部活って、今日もかよ。月曜日から休みなしだぜ。引退した身なんだから適当にやろうよ。」

「だめだ。俺たち西城高校は北高に勝たなきゃならない。そのためにはそんな甘えたことは言ってられないんだ。」

「合格発表は明後日だぞ。練習はそれからでもいいじゃないか。」
英が下を向いた。

「・・・正直に言うけど、じっとしてられないんだよ。千波は部活だしさ。体動かしてないと不安で不安で・・・、仕方ないんじゃないか！」

今度は両手を広げて大げさに顔をしかめた。

「な、だから助けると思ってた俺に付き合ってくれ。頼む！」

和人がはあつとため息をついた。

「わかったよ。でも帰りにたこ焼きおごれよ。」

「・・・そうきたか。なかなかお前も駆け引きがうまくなったな。」

和人と英は自分たちが練習をするというよりも、自分の技術を後輩に伝えることに専念した。

特に、英は司令塔を受け継ぐ松永を厳しく指導した。

「テクニクを生かすのはスピードだ。そのためには地味な筋トレを毎日粘り強く続けていくしかない。いまやっているトレーニングを、北高の選手たちは毎日ウォーミングアップに2セットやっているぞ。」

「本当ですか先輩。それを聞いて俄然やる気が出てきたな。俺、北高に行ってあわよくばJリーグの選手になりたいと思ってるんです。」

「ほ、プロか。松永はさすがだな、そこまで考えているなんて。」

「園山先輩も北高に行けばよかったのに。先輩だったら1年生から北高のレギュラーになれるかもしれないのに。」

「北高の練習は俺には合わない。俺の場合体力面に大きな欠点があるからな。でも見てろよ、必ず俺たちの西城が北高を倒す。」

「そう言えば橘先輩も西城に行くって言ってましたよね。園山先輩がそう言うとな本当に北高に勝つような気がしてくるな。」

「松永も西城に来いよ。一緒に北高を倒そうぜ。」

「1年間考えさせて下さい。さっきも言ったように僕はプロを目指してるんです。今のところ一番の近道は北高に入って活躍することですから。」

「俺は西城に行きますよ。」

不意に二人の後ろから声がした。

「桑田じゃないか！」

振り向くと桑田がにこにこしながら立っていた。

「もういいのか、桑田。」

「はい。先輩のおかげで命拾いしました。でもまだしばらくは練習できないそうですけど…。ところで先輩、救急車を呼んでくれたのが誰か知りませんか？誰に聞いても知らないって言うんです。」

「ああ、救急車のミステリーか。松永がとぼけているだけだよ。」

「本当に俺じゃありませんって。」

松永が真剣な表情で答えた。

「わかった！」

英がポンと手を叩いた。

「救急車を呼んだのは……。桑田自身だ。」

「え？」

「幽体離脱ってやつだ。瀕死の桑田の魂は三途の川へと向おうとしたが、この世に未練たらたらだったために最後の悪あがきをしたんだよ。」

「……」

「いまいちだったか？いいアイデアだと思ったんだけどな。……まあ、名乗り出ないのには何か訳があるんだろう。あれこれ考えたって仕方がないよ。それより桑田、本当に西城に来るか？」

「はい。本気で北高を倒すなんて、考えもしなかった。俺は先輩にかけてみます。」

「西城に来たところで戦力にならないと意味がないからな。この１年で２段階くらいレベルアップしておけよ。」

「はい。目標が決まったからにはやってやりますよ。」

桑田の目は真剣だ。

松永は二人の話に聞き耳を立てていた。

第54話

受験の日と同じく、和人と英と徹也は待ち合わせをして西城高校へ向った。

「いよいよ今日は合格発表の日だ。」

「なんだか目が怖いな。」

電車の中で和人は英を見て言った。

「昨夜は全く寝付けなくて、朝までマンガを読んでいたんだよ。」
英の両目の下にはくまができていた。

「実は俺も、ふわ～、なかなか眠れなかったんだ。」

徹也の大きなあくびが飛び出した。

「いつもは8時間くらい眠るのに昨日は6時間しか・・・。」

「お前はお子ちゃまか！普段いつたい何時に寝てるんだよ。」

英がすかさずつつこみを入れる。

英と徹也の会話は絶妙で、和人はそのやり取りを見ながらいつも笑っていた。

（この3人で会話するのももうちょっとで終わるのかな。それとも高校でも続くだろうか？）

和人は合格発表の掲示板を見るのが楽しみなような怖いような、複雑な気持ちになった。

「なあ、お前たち二人で見に行ってくれないか。」

電車から降り、駅から出た所で英がきりだすと、和人と徹也が顔を見合わせた。

「いいけど、英は？」

「ここで待ってる。頼む和人、掲示板を見る勇気がないんだ・・・。」

英の声は力ない。

「英は置いてさっさと行こうぜ和人。もうそろそろ貼り出される頃

だ。」

徹也は早く見に行きたくてうずうずしているようだ。

和人が英を見ると、英はバス停の椅子に座りこみ、腕を組み下を向いた。

「仕方ないな、じゃあ行こうか。英の番号は236番だったよな。」

英が目をつむつたまま頷き、和人と徹也は英を置いて歩きだした。

「和人、実は俺決めてることがあるんだ。」

しばらく歩くと徹也が真剣な表情で話しだした。

「何を？」

「もし俺たち3人が皆合格していたら、俺お前たちと一緒に西城に行くよ。」

和人が驚いて徹也の顔を見る。

「海陽はいいのか？どっちかっていえば海陽の方が第1志望だっただろ？」

「そうなんだけど、和人や英と同じ高校に行けるなら、そっちの方が面白そうだ。」

「ふうん、そうか。じゃあ3人とも合格していればいいな。」

言いながら和人は少し納得がいかなかった。

自分だったらそんなふうには考えない。

自分の未来は自分の意思で決めるものだ。

友達がそこに行くか行かないかによって左右されるべきものではない。

和人はそう思っていた。

二人が校門の前に着くと、校舎の前に白い大きな紙が貼ってある板が見えた。

そしてその周りにはたくさんの人ばかり。

「さあ、運命の一瞬だな。」

徹也の声に和人が頷き、二人はそこに向かって歩き出した。

と、その掲示板の方からこちらに向かって走ってくる中学生がいた。近づいてくるにつれてはつきりしてくるその顔を確認した和人は、あっけにとられてつぶやいた。

「・・・英？」

徹也も一瞬固まったが、すぐに、

「あいつやりやがったな！先回りしたんだよ。俺たちを出し抜きやがった。」

と一気にまくし立てた。

「でも見てみるよ徹也、あいつ笑ってるぜ。もしかしたら・・・」

「もしかしたのか・・・？」

徹也と和人は顔を見合わせた。

第55話

「やったぞ！やった！この俺が西城に合格したんだ！」

二人に駆け寄りながら英が飛び跳ねた。

「マジか！」

徹也が目丸くして和人の方を見る。

和人は微笑みながら右手のこぶしを固め、英へ右腕を突きだした。

英の腕が和人の腕と交差する。

「やったな、英。きつと受かると思ってたよ。」

「俺は五分五分だと思っていたんだ。本当に良かった。はあっ……」

英は全身の力が抜けたようになっとなった。

「それにしても……何が『掲示板を見る勇気がない』だよ。」

「俺も何かおかしいとは思っていたんだけど……、まんまと一杯食わされたな。」

和人と徹也が英をにらんだ。

英がペロツと舌を出す。

「俺の運命のわかれ道だ。自分で確認するに決まってるだろ。」

「で？俺たちの番号は見たのか？」

和人が最も気になっていたことを尋ねた。

「いや、見てない。」

英の返事はそっけない。

「おいおい、それを先に言えよな！」

徹也が血相を変えて駈け出した。

和人も後を追う。

「大丈夫だつて。俺が受かったくらいだから。」

後ろの方で英ののんきな声が聞こえた。

「英、和人にはさっき言ったんだけどさ、俺、西城に行こうと思う。」

和人と徹也の合格を確認し、3人は駅へ向って歩いていた。

「本当か？徹也。」

「ああ、3人とも合格すればそうしようと考えていたんだ。」

「ひゅー、いいじゃんいいじゃん。今日はなんて素晴らしい日なんだ！」

「でも徹也、部活は何をするんだ？俺たちはサッカーに決まってるけど。」

和人が尋ねた。

「何でもいいや。俺も高校では何かしないといけないって思ってたんだ。」

確かに徹也の運動神経ならどのスポーツでも成功しそうだ。

「ん！？」

英が急に変な声を張り上げた。

和人と徹也が英の顔を見る。

「そうだ、それだよ！サッカー部だ。徹也が入るのはサッカー部に決まった！」

「さてよ、俺がサッカーはあんまりうまくないって知ってるだろ？」

「ゴールキーパーだよ。お前の身長と運動神経ならもってこいだ。

何でこんなことに今まで気づかなかったんだろ。これで打倒北高に一步近づいたぞ！」

英は有頂天になったが、和人は英の言葉が少し引つかかった。

「徹也の身長つて、俺たちとそう変わらないじゃないか。別にキーパー向きってわけじゃないと思うけど。」

「確かに、今は普通だけど、これからどんどん伸びてくるぞ、高3になったら185センチくらいになるはずだ。」

「そんなばかな。俺の親を見てみるよ、日本人のごく平均的な身長だぜ。」

「でも、間違いなくお前はでかくなる。夢で見たんだ。」

「夢？」

和人が英の言葉ではつとした。

「夢か。夢の中で徹也はサッカー部だったのか？」

「いや、それはわからない。ただ高3のときの夢にでかくなった徹也がでてきたんだ。」

「なんだよ、夢なんかで決めつけるなよ。俺はサッカー部には入らないからな。」

あきれ顔の徹也とは対照的に、和人と英の眼は輝いていた。

第56話

「今日はお迎えがなかったな、英。」

3人が緑丘駅に着くと徹也が言った。

「ああ千波なら、部活に行っているよ。今日は俺の方が迎えにいかなくちゃならないんだ。結果を早く知りたいって言うから。今日は忙しいよ。昼からは消防署で人命救助の表彰を受けなくちゃならないし、夜は家族で食事に行くことになっているし。」

「外食かよ、いいな俺んちも行かないかな。和人の家はどうだ？」
徹也は言った後しまったと思った。

和人の母は亡くなっているからあまり聞かない方が良かったかもしれない。

「そうね、お父さんに言って寿司でもとってもらおうかな。」

和人の声が明るかったので、徹也はほっとした。

「それじゃ俺は学校に行くから、また明日な。」

英は二人にそう告げると、学校へと向かった。

「ところでさつき夢がどうのって話をしたけど。」

「うん、それがな英のやつ予知夢を見るそうなんだ。」

「予知夢？それって、これから起きることを夢で見るといって、あれか？」

「そうらしいんだ。たぶん信じないとは思っけど。」

「当たり前だろ。お前英に騙されてるんだよ。ほんとにお人よしだな。」

「でも、俺のお母さんが死ぬっていうことを知っていて、病院へ行くように言ってくれたし、サッカー部の桑田が大怪我するのも夢で見えていたらしくて、保健体育の教科書に応急手当のページがあっただろ？そこをしっかりと勉強していたんだ。」

「ふうん、何となく説得力あるな。」

「だろ？ありえないはずだけど、俺は信じてるんだ。」

「予知夢ね。やっぱり信じられないなあ……。」

徹也は腕組みをして首を横に振った。

しばらく歩くと、100メートルほど先に建設中の高層ビルが見えた。

分譲マンションらしいが20階以上の高さになるらしい。

今はまだ10階くらいしかできていない。

「この辺りはかなり開けてきたな。昔はほとんどが田んぼや畑だったらしいぜ。だから、元農家の土地成金が結構いるらしい。」

「へえ、そう言えば徹也のおじいさんも農家じゃなかった？」

「農家だったけどもう畑は家庭菜園用の1か所しかないよ。他の畑はまだ地価が安い時に売っちまったらしいんだ。こんなに高くなるのを知ってたら売らなかつたのにつて、悔しがってたよ。」

「……徹也、あれなんか変じゃないか？」

ふいに和人がはるか前方にある高層ビルの上の方を見詰めながら言った。

表情が少し硬くなっている。

徹也は和人の目線に目をやった。

「あれって？」

「ほらクレーンだよ。鉄筋をいっぱい釣り上げているだろ。」

「うん、あのクレーンがどうかしたか？」

「鉄筋が揺れているように見えないか？」

「ん？そういえば少し揺れているな。上空は風が強いんだろ。それが？」

「おかしいと思わないか？だって作業をしている人の姿が見えないじゃないか、鉄筋を釣り上げているのに……。もしかしたらクレーンの中にも人がいないかもしれない。」

「……ってことは、もしかしたらあの鉄筋が抜け落ちる可能性があるってことか？まさか、そんなことはないだろ？あの状態で作業

を中止するわけないよ。だってあれが抜け落ちたらビルの横の道路に落ちてしまうじゃないか。」

和人と徹也の目はじっと鉄筋を見つめた。

鉄筋の束は二か所を縛り、その二か所を1本のワイヤーで結んでいる。

そのワイヤーの中間をクレーンのフックに引っかけてあるようだ。

やはり鉄筋の揺れは少しずつ大きくなっているように見える。

「あっ！」

二人は同時に声を上げた。

わずかだが鉄筋の縛り目が横にずれた。

「やばい・・・、本当に落ちるかも！」

徹也の声だった。

道路にはぼつりぼつりと人の姿が見えるし、車道はひっきりなしに車が走っている。

「急ごう！みんなに危険を知らせるんだ！」

徹也は和人にそう言う走り出した。

和人も後を追う。

和人は走りながら右手を上着の内ポケットに忍ばせた。

第57話

駆け出した徹也と和人の行く手を、信号機が阻んだ。

「ちくしょう、こんな時に……。和人、何とか渡れないかな。」

「無理だ。交差点だというのに車のスピードが速過ぎるよ。」

二人の視線は70メートル先のビルの上に釘付けだった。

「和人、さっきよりずれが大きくないか？」

「ずれも傾きもだ。本当に、本当に落ちるかもしれない。」

和人の全身に鳥肌が立った。

右手はジャンパーの内ポケットの携帯をつかんでいる。

「信号早く変われ。」

徹也が小さな声で呟く。

その時鉄筋の縛り目がスーツと中央の方へずれ、鉄筋が大きく傾いた。

「わっ！」

強く短い徹也の叫び声。

数本の鉄筋が一度に縛り目から抜け出た。

信号待ちをしていた人々が徹也の視線の先を一斉に見る。

和人は、携帯電話のストップボタンを、押した。

間に合ったのだろうか。

道行く人で和人の位置からは、70メートル先の路上が確認できなかった。

和人はぽかんと口を開けたまま、ゆっくりと走りだした。

（もしも間に合っていなかったら？）

和人の頭には、背中に鉄筋が突き刺さり、血が噴き出している人や、肩に鉄筋が食い込み苦悶の表情をしている人の姿が浮かぶ。

激しい鼓動が和人を襲った。

「頼む。頼むから間に合っていてくれ……。」

和人は少しうつむき加減でそのビルへと急いだ。

ビルの下に着くと和人は目をつむり、息をふーっと大きく吐き出した。

おもむろに目線を上げる。

和人は前を見つめたまま動かない。

5秒間ほどしてもう一度息を吐き出すと、和人の顔は笑顔に変わっていた。

「危なかった……」

和人はゆっくりと前方へ歩き出した。

8本ほどの鉄筋が、道路の上2〜4メートルの空中にほぼ固まって浮かんでいた。

その下には何と5歳ほどの男の子が一人いる。

男の子の周囲5メートル以内には、誰もいなかった。

もしも時が止まるのが0.5秒でも遅かったら、和人は無残な光景を見ることになっていただろう。

和人は辺りを見回した。

男の子の前方で、母親らしき人が振り向き、手招きをしている。

他にも男の子のほうを向いている人はいるが、おそらくぼんやりと視界に入っている程度だろう。

和人は男の子を抱えあげると、母親の後方約5メートルの位置に、母親の方を向けて立たせた。

この位置ならば、他の人の視線から外れていると思われたからだ。

「ここはこれでよし、次は上だな。」

和人はビルの屋上に向かった。

階段は狭く、工事用の道具やコンクリートの塊がいたるところに置かれている。

屋上へ出ると、作業服を着ている人が3人、クレーンの方に向かって走っていた。

クレーンのフックにはまだ30本ほどの鉄筋が残っている。

そしてそのうちの3本がずれ、今にも落ちそうになっていた。

和人は、鉄筋がある道路側の端へ立つと、上へ手を伸ばした。

3本の鉄筋に十分届く。

「うわっ、怖いな。」

下をのぞいた和人は、目がくらみそうになった。

そこで、落ちていた細いロープを拾うと、ロープの端をクレーンに結んだ。

そして、反対の端を腰にまわし、自分がビルの端に立った時にロープがぴんと張るように結んだ。

「頼むぞ命綱君。」

和人はもう一度ビルの端に立ち、手を伸ばすとずれていた鉄筋を一本ずつ抜きとり、下におろした。

長さ5メートルの鉄筋は思っていたよりも数段重く、危険な場所での作業とあって、やり遂げた頃には腕と脚の筋肉がパンパンに張っていた。

時間も30分くらいはかかっていただろう。

「なんで俺がこんな目にあうんだよ……。」

和人はロープを外し、疲れた表情で階段を下りた。

徹也がいる横断歩道の前に着くと、和人は大事なことに気がついた。時を止めた時の自分の場所がわからないのだ。

もちろんおおよその見当はつく。

しかし完璧には再現できない。

後方には10人ほどの人が立っており、和人の姿のブレを感じる人がいるかもしれない。

「仕方がない、走ってごまかすか。…再起動だ。」

和人は内ポケットの携帯を掴むとストップボタンを押した。

ガラガラガラッと大きな音がし、キャーという悲鳴が聞こえた。

「徹也、信号が青になったぞ。」

和人は徹也の手を引っ張り走り出した。

「和人、聞いたか？鉄筋が落ちたぞ！」

「聞いた！」

二人は走った。

ビルの下では一人の女性が口を押さえ立ち尽くしていた。

「隆志・・・、隆志・・・。」

あまりのことに足がすくんで動くことができない。

と、肩にかけているショルダーバッグが、ぐいぐいと下に引っ張られた。

「お母さん。」

小さな男の子が傍らで見上げている。

女性はペタンとその場に座り込み我が子をぎゅっと抱きしめた。

「隆志！まあ、隆志！」

第58話

翌日の朝、学校の体育館では全校集会が開かれた。英が桑田を助けたことで、消防署から表彰を受け、それが新聞に載ったからだ。

校長先生は英のことを、我が校の誇りだと誉めたたえ、生徒や先生たちからステージ上の英に向って祝福の拍手が送られた。

「新聞読んだぞ、英。まじめな顔で表彰状を受け取っている写真が写っていたな。」

全校集会が終わると、和人はすぐに英を捕まえた。

「当たり前だろ。新聞記者や消防の人に囲まれているんだから緊張もするし、まじめな顔にもなるさ。」

「垣内のコメントも笑えただろ？」

徹也が近寄ってきた。

垣内とは英と徹也の担任の教師で、表彰式に立ち会っていた。

「『普段は落ち着きがないように見受けられるが、いざという時には素晴らしい力を発揮する生徒です。』だよ、褒めてるんだか、けなしてるんだかわからないよな。」

「垣内って、そんなことを言ってたのか。実は俺、新聞見てないんだ。帰ったらその部分切り抜いて永久保存しなくちゃ。」

英の表情は明るかった。

「それはそうと英、昨日俺と和人はすごい場面に遭遇したんだぜ、な、和人。」

徹也が昨日の出来事を切り出した。

「すごい場面って何だ？」

「実はこれも今朝の新聞に載っていたんだけどさ、柳町に今建設中の構造ビルがあるだろ？」

「ああ、マンションになるやつね。」

「まだ10階程度しかできてないんだけど、一番上にクレーンが乗っついてさ……。」

「あつ、そうか！」

英が急に大きく叫んだ。

「なんだよ急に。」

「落ちたんだよな、鉄筋が！路上に落ちて、そして……。」

英の表情が急に険しくなった。

「そして？そしてはないよ、それだけ。信じられるか？結構あそこ人通りが多いと思っていただけだよ、それほどでもなかったんだな、誰にも当たらないなんてさ。」

「えっ？」

「以外だろ英？でもよく鉄筋が路上に落ちたって知っていたな、誰かに聞いたのか？」

「もしかして、あれか英？……予知夢。」

和人がはつとして口をはさんだ。

英が和人を見て頷いた。

「そうなんだよ和人。といっても俺がその場面を見たわけじゃなくて、お前たちから聞いているこの場面を夢で見たわけだけだよ。」

「何だかややこしいな。まあ俺はその予知夢ってやつを完全に信じているわけじゃないからな。だって普通信じられるか、そんな……。」

「ちよつと待て徹也、英の話を聞こうじゃないか。路上に落ちた鉄筋は夢の中でどうなったんだ？」

「夢の中では……。」

英は少ししかめたような表情で、息をふつと吐いた後こう続けた。

「小さな男の子が鉄筋の下敷きになって死んだ。」

一瞬、和人の首筋に鳥肌が立った。

（やはり、あの男の子はあそこで死ぬ運命にあった。それを俺は助

けてしまった。つまり、未来を変えた・・・ということか。」

それまで和人にとって未来というのは常に変化するものだという、漠然とした思いがあつたのだが、既に決まっている未来が存在するのだということを、思い知らされたような気がした。

「どういうことだ。男の子が死んだはずなのに・・・。」

英は相変わらず難しい顔をして、ぶつぶつ呟いている。

「まあ英、予知夢も外れることがあるって言うことだ。なんて言つたつて夢なんだからさ。そんな真剣になるなよ。なあ、和人。」

「ん？ああそうだな。」

「おいおい、和人もおかしくなっちゃまったぞ。訳がわかんねえな。悩み多き年頃つてやつか？あほらし。」

徹也はひとりそそくさと教室へ戻って行った。

第59話

学校が終わると、和人は英の誘い（サッカー部の練習）を断って、まっすぐ家に帰った。

昨日、父、浩一郎は遅くまで仕事をしたため、和人の合格祝いをすることができず、今日焼き肉屋で食事をしようと持ちかけたからだ。父が帰るまでの間、和人は犬のクロベエを散歩させた。

最近、千波と出くわすことがほとんどなくなっていた。

というのも、千波の所属するバスケット部の練習が夜遅くまで続くため、太郎の散歩は千波の父がほとんど受け持っているからだ。

クロベエを30分ほど散歩させると、和人は部屋に戻り机の上でマンガを読み始めた。

10分ほどたった時、突然、和人の視界が光で包まれた。

（またフラッシュだ。）

和人は眉間にしわを寄せ目を瞬かせた。

そしてゆっくりとマンガに目を戻す。

（あれ？なんだこの紙は？）

開いていたページの間に、一枚の紙が挟まっている。

その紙はおよそ5センチ四方に手で切りぬいたようなノートの切れ端だった。

和人がそれを引き抜いてよく見てみると・・・。

「んぬ!？」

思わず声を発していた。

そしてすぐに周りを見回した。

もちろん誰もいない。

だがその紙に黒のボールペンで書かれている文字が和人の目を凍りつかせた。

『いたずらに時を止めるんじゃない！S』

和人は窓の前に立ち、外を見た。
誰もいない。

ただ、クロベエがけたたましく吠えているだけだった。

（どういうことだ？フラッシュが起きる前にはこんな紙はなかったはずだ。あの一瞬・・・、あの一瞬の間に誰かがこの部屋にやってきて、この紙を置いた。・・・できるはずがない、普通であれば！だがもしも、もしもだ、その誰かが時を止めたとしたら？）
和人はこの仮説がほぼ間違いないだろうと感じていた。

（・・・つまり俺のほかにも時を止めることができるやつがいる。そしてそいつは俺が時を止めれると知っていて、さらに俺の家のことまで知っているんだ。）

和人の頭はめまぐるしく回転した。

（一体そいつは何者なんだろう？そして、時を止めることは何か危険があるのだろうか？）

和人はずっとその紙を見つめていた。

そこに書かれている文字は、決して下手な字ではないが、ワープロ文字のように丁寧に書かれている。

もしかしたら大人の字ではないのかもしれない。

男なのか女なのか、それすらわからない。

そしてもうひとつ、気になることがあった。

それはフラッシュが起きたタイミングだ。

さっきのフラッシュの時に時が止まったとしたら、フラッシュの光はやはりあの「時を止めるときに発生する光」と同じものではないか。

それならば、今まで自分で時を止めていないときに発生していたフラッシュは、誰かが時を止めた瞬間だったと言えるのではないのか。

和人がそこまで考えた時、背後に人の気配を感じた。

あわてて振り向くと、浩一郎だった。

「何度呼んでも返事がないから来てみたんだが、ぼーっとしてどうしたんだ？」

浩一郎の顔は少し不思議そうだ。

「ううん、何でもない。お帰りなさい。」

和人は手に持っていた紙を元に戻してマンガの本を閉じた。

第60話

和人が行く西城高校の寮は「御萩野寮」みはきのりょうという名前だった。

高校から徒歩で10分ほどの位置にあり、近くにはコンビニや喫茶店もあるなかなか便利な場所だ。

その御萩野寮に、和人は父とともに下見に来ていた。

寮の門をくぐると、60歳を少し過ぎたくらいの人の良さそうな男性が出てきた。

「私はこの寮の管理人をしている青山と申します。まあ、困ったことがあつたら何でも言つて下さい。生徒たちは私のことを『おやっさん』と呼んでくれているから、君も遠慮せずにそう呼んでくれ。生徒は君たち新一年生を入れて全部で16人、その他には私と私の家内がいるだけだよ。」

食堂に案内されると、丸々と太った女性が台所で食器を洗っていた。「おい、新人生の橘君とお父さんがみえたぞ。」

『おやっさん』がそう呼ぶと、その女性は太った体をゆすりながら足早に和人たちに近づいてきた。

「まあまあ、よく来ましたね。橘君はたしか緑丘だったかしら？」
大きな元気のある声だ。

「橘です。息子がお世話になります。今住んでいるのは緑丘ですが、住吉の方へ私の転勤が決まっております、もうすぐ引っ越しなんです。」

浩一郎が丁寧に挨拶した。

「まあ住吉にね。じゃあ通ってくるわけにはいかないわね。私のことは『おかみさん』って呼んでくれるとうれしいわ。え〜と、食事は私たち夫婦が全部作っているのよ。私は栄養士で旦那も一応調理師の免許を持っているわ。ちゃんと栄養のバランスを考えたメニューになっているから安心してね。あつ、私の体型は気にしないで。私の場合はつまみ食いのしすぎだからね。あつはっは。」

『おかみさん』の豪快な笑い声がこだました。

「いつもこんな調子ですよ。ですからまあ、さほどホームシックにはならないかもしれませんね。それから、半年前まではここで犬を飼っていたんですが、高齢で死んじゃったんですよ。寮の生徒たちも結構悲しがつてくれましたね、また犬を飼ったらどうかって言われるようになったからもしかしたら犬を飼うかもしれないけど、橘君は犬は大丈夫？」

おやっさんのこの言葉に、和人と浩一郎は目を見合わせた。そして、

「それならうちの犬を連れて来てもいいですか？5、6歳のシェパードでクロベエという名前なんですけど、残業が重なると散歩にも連れて行つてやれなくなるので、かわいそうだと思つていたんですよ。」

と、浩一郎が切り出した。

「それは願つたりだ。こちらからお願ひしますよ、なあ。」

「そうですとも、あんた言つてみるもんだね。シェパードならきつとお利口さんだよ。」

こうして、クロベエの転居が決まつた。

それから30分ほど寮の中を案内してもらい、規則や当番などの説明を受けて和人たちは御萩野寮を後にした。

緑丘駅へ着くと、時刻は夜の6時を回つていた。

和人たちは駅前の食堂に入った。

「良さそうなお寮だったじゃないか。クロベエのこともこれで心配ないし、管理人さんも良い人そうだな。」

「うん、少し安心した。」

注文したラーメンを食べながら、和人は笑顔を見せた。

「卒業式が終わつたら、少しずつ荷造りを始めよう。お父さんが引越す時が和人の寮生活の始まりでもある。最初は少しさみしいかもしれないが、すぐに慣れるだろう。お互いにな。」

「うん。」

和人はできるだけ不安な顔をしないようにしていた。
そして今家で父と過ごす短い時間を大切にしようと思っていた。
おそらく父も同じ気持ちだろう。

それにしても、いろんな事があつた1年だつた。

時を止められる携帯電話の発見。

英のサッカー技術と精神力の目覚ましい進歩。

千波への恋心。

母の死。

西部地区対抗戦での優勝。

大けがの桑田を助けたこと。

高校受験。

そして自分以外に時を止めることができる者の存在を知つたこと。

これから高校生になる自分に、どんなことが待ち受けているのだろうか。

不安がないと言えばうそになる。

でも不安なのは自分だけではない。

お父さんだって新天地の生活は不安なはずなのに、自分のことばかり心配してくれている。

負けてられない。

御萩野寮のおかみさんの笑い声がいつまでも耳から離れなかった。

暖かいラーメンを食べながら、和人は自分の体に力がみなぎって来るのを感じていた。

第61話（前書き）

高校生編に突入です。

第61話

平成15年4月8日、橘和人は同じ学生寮（御萩野寮くみはぎのりようぐ）の同級生、安井鉄平とともに県立西城高校へ向って歩いていた。

寮から西城高校までは10分ほどの距離。

今日は和人たち新一年生の入学式だ。

「いったい何組になっているんだろうな？安井君と同じ組ならいいけど。」

「その『安井君』はやめてくれないかな。『鉄平』でいいよ。友達はみんなそう呼んでいたから。」

「でも御萩野寮でまだ3日しか一緒に生活していないのに、呼び捨てっていうのは・・・。」

「いいのいいの、一昨日の歓迎会で一年生みんなすぐに仲良くなれたじゃん。だからもう君付けはやめようよ。君のことも『和人』って呼ばせてもらうから。」

もう決めたことだと言わんばかりの鉄平の口調に、和人は頷くしかなかった。

「ちよつと照れるけど、わかったよ鉄平。」

鉄平がニヤツと笑った。

「それだよ、それぞれ、その方がしっくりいく。ところで和人、君はサッカー部に入るつもりだって言ってたよな？」

「ああ、入る。友達とも約束しているんだ。」

「いいなあ、俺もサッカーやりてえな。」

「え？鉄平は陸上部に入るって言ってたじゃないか。」

「うん、でも本心は陸上よりサッカーをやりたいんだ、中学でもやってたからさ。」

和人が首をひねる。

「じゃあ何で陸上部に入るの？」

「・・・記録を作っちまったんだ。」

「記録？」

「そう、県大会の100メートル走で、30年ぶりに記録を塗り替えたんだ。だから陸上部の先輩に目をつけられた。」

「すげえ、いったい何秒出したんだ？」

「10秒83。」

「え、えゝ！？10秒83？うそだろ中学生が10秒台？陸上部でもないのに！？」

驚く和人とは対照的に鉄平の顔は沈んでいた。

「陸上部では俺が必ず入部するものと決め付けていて、大騒ぎしているらしいんだ、スーパールキーが入るってさ。だから・・・仕方ないよな、入部しなくちゃ。」

「はあ・・・」

和人は驚きのあまり、何も言えなかった。
ケタが違いすぎる。

その時だった。

突然カメラのフラッシュのような白くまばゆい光が、和人の目を襲った。

立ち止まり、ギョツと目をつむる和人。

（フラッシュか、久しぶりだな。）

和人は目をぱちぱちと瞬かせ、制服のポケットの中に入れている携帯電話を右手で握りしめた。

（止めたのか、誰かが、時を。）

和人の顔が急に陰しくなった。

「おい和人どうしたんだ急に？めまいがしたような感じだったぞ。」
「ん？ああ、何でもない。目にゴミが入ったみたいだ。でもすぐに落ちた。」

「な〜んだ、ゴミか。・・・ん？おい。」

「何？」

「ほら、この先のバス停のベンチに座っている女の子、俺たちの方をじっと見ているぞ。」

「え？そうかな？」

確かに20メートルほど先のバス停のベンチに女子高生が一人で座っている。

しかも、鉄平の言うとおり、ずっと和人たちの方を見ているようで、すぐに和人と眼が合った。

徐々に近づき2メートルくらいの距離になると突然、何とその女の子がにこつと笑い、和人に軽く会釈をした！

和人はあわてて、目をそらし鉄平の方を向く。

「おい、知り合いか？」

ベンチの後ろを通り過ぎると鉄平が小声で話してきた。

「いや、初めて見る顔だ。」

「じゃ、なんでお前に会釈するんだよ。」

「さあ、わからない。」

「でも、髪型はポニーテールでいいけど、あの眼鏡はいただけないよな。」

女の子は今時珍しく大きな眼鏡をかけていた。

「おい和人、お前少し顔が赤いぞ。もしかしてあの子にひとめぼれしちゃったんじゃないのか？」

鉄平が茶化す。

「ひとめぼれじゃないけど、俺だめなんだ。女の子に見つめられたりするとすぐに顔が赤くなってしまふ。」

「へえ〜、純情なんだな。よし今度会ったら声をかけてみようぜ。」

「いや、いいよ俺は。お前が一人でやれよ。」

和人はやつと元の顔色になり、落ち着きを取り戻した。

そして先ほどポケットの中で掴んだ携帯電話を、ずっと握りしめていることに気がついた。

（そうだ、女の子どころじゃない。さっきのフラッシュ、今までよりもずっと眩しかったような気がしたけど、気のせいだろうか？それに『S』のやつ、俺には時を止めるなど言っておいて、自分は自由の時を止めているじゃないか。）

和人が持っている携帯電話は、去年の夏に拾ったものだった。

その携帯は、電話をかけることも受けることもできない。

だが、時を止めることができるという、驚くべき機能が付いていた。和人は誰にも気づかれないように、何度か時を止めた。誰にも気づかれないと思っていた。

ある日、和人が自分の部屋でマンガを読んでいると、フラッシュ（目の前が突然眩しく光る現象）がおき、マンガの上に一枚の紙が置かれていた。

その紙にはこう書かれてあった。

『いたずらに時を止めるんじゃない！S』

『S』とはいったい誰なのか？

そして今日から始まる和人の高校生活はどうなるのか？

第62話

学校へ着くと、園山英と前川徹也が玄関の前で和人を待っていた。二人とも和人と同じ緑丘中学校の卒業生で、電車で通っている。

和人の親友だ。

「よう、和人。お前2組だぞ、俺と一緒にだ。」

顔を合わせるなり、英が言った。

「英と同じ？腐れ縁だな。」

和人が笑った。

「ちくしょう、俺だけ隣の1組だ。」

徹也は不服そうだった。

「この二人もサッカー部に入るんだ。こっちの少し男前なのが園山英、お笑い系の顔が前川徹也だ。」

和人が鉄平に二人を紹介した。

「誰がお笑い系だって？それに俺はサッカー部に入るってまだ決めてないぞ。」

「いや、必ず入ってもらう。北高を倒すには絶対にお前の力が必要だ。お笑い系の顔だけど・・・」

英がにやりとしながら和人に同調した。

「北高って北松高のこと？君たち本気であの北高に勝つ気なのか？」

「和人、誰だこいつ？」

英が少しむっとして聞いた。

「ああ、俺と同じ御萩野寮の・・・。」

「ごめんごめん、馬鹿にしたつもりはないんだ。ただびっくりしただけで。俺、北部の福浦中から来た安井鉄平っていうんだ。よろしく。」

鉄平があわてて弁解した。

「鉄平は俺たちとうまが合うと思うよ。まだ知りあって3日しか経ってないけどいいやつだってわかるんだ。」

「ふうん、ま、いいや、和人がそう言うんならそうなんだろ。じゃ鉄平君のクラスはどこか見てみようぜ。」

英が玄関の扉に張られているクラス別の名簿を指さした。

1年生は10クラスあるが、鉄平の名前はすぐに見つかった。

1組だったからだ。

「徹也と同じか。お前ら鉄徹コンビと名付けてやるよ。そろそろ教室に行ってみようぜ、和人。」

「そうだな英。鉄徹コンビも行こうか。」

「鉄徹コンビねえ、パツとしないネーミングだけど、行きますか鉄平君。」

「うん、でもよかった。同じクラスに知り合いが一人いて。」

「知り合いねえ？今知りあったばかりだけどな、ははは。」

徹也の笑い声で、和人は少し安心した。

（徹也との相性もよさそうだ。二人とも運動神経が抜群だから、気つと仲良くなるだろう。）

和人と英は2組の教室に入った。

教室の机の上にはそれぞれ名前が書かれた紙が貼ってあった。

どうやら男女の別関係なしに、名字の五十音順で座席が決められているようだ。

そのおかげで、和人の席は英のすぐ後ろになっていた。

「ついてるぜ、センコーから当てられた時はフォローしてくれよな、和人。」

「ここまで来ると、本当に腐れ縁じゃないかと思うよ。」

二人は自分の席に座った。

「じゃじゃじゃん。」

英がにやりと笑いながら鞆の中から何やら取り出した。

「サッカーのスパイクじゃないか。俺だって持ってきてるよ、英。」

「ふん、これは俺が履いているスパイクじゃないだろ？このスパイクは徹也のだ。」

「徹也の？」

「そう、何を隠そう今日4月8日は徹也の誕生日なのだ。そのプレゼントとして、こいつを渡す。するとどうだ、ここまでされたらサッカー部に入らざるをえまい！」

「へえ、そんなの買う金持ってたのお前？」

「もちろん安物だよ。でもまあ、初心者にはこれで十分だ。キーパー志望だしな。それに半額は和人も負担しろよ。」

「ええ？」

「1800円だけだよ。」

「ええ？2倍すると3600円か、それはまた・・・安いな。」

「本人には6000円したっていうことにしようぜ。」

英が右目をパチンと閉じて笑った。

第63話

入学式とホームルームが終わった。

「あゝ、長かった。」

英が椅子に座ったまま両手を突き上げ、大きな欠伸をした。

「さあ、徹也を誘って部活に行こうぜ、和人。」

「うん、1組は先に終わったみたいだから、徹也が待ってるだろうな。」

和人の読み通り、徹也が鉄平と一緒に廊下で待っていた。

「待ちくたびれたぞ。で、どうする？鉄平は陸上部の練習を見に行きたいけど、お前たちはサッカー部に今日から入るんだよね？」

徹也はもう『鉄平』と呼び捨てにしていた。

「そういうこと。ジャージとスパイクを持ってきているから、練習もOKってとこだ。徹也もとりあえず練習見てみない？」

英の口調は軽かった。

「ま、見るだけならな。でも最後までは見えないと思うから、途中で帰つとくぞ、英。」

「いいよ、じゃ早速行きますか？」

英が徹也に気づかれないうちに和人に目くばせをした。

鉄平は3人から離れ、学校から少し離れた市営の陸上競技場へ向かった。

陸上部はいつもそこで練習していることを先輩から聞いていたからだ。

手には陸上用のウェアと靴が入ったバッグを持っている。

鉄平が陸上競技場に着くと、弧を描いて準備体操をしていた陸上部員が一斉に鉄平の方を向き、どっと歓声が沸いた。

そして、その中の一人が鉄平の方へ歩み寄ってきた。

「安井君だね。俺はキャプテンの石原だ。今日から練習に参加でき

るんだろ？」

「は、はい。」

「部室に案内するよ。みんな君が来るのを待ってた。」

石原はにきびだらけの顔をゆがめて笑った。

和人たち3人はサッカー部が練習している第2グラウンドに着いた。サッカー部員たちは、すでにパスの練習に入っており、大きな覇気のある声がグラウンド中に響いている。

グラウンドの周りには、和人たちと同じように見学にきた1年生の姿がちらほらと見えた。

30分ほどが過ぎると、ひととき大きな声を出していた部員の一人がグラウンドの隅に行き、右手をあげて叫んだ。

「見学に来ている1年生、集合！」

「おいでなすった。行こうぜ、和人、徹也。」

3人は、見学に来ている他の1年生同様、その部員のところに集まった。

「・・・8, 9, 10, 11。11人か、思ったより集まったな。」

3年でキャプテンの田中だ。スパイクや練習着を持ってきているやつは、今日から練習に参加していいぞ。持ってきたやついるか？」

すかさず待ってましたとばかりに、英が手を挙げた。

「俺たち3人、持ってきています！」

「おい、俺は違うぞ。」

徹也が小声で英に言ったが、田中には聞こえなかったようだ。

「おつ、関心関心。他には？」

「はい。」

髪を少し茶色に染めている生徒が手を挙げた。

「はい4人目。他には・・・いないようだな。この4人以外のやつで、今日練習を見学して入部したいと思ったら、明日からスパイクと練習着を持ってこい。えっと、それじゃあ4人は部室に案内してやる。ついて来い。」

言うが早い、田中はすたすたと歩き出した。

「おい、何で3人で言ったんだよ。俺はスパイクなんて持ってないし、ジャージだって持ってきてないのに。」

徹也が英の腕を引っ張った。

「スパイクなら買ってきたぞ、ほら。お前サイズ26だろ。」

英がバッグから真新しいスパイクを出すと、徹也の目が点になった。

「それ・・・どういうこと？」

「誕生日プレゼントだよ。和人と折半して買ったんだ。何と6千円もしたんだぞ！おっ、キャプテンが見てる、とにかく行くぞ。」
今度は逆に英が徹也の手を引っ張った。

「うっそだろう！はめやがったな、和人までグルになって。」

和人もにやにや笑っている。

「それに何が誕生日プレゼントだ。俺の誕生日は8月4日だっていうのに。」

徹也は観念したように渋い表情でついてきた。

第64話

「5分以内に着替えて来い。」

キャプテンの田中は部室のドアを開けそういうと、練習に戻っていた。

「おい、お前らどこから来たんだ？」

部室に入ると、3人以外でスパイクを持ってきていた茶髪の男が英に聞いた。

「緑丘だ。」

「ふうん、あまり知らない中学だが、サッカー部は強かったのか？」

「西部地区の対抗戦で優勝したから、弱くはなかったと思うけど。」
ぶつきらぼうな言い方にカチンときた和人がすぐにこう答えた。

「西部地区か・・・、西部地区は葉山中以外に強いところを知らないな。」

「その葉山中に勝ったんだよ。」

和人は小さな声でそう言ったが、内心は『どうだ』という気持ちでいっぱいだった。

「ふうん、じゃあ、そこそこ強かったんだな。」

その男は、別に驚きもせず、淡々と着替えていた。

「君は？どこから来たんだ？」

今度は和人が聞いた。

「北部の本山中だ、県大会準優勝のな。名前は滝本雄一、一応県のベストイレブンに選ばれた。」

「ええっ？」

和人は驚きを隠さなかった。

「そんなにすごかったのなら何で北高に行かなかったんだ？」

「まあ、北高に入れば全国大会はほぼ確実に行けると思うけど、それって『連れて行ってもらっ』って感覚じゃないか。」

「そ、そうかな・・・？」

「全国に行つて当たり前なんだから、そうだろ。俺は自分の力で全国に行きたいんだ。だからここにきた。北高からかなり溝をあけられているといつても、去年の準優勝校だからな。他の学校よりは北高に勝つ可能性が残されている。できれば俺より上手い先輩がいてくれると助かるんだけど……。じゃ、先に行くぞ。」

滝本は3人の名前も聞かずにグラウンドに飛び出していった。

「すげえ自信だな。お前よりも上手がいたぞ英。」

徹也はあつけにとられていた。

「やつの実力は本物だ。ただ、かなりわがままなプレーをするから、周りがついていなくなる。」

「あいつのことを知っていたのか？英。」

「少しだけな、前に誰かに聞いたことがあるんだ。」

英が続けた。

「俺たちが北高に勝つためには、絶対に欠かせない戦力なんだが、問題はやつ精神面だ。少し思い通りにいかないとへそを曲げちゃう。もしかしたら転校する可能性だってあるぞ。」

「転校？・・・まさか。」

「そのところを頭に入れてやつと接してくれ。なあに、サッカーが好きで好きでたまらないってところは俺たちと変わらないから、何とかなるんじゃないか。」

「俺はそんなにサッカーに思い入れはないぞ。」

徹也がぼそつと言った。

「1年もすれば大好きになるよ。」

「そううまくいくかな？でもまあ、このスパイクに免じて一週間くらいはやめないでやるよ。さあ、行こうぜ。」

3人はグラウンドの中央へと向かった。

第65話

記念すべき高校生活の第一日目が終わろうとしていた。

御萩野寮では、クロベエが和人の帰りを待っていた。

「ごめんなクロベエ、今日はクタクタだ。」

和人は前足をあげて顔を近づけてくるクロベエの首のあたりをなでてやった。

「別にきつい練習をしたわけじゃないけど、精神的にな、疲れたんだ。散歩はおやっさんで行ったんだろ？」

和人は『またな』というように追いすがるクロベエに手を振り、玄関のサッシをあけた。

寮の中に入るとキッチンからおかみさんの大きな声が聞こえてきた。

「橘君かい？学校はどうだった？友達はできた？」

「初日からすぐには仲良しになれないですよ。でも緑丘の友達と同じクラスだったからラッキーでした。」

「そう、それは良かったわね。安井君もさつき帰ったところよ。すぐにお風呂に入りなさい。」

「はい。」

和人はキッチンの前を通り過ぎ、自分の部屋へ向かった。

1年生の部屋は1階で、2年生と3年生は2階になっている。

和人の部屋は一番奥で、その手前が鉄平の部屋だった。

和人は鉄平の部屋のドアをトントンと叩いた。

「はい。」

鉄平の疲れたような声がしてドアが開いた。

「鉄平、どうだった？陸上部は。」

「うん、すげえ歓迎ムードで迎えられたよ。ま、入れば。」

鉄平に促されて和人は部屋の中に入った。

「そっちはどうだったんだ？サッカー部は。練習に参加できたのか？」

「ああ、スパイクと練習着を持ってきていた1年生は4人だけだったけど、練習させてもらったよ。」

「サッカー部にはかなりおっかない先輩がいるって聞いたぞ。大丈夫だったか。」

「今日見た感じではあまりそんな人はいなかったけどな。自己紹介して、普通にパスやリフティングの練習しただけだった。」

「ふうん、で？和人と徹也ともう一人、英って言ったっけ？その3人の他にもう一人スパイクを持ってきた人がいたわけだ。」

「うん、滝本っていつて茶髪だけどすごく上手いやつなんだ。」

「滝本？本山中のか？」

「知ってるの？滝本のこと。」

「俺がサッカー部だったことは知っているだろ？滝本は北部では超有名な人だよ。北高に行くって思っていたけどな。」

「やつぱり、そんなにすごいやつだったのか。」

鉄平は少し考えて言った。

「・・・でも人間的にちよつとな。」

「というと？」

「滝本は、周りの選手を信頼していなくて、なかなかパスを出さなかったんだ。自分の技術に自信があつたのかもしれないけど、2、3人で囲めば割とボールを奪うことができた。俺、県大会の決勝戦を見に行っただけど、味方に文句ばかり言っていたよ。まるで負けたのはほかの選手が下手だからだと言いたいみたいにさ。和人も少し注意しておいたほうがいいぞ。」

「そうか、わかった。」

確かに滝本の話し方は、少し高飛車なところがあった。

だが、英のプレーを見れば滝本も認めるんじゃないかと和人は思っていた。

幸い滝本の性格は英も承知していたようだ。

（それにしても、今日の英の話し方は・・・、まるで滝本が西城に入学していることを知っていたかのようにだった。というよりも、も

しかしたら……。」

和人の背筋を冷たいものが走った。

（もしかしたら、英が西城に入ることを決意したのは、滝本が来ることを知っていたからじゃないのか！）

「どうしたんだ？ 和人、怖い顔になってるぞ。」

「あ？ ああ……、何でもない。ところで陸上部の練習はどうだった？」

「なかなか気合いが入っていたよ。コーチは大きな声を出して厳しそうだったけど、先輩たちは優しそうな人ばかりだった。上手くやっていけそうな気がする。あ、そういえば今朝会った女の子、ほらバス停にいただろ？ あの子が陸上競技場にいたんだぜ。」

「え？」

「陸上競技場はうちと大浦女子高が使っているんだけどさ、彼女はそっちの陸上部を見学に来てたみたいなんだ。」

大浦女子高校は西城高校と2キロほどしか離れていない。

「で、俺ペコリと頭下げたんだけどさ、彼女気づいていないんだよね。一人ぼっちでいたんだけど、10分くらいしたらどこかに行っちゃった。」

「ふうん。」

「また明日も会えるかな。」

「何、鉄平もしかして好きになっちゃったわけ？」

「そんなわけないよ。でもちよつと気になるじゃないか。なあ、今度会ったら声掛けてみようぜ。」

「俺は嫌だよ。そんなのは苦手だからお前に任せる。」

「そうか。ま、とりあえず明日もいっしょに行こう。」

「わかった、じゃあな。」

和人は鉄平の部屋を出て自分の部屋に入った。

「ただいま。」

和人は鞆を置くと、机の上に飾っている写真に向って話した。

その写真は、和人が小学生のころ大阪のおばあちゃんの家で、母と一緒に写った写真だった。

バンダナを頭に巻いて格好を付けている和人の肩に母が手をかけて笑っている。

「もしかしてお母さんが英と同じ組にしてくれたの？ありがとう。」
和人はにっこりほほ笑んだ。

第6話

翌朝、和人が食堂で朝食を食べていると、おかみさんが話しかけてきた。

「安井君はごはん食べないのかしら？一人だけまだ来ていないんだけど。」

「えっ、まだ食べてないんですか？俺今日少し遅かったから、鉄平もう済ませたと思っていたんですけど。」

「もしかしてお寝坊しているのかしら？学校二日目から遅刻なんて大物になるかもしれないわね、あつはっは。」

「ご馳走さま。俺鉄平の様子見てきます。」

和人はそう言っていると、食器を洗い場に持っていった。洗い場ではおやつさんが懸命に食器を洗っている。

「よし、全部食べたな、合格！」

和人の食器に食べ残しがないのを見て、おやつさんがこっと笑った。

和人は鉄平の部屋のドアをノックした。

「鉄平、起きてるか？」

反応がない。

もう一度ドアをノックしようとしてぶしを挙げた時、勢いよくドアが開いた。

「やべっ！寝坊し、うわっ、何するんだ和人？」

鉄平の目の前に、歯を食いしばってぶしを振り挙げている和人の姿があった。

和人は振り上げた手で、白々しく自分の後頭部をかいた。

「・・・いやなに、ちよっと頭がかゆくて。」

「ふうん、それにしてもちよっと迫力があつたな。まあいいや、先に行つててくれ。俺速攻で飯食つていくから。」

「飯食つてる暇あるの？」

「食わなきゃ昼まで持たないんだよ、じゃあな！」

鉄平はそう言うと、パジャマのまま食堂へ走って行った。

和人は仕方なく一人で行くことにした。

鉄平のほかにも1年生は4人いたが、もう出てしまっているようで誰もいなかったからだ。

バス停に近づくと、やはり昨日の女の子がベンチに座ってこちらを見ている。

和人が目を合わせないように通り過ぎようとした時、その女の子は立ち上がった。

「あのう。」

「えっ？」

女の子を見た和人の顔は一瞬で真っ赤になった。

「私、大浦女子高の1年で中森ゆきといいます。」

ゆきと名乗るその女の子は、いきなり自己紹介をした。そしてじつと和人の目を見つめている。

和人は突然のことにびくりして目をぱちぱちと瞬いた。

（いきなり自己紹介なんて何のつもりなんだ。その後に続く言葉はないのかよ。）

「あのう、・・・あなたの名前は？」

「えっ？えと、橘和人。」

名乗る理由はなかったが、和人は反射的に答えた。

「橘和人さん、・・・よろしくね。」

「はあ、・・・よろしく。あ、俺急いでるから、じゃあ。」

和人はいたたまれなくなつて、学校の方へ歩き出した。

（いったい何だというんだ。何で話しかけてくるんだよ。どこかで会ったことがあるのか？）

和人は理由を知りたかったが、尋ねる勇氣はなかった。

（それにしても、・・・昨日見たよりは少しかわいい感じがしたな。）
和人の顔の紅潮はしばらく続いた。

第67話

学校へ着き、鞆から1時間目の教科書とノートを出している時、和人は大事なことに気がついた。

2時間目の体育で着るはずの体操服を寮に忘れていたのだ。

和人は、先生に素直に謝るべきか、もう一つの手段を取るべきか少しの間考えた。

（いいさ、Sのやつだって、時間を止めたんだ。）

和人は教室を出て、トイレへと向かった。

トイレのドアを開けると、偶然にもちょうど鉄平が出てきた。

「おっ、和人、さっきはすまなかったな。」

「いいさ。でもよく間に合ったな。飯全部食ったのか？」

「おお食った食った。食って着替えたら学校まで全力疾走だ。だてに県の記録は持っていないよ。たぶん道ですれ違った人には俺の姿は見えてなかっただろうな、ははは。ところで和人、例の女の子は今日もいたか？」

「それが・・・、うん、いた。」

「おっ、それで？何か変わったことはなかったか？」

鉄平の目が光った。

「実は、その・・・、名前がわかったんだ。」

「ど、どうやって？」

「・・・向こうが名乗って来た。」

「ええっ！なんで？」

「さあ、わからない。」

「わからないって、こっちから聞きもしないで勝手に名乗って来たって言うのか？」

「そうなんだ。」

「さっぱりわからねえな。おい、詳しく教えろよ。」

「後でな、もうすぐ授業が始まっちゃう。」

言いながら和人はドアを開け、トイレの中へ入った。

幸い中には誰もいない。

和人は学生服の二番目のボタンを外し、内ポケットに手を伸ばした。そしてその中に入っている携帯電話を取ろうとしたとき、急にトイレのドアが勢いよく開いた。

鉄平だった。

「名前は？名前だけ教えろよ。」

「確か、中森ゆきって言ったと思う。」

「中森・・・ゆき・・・か。」

そう言うのと鉄平はドアから手を離し、静かに去って行った。

ドアが閉まり、鉄平の足音が小さくなっていくのを確認した和人は、携帯電話を取り出した。

「STOP」ボタンを押す。

白く眩い光。

そして・・・時が止まった。

無音の世界は相変わらず気味が悪かった。

携帯電話の充電は、毎日欠かしてはいない。

寮へ引越した日に、近くのドコモショップで充電器を購入していたからだ。

和人は口笛を吹きながら御萩野寮へ向った。

寮へ着くと、寮の建物の脇にある犬小屋にクロベエの姿があった。小屋の中に横たわり目を閉じている。

（そうだ、あれをちよつと試してみよう！）

和人は、犬小屋の前に行って座った。辺りを見回す。

寮の窓からは死角になっており、道路からもブロック塀で視界が遮られている。

誰からも見られていない。

和人は携帯電話を取り出し、「STOP」ボタンを押した。

時が動き出す。

――和人のおいを瞬時に感じ取ったクロベエがパツと目を開け、起き上がるうとした。

その瞬間、和人はクロベエの肩口に手を当て、もう一度「STOP」ボタンを長押しした。

「ワン、ワン！」

クロベエがしつぽを振って和人に飛びついて来た。

「よしよし、びっくりしただろう？クロベエ。急に俺が現れたんだからな。それにしても・・・やっぱり思った通りだ。」

和人の実験は成功した。

時を止めた時に動くことができるのは、時を止めた本人だけだ。

だが、今のように誰かの体に触れたまま時を止めれば、その誰かも止まった時の中でいっしょに動くことができる。

クロベエは、無音の世界が気になるようで、耳をぴんと立てて辺りをきよろきよろしだした。

「大丈夫だよ、クロベエ。すぐに元の世界に戻してやる。」

和人はクロベエの首を左手でなでながらそう言っていると、右手の携帯電話の「STOP」ボタンを押した。

――時が再起動すると、またすぐに「STOP」ボタンを長押しした。

今度はクロベエから手を離して。

「これで3回時を止めたことになる。Sがびっくりするだろうな。」
和人はそう呟き、体操着を取って来ると、学校へ向って歩き出した。

学校へ着くと、和人は体操着を自分の棚へ置き、トイレの中へ入った。

そして「STOP」ボタンを押し、何事もなかったかのようにトイレから出た。

第68話

サッカー部の練習が終わり、和人は制服に着替えて英と一緒に部室を出た。

部室の外では、徹也と滝本雄一が二人を待っている。

この二人の組み合わせは和人の予想外だった。

徹也は滝本に「タッキー」というニックネームをつけるほど、すぐにうちとけたのだ。

滝本にしても、サッカー未経験者の徹也がアドバイスを求めてくるのを悪い気はしないだろうし、何でも教えたことをすぐにでき、いちいち感謝の言葉を言ってくる徹也の姿勢が気にいっているようだった。

「遅いぞ、女じゃあるまいし着替えに時間かけるなよ。」

「まあまあタッキー、怒らない怒らない。一番最後に出てきたから部室の掃除でもしていたんでしょ、なあ英。」

「もちろんだ、ただし俺じゃないけどな。」

「英は俺が一生懸命掃除しているのに、全然手伝おうとしないんだぜ。」

和人が口をとがらせながら言った。

その時だった。

ふいにフラッシュが和人を襲った。

当然他の3人にはフラッシュは見えていない。

和人は右手の甲で目を擦ろうとしたが、違和感を感じた。

なぜか右手はしっかりと拳を握りしめており、その拳の中に何かが入っている！

入っていたのは折りたたんである一枚の紙だった。

和人は他の3人に気づかれないようにその紙を広げてみた。

「知っているぞ。3回も続けて時を止めたな。S」
あの時と同じ筆跡だった。

紙も手のひらほどの大きさに千切られたノートの切れ端だ。
和人はきよろきよろと辺りを見回したが、近くには誰もいない。

「おい和人、こっちの方向に用事でもあるのか？」
英がニヤニヤしながら言った。

和人は寮へ行く道を通り越し、駅へ行く3人の後を歩いていた。

「いや、ちよつと考え事をしていて……。じゃあまたな。」
あわてて和人はそう言って、引き返した。

それから一時間後。

和人が寮の自分の部屋で勉強をしていると、誰かがドアをノックした。

ドアを開けてみると、鉄平だった。

「部活が終わってすぐ勉強するなんて、何を考えてるんだ？」

和人の机の上に教科書とノートが広げてあるのを見て、呆れたように鉄平が言った。

「中学の時から習慣さ。復習は帰ってからすぐにやる。風呂と晩ご飯が済んでからゆつくり予習をするんだ。」

和人が言い終わらないうちに鉄平は部屋の中に入って、ベッドに腰かけた。

「おつ、山口素弘じゃないか。お前ファンなのか？なかなかシブいな。」

部屋の壁には和人のお気に入りの大きなポスターが貼ってあった。

「陸上の練習は今終わったの？ずいぶん遅くまでやるんだな。」

和人は鉄平に椅子を向けて座った。

「サッカー部が早く終わりすぎるんだよ。」

「人間は長時間集中力を維持することはできない。だからだと練習したって逆効果だ。効果的な練習を合理的に短い時間でやることこ

そ、近代的な練習方法だ。」

「なにそれ？」

「サッカー部の監督の受け売り。全体練習は1時間半で終わって、その後個人練習を30分するらしい。体の調子が悪い時は個人練習をしないで帰っていいそうだよ。」

「へえ、徹底しているな。でも本当は監督が早く帰りたいからだったりして。」

「それはわからないけど、俺はいい練習だと思う。」

「ふうん、まあいいや。ところで1年生は何人入った？」

「12人。そのうちサッカー経験者は8人だ。」

「いいな12人もいて。陸上部なんかまだ4人だっというのに。ところで……。」

鉄平の声が少し上ずった。

やつと本題に入るようだ。

「今朝の話、よく聞かせるよ。」

「聞かせるも何も、今朝話した通りだよ。向こうが急に自分の名前を名乗って、その後に俺の名前を聞いたただけだ。」

「和人の名前を聞いた？で、教えたのか？」

「うん、別に隠す必要もないし。」

「それから？」

鉄平は腕組みをした。

「何もないよ。急いでたから『じゃあ』って言って立ち去った。」

「なんで？」

「ん？」

「バカだなお前。その子、えっと、ゆきちゃんっていったっけ？ゆきちゃんはお前のことが好きなんだろう？少しぐらい話をしてやってもいいじゃないか。せつかく勇気を振り絞って話しかけてきたって言うのに。」

「俺のことが好きって……。」

「あたりまえじゃねえか。そうじゃなかったら話しかけたりしないだろ、ふつう。」

「でも、俺あの子のこと知らないんだぜ。」

「向こうは知っていたんだよ。以前にどこかで会ったに決まってる。なあ和人、明日はちゃんと話をしろよ。緊張するって言უნなら、俺がついてやるから。」

「。。。。」

「わかったな！」

「。。。わかったよ。」

和人はふうつとため息をついた。

「じゃあ、俺は風呂にいくぜ。いいなあ、入学3日目でもう彼女ができるのか。」

鉄平は立ち上がりそう言うと、ニヤツと笑って部屋を出た。

「中森ゆき。。。か、どこで会ったのかな？」

言いながら和人はベッドに横になり、もういちどため息をついた。明日の朝彼女と会うつことを考えると気が重かったが、今まで味わったことがない不思議な気持ちに胸がときめいた。

第69話

朝になり、和人は鉄平と一緒に少し早めに寮を出た。

「ちくしょう、なんだか緊張するなあ、和人。」

「何でお前が緊張するんだよ。俺の身にもなってみろって。」

「わかってるよ、ま、言葉に詰まったら俺が助け船を出してやるからまかせとけ。」

鉄平は少しハイになっているようだ。

一方の和人は、顔が青白い。

二人が曲がり角を曲がるとバス停が見えてきた。

そしてそのベンチにゆきの姿を確認した和人の顔は、瞬く間に赤くなった。

（やばい。本当にいた！）

心の隅では、ゆきが今日そこにいないことを願っていたのだ。

「大丈夫だって、和人。俺に任せろ。」

「頼む・・・、任せた。」

追い詰められた和人は弱々しい顔で鉄平に哀願した。

ゆきとの距離が5メートルほどに近くなった。

「おはよう。」

鉄平がゆきに挨拶すると、ゆきは少しびっくりしたようだったが、

「おはよう。」

とにつこり笑って立ち上がった。

「君の家、ここ近くなの？あ、俺、安井鉄平っていうんだ。」

「安井・・・、鉄平・・・さん？えっ、あの短距離走の？」

以外にもゆきは鉄平のことを知っていた。

「え？俺のこと知っているの？うれしいなあ！」

鉄平は有頂天になった。

「私、県大会の決勝、見に行っただけですよ。大会新記録を出した時には、本当に鳥肌が立ちました。」

「え？見てたの？本当に？いやあ、照れるなあ。実はあの時、俺予感してたんだよね、レコードを出すってさ。あは、あは・・・。」

笑いながら和人の顔を移すと、鉄平は大事なことに気がついた。和人は笑っているどころか、顔がこわばっているではないか。

「それは置いといて・・・。えへん、中森さんは和人のことを以前から知っていたの？」

ゆきが和人の方を見る。

「いいえ。」

「じゃあ何で和人に話しかけたの？」

「お友達になりたいと思ったから。」

バス停には会社員のような大人が3人いたが、その3人にも聞こえるようなゆきの凜とした声だった。

「それって、和人のことが好きってこと？」

いきなり鉄平は核心をついてきた。

ゆきの目はしつかりと和人の目を見ている。

「わかりません。」

「え？」

鉄平が拍子ぬけしたような声を出した。

「でも、あなたとなら友達になれそうな気がしたんです。だから・・・、もしあなたさえよければ、明日二人きりで会っていただけませんか？」

「・・・。」

「バスが来ました。明日朝9時にここで待っています。」

「え？ちよつと・・・。」

やつとのことで声を発することができた和人であったが、ゆきは駆け込むようにバスに乗り込んでしまった。

「度胸あるなあ！」

走り去るバスを見送りながら、鉄平が感心したように言った。

「俺にはとてもまねできないよ。なあ、和人。」

真っ赤な顔の和人が、あつけにとられたように黙って頷く。

（信じられない……。明日二人きりで会おうなんて。そんな言葉、想定外だよ。）

和人はふうつと息を吐いた。

知らず知らずのうちに全身に力が入っていたのだろう、いろんなところの筋肉が張っている。

（でも、鞆を持つ手が少し震えていたし、バスに乗り込んだとたんにほっと溜息をついたようだった。ああ見えても彼女は一生懸命だったんだ。）

ゆきの女の子らしい一面に気づき、和人は少し安心した。

「で？明日来るんだよな、ここに？」

鉄平がニヤニヤしている。

「仕方ないだろ、来るよ。」

「ヒュ」。いきなりデートか！明日は俺は付き合わないんだぞ？大丈夫かな。」

鉄平が冷やかす。

「大丈夫。男の子だ。」

いつしか、和人の声は落ち着きを取り戻していた。

第70話

1時間目の授業が始まる前、和人は1年2組の廊下に徹也の姿を確認した。

「聞いたぞ、和人。お前もけっこう侮れないな。」

予想通り、徹也は教室に入ってくるなり大声で切りだした。

「なにになに？何のこと？」

英がくいつく。

徹也はにやにやしながら和人の机に腰かけた。

「英に話してないのかよ、和人？」

「・・・。」

和人がひきつった顔で頷くと、

「実はな、英。」

徹也は和人の顔を見やりながら、英の耳元に顔を近づけ、「ごそごそ」と話した。

「うそだろう、おい！」

予想通りの英の反応だった。

いつせいにクラス中の視線が集まる。

「和人が・・・、んぐ、もが。」

和人はあわてて右手で英の口をふさいだ。

クラス中に暴露されるのは絶対に阻止しなければならぬ。

「おい、英！もし言ったらわかってるな！」

必死の形相でにらまれた英は、おとなしく首を縦に振った。

そして口から和人の右手を外すと、

「お騒がせしました皆さん、何でもありません。」

と、両手をあげニコニコしながら言った。

ほっと息をつく和人。

だが英は一呼吸置いて続けた。

「橘和人君に彼女ができただけです！」

ガタンツという椅子の音とともに、和人と英が同時に立ち上がった。真っ赤な顔の和人。

そして英は・・・、一目散に逃げ出していた。

この日の休み時間は、クラス中の男子が代わる代わる和人を取り囲み、冷やかした。

そして和人の見事なまでの赤面症と、英のひょうきんさが、誕生したばかりでぎこちなかったクラスの雰囲気を変えた。

「大体話がつかめたぞ。」

昼休みがもうすぐ終わるという頃、英は自分の席につき、後ろを振り向いて言った。

英は、和人が自分から全く話そうとしないため、休み時間の度に鉄平に詳しい話を聞きに行っていたのだ。

「で、どうなんだ？ 和人。ゆきちゃんに惚れたのか？」

英は和人に気を使い、小声で話した。

「まだそんなんじゃないよ。はっとするほどの美人でもないし、どんな性格かもわからないんだぜ。」

「でも、ある程度直感でわかるだろ？ 相性がいいかどうか。」

「わ・か・り・ま・せ・ん。」

「ちえっ、早く見てみたいな、ゆきちゃんを。・・・そうだ！ 和人、明日のデートは海中公園にしたらどうだ？」

「海中公園に？ なんで？」

「俺と千波が偶然そこでデートしているからさ。できれば2時くらいに来てくれるとばっちり会えるんだけどな。」

「ふーん、考えとくよ。」

和人はまんざらでもないように答えた。

ガラガラッ。

ドアが開き、数学の教師が教室に入ってきた。

放課後になり、サッカーの練習が始まった。

今日は監督が来れないとあって、練習内容はキャプテン田中が他の3年生と話し合って決めることになっていた。

そして練習の最後に、田中は1年生対2年生のミニゲームを提案した。

「いいか、2年生がもし負けるようなことがあれば、罰として一週間練習前の準備をしてもらう。ま、今日は矢島も来ていることだし、負けることはないと思うがな。」

練習前の準備は、ゴールの移動とボールの空気入れ、さらにラインを引いたりコーンなどその日に使用するものを運搬する。

普段は1年生がやっていることだ。

「いいつすよ。」

矢島という2年生が低い声で田中に言った。

この矢島という男、ファッションなのかただずばらなだけなのかわからないような、ボサボサの髪型をしている。

そして、目つきが鋭く近寄りがたい雰囲気を漂わせていた。

ミニゲームは8人对8人の15分ハーフですることになり、滝本が1年生のポジションを割り当てた。

その結果、滝本がワントップのフォワード、中盤に英、ディフェンダーの中心は和人、初心者の徹也は控えだった。

「キャプテンはあんなふうに言ったが、やるからには勝とうじゃないか。」

高校初めてのゲームができるとあって、滝本ははりきっていた。

第71話

「だめだな、これじゃあ。防戦一方だ。」

ゲーム開始後5分が経過し、和人は前を歩く英に声をかけた。

「そりゃそうだろ、実力の差だよ。」

英はそう言った後、和人の耳元でこう囁いた。

「それに、まぐれで勝っちゃったら2年生から恨まれるんだから、3点差ぐらいで負けとこうぜ。ここで意地出したって何の得にもなりやしないんだから。」

英は和人の肩をポンと叩いて笑った。

（そういうことか。どうりでいつもの英の動きじゃないはずだ。でも、やられっぱなしっていうのはいやだな。）

だが、そう思う和人の気持に反して、ひっきりなしに2年生は攻めてくる。

「おい園山！お前簡単に抜かれすぎるぞ、もっと追えよ！」

滝本が少しイライラしてきたようだ。

「悪い悪い、ディフェンスはどうも苦手なんだ。それよりタッキー、俺がボールを取ったらディフェンスラインの裏を狙って走ってくれ。」

英は悪びれる様子もなく、逆に滝本に注文をつけた。

「ディフェンスラインの裏だって？このコートの狭さじゃ無理に決まってるんだろ。」

滝本はため息をつき、両手を横に広げて天を仰いだ。

（あの人は、相当うまいぞ。）

和人の視線の先には矢島がいた。

コートの中を縦横無尽に走り回り、何度もチャンスを作っている。ボールテクニクは2年生の中でも群を抜いているようだ。

だがそれよりも、気迫を前面に出して攻めてくる威圧感がすごい。これだけ攻められていて得点をゆるしていないのは、1年生チームがついているとしか言いようがなかった。

「おい、そろそろ点を入れようぜ。」

パスをもらった矢島が2年生にはっぱをかけた。

低いがよく通る声だ。

その矢島に、英が抜かれた。

和人がフォローに行く。

矢島は巧みなステップでフェイントをかける。

「！」

和人は抜かれそうになったが何とか食らいつき、肩で矢島の肩を押した。

「うおっ！」

矢島はバランスを崩し派手に転倒した。

反則の笛はならない。

すぐに1年生の味方がそのボールを蹴りだした。

「この野郎、やってくれたな！」

体についた泥を払いながら、矢島が和人を睨みつけた。

「いや、その・・・。」

和人はしどろもどろだ。

「ビビってんじゃねえよ。」

矢島は吐き捨てるようにそう言うと、ボールをキープしている味方の方へ走って行った。

「やっちまったな、和人。・・・俺は知らねえぞ。」

和人の背後から小さな声がした。

徹也だ。

徹也は両手で自分の口を覆い、恐怖の表情で和人を見つめていた。その隣で、もう一人の控えの1年生が徹也を見て爆笑している。

（はいはい、もうどうにでもなれだ。）

「橘、行つたぞ！」

滝本の声がして前を向くと、2年生の一人がシュートを打とうとしていた。

和人があわててシュートコースをふさぐ。

だが一瞬遅く、ボールはゴールポストに吸い込まれた。

とうとう均衡は破られた。

そして、さらにその3分後にもう1点入れられ、前半の15分が終了した。

「ぜんぜん俺のところにボールが来ないんだけど！」

コートチェンジのため移動している英に向つて滝本が口を尖らせた。

「まあまあタツキー、そんなに熱くなるなよ。気持ちよく2年生に勝たせてやるうぜ。」

「何？お前、わざと手を抜いてたのか？」

「しつ・・・、声がでかいよ。考えてもみろつて、間違つて勝ちでもしたら、2年生に睨まれるぞ。」

「そんなこと言ってるから強くなれないんだ。実力に学年なんて関係ないだろ。もういい、わかった。俺が中盤をやる。」

滝本の実力なら、2年生が相手でも簡単にフェイントで抜くことはできるだろうが、それでは2年生から反感を買う恐れがある。

滝本を孤立させるわけにはいかない。

英はしかたなく妥協案を出した。

「まあ待てつて。生意気だつて思われちゃ、実力があつたつてレギュラーにはなれないぞ。・・・わかったよ。1点だけ、いや2点取らせてやる。だから前線で待つてろ。そのかわり2年生にあと1、2点はくれてやるぞ、いいな。」

「ずいぶん自信があるみたいだが、そううまくいくかな。あの矢島つて人はかなりできるぞ。」

「北高を倒すんだろ？それには俺の存在が不可欠だつてことを教え

「てやるよ。」

後半開始の笛が鳴った。

第72話

「1点目はすぐにいただく。チャンスはそうないからな、ディフェンスラインの裏をつけよ。」

小さな声で言いながら、英がキックオフのボールをチョンと蹴った。「パスが出せたらな。」

ボールを受けた滝本は、英にボールを返し前線へと走る。

二人の2年生がすぐに英を囲んだ。

「英こつちだ。」

右手から和人が上がってきた。

（おつ和人のやつ、痺れを切らしてでてきたな。いいぞ。）

すかさず英が和人にパスを出す。

すると、マークについていた2年生が足を出して、パスカットした。

「チャンスだ。後半1点目をもらうぞ。」

矢島のかけ声とともに、2年生が一気に攻め上がってきた。

和人があわてて自陣のゴール前に走る。

左サイドからふわつとしたボールがゴール前に上がった。

「まずい、藤村！」

和人が叫んだ。

1年生の長身ディフェンダー藤村が、2年生と空中のボールを競り合う。

一瞬早く、藤村はボールに触れることができた。

ヘディングでクリアー。

しかしそのボールは運悪く矢島の前へはねていった。

矢島が胸でトラップ。

シュートの態勢をとった瞬間、脇からスーッと出てきてボールを奪った者がいた。

英だった。

英はすぐさまドリブルで上がりながら、滝本の姿を探した。

矢島が後を追う。

英の前方から2年生が二人詰めてきて、英はドリブルのスピードを落とした。

滝本は前に出るタイミングを計っている。

（こいつ前ばかり見てるじゃないか、足元が隙だらけだぜ。）

矢島がボールを奪おうと英の前に出てきた時、その動きを予測していたかのように英はボールを引いて踵で方向を変えた。

一瞬矢島が横に振られる。

そして滝本の動き。

――最終ラインの選手に対してフェイントを一つ入れた。

（今だ！）

英が前方へ強いボールを蹴った。

そのボールは前を塞いでいた選手の股間を抜け、一直線に滝本へ渡る。

ボールを受けた滝本は難なくキーパーをかわしゴールを決めた。

1年生とコートの周りでゲームを見ている3年生から歓声が上がった。

「おっ、点を取られたぞ2年。2対1だ、やばいんじゃないか、矢島。」

「今のはまぐれっすよ。すぐに3点目を入れて突き放しますから。」
キャプテン田中の冷やかに、矢島が少しむっとして言った。

「もっと喜べよ、見事なゴールだぜ。」

自陣に戻ってくる滝本に、英が言った。

英がいうとおり、滝本は点を取ったというのに全くうれしそうな表情を見せなかった。

「あそこでボールを受けたら決めて当然だろ。それにしてもあのパス、かなり偶然ぽかったぞ。」

「だろ？あんなに見事に決まるとはな。とにかく1点は入った。次の1点は向こうが追加点を入れた後だ。」
そう言うとき英は後方に下がって行った。

滝本はじつと英の後姿を見ていた。

（あのパスを出すタイミング、本当に完ぺきだった。まるで俺の動きを予測していたかのようだ。あれが偶然でなく狙って出したパスだとしたら・・・、まさかな、まぐれだ。）

第73話

キックオフと同時に、また2年生の怒涛の攻めが始まった。

和人は孤軍奮闘の活躍で、何度も味方の危機を救う。

「和人、そんなに頑張らないでいいって。」

英が駆け寄ってきて囁いた。

「わかってるけど、手を抜くっていうのはどうもできないんだ。それにこれだけ攻められればいやでも点は取られるよ。」

「だといいんだけどな。タッキーにあと1点入れさせてやらないといけないんだ。そのためには2年生に点を入れてもらわないと。な、頼むよ和人、力を抜いてくれ。」

英は手を合わせて頼んだ。

周りから見れば、和人の活躍に感謝しているように見えたに違いない。

その願いが通じてか、後半7分でようやく2年生に3点目が入った。

「おい、本当にもう1点入れさせてくれるんだろっな。」

センターサークルにボールをセットしながら滝本が言った。

「まかせとけて、お前こそ俺のパスに反応しろよ。」

そう言いながら英はボールを軽く蹴って後ろに下がった。

あくまでも英は中盤からやや下がり目でプレーしたいらしい。

滝本がドリブルで切り込む。

鮮やかなフエイントで一人を抜くと、3年生から「おっ」という歓声が上がった。

だがすぐに2人目、3人目が詰めてきた。

「よし、囲め。」

矢島も近寄って来て、滝本の動きは封じられた。

パスを出す余裕もない。

そしてボールは奪われた。

「なかなかやるようだが、一人だけじゃ攻めきれないぜ。」
捨て台詞を残し矢島は攻め上がった。

「タツキーとコンビプレーで攻めていけばいいのに。」
引き過ぎる英に、和人が言った。

「目立つのはタツキーだけでいいさ。まだ入部して3日目だぜ、先輩を敵に回したくないよ。ほらおいでなすった。」

中央突破を狙って2年生がパスを使いながら上がってきた。
藤村の長身を警戒して低いボールでパスをつないで来る。

「和人、ボールを奪ったら俺にパスだ。」

「わかった。」

英がマークに着き、和人がパスコースをふさいだ。

英が抜かれればキーパーと1対1だ。

しかも矢島が追いついてきた。

英は矢島を警戒して、矢島の方に体を少し移動させる。
その隙をついて、敵は英の逆サイドを抜きにかかった。

（ひっかかった。）

そこにはいつのまにか和人の姿があった。

中学の時から試合でピンチになった時によく使っていた二人のコンビプレーだ。

和人はボールを奪うとすかさず前を走る英にパスを出した。

ボールを受けた英はドリブルで進みながら前方を見た。

先ほどと同じパターン。

滝本がディフェンスの裏を狙って、何度もフェイントをかけながら飛び出すタイミングを計っている。

（ここだ！）

滝本が手を挙げた瞬間に、英は縦にふわっとしたボールを蹴りだした。

少し大きいんじゃないかと、そこにいたほとんどの者が思ったが、

滝本は相手のキーパーよりも先にボールを触った。
そしてその瞬間、キーパーは抜かれていた。

またしても無人のゴールに滝本がシュートを決める。

「風に戻されたか。2年にはアンラッキーだったな。」

キャプテンの田中はそう解説した。

だが、滝本の顔には先ほどと同様に笑顔はなかった。

（アンラッキーだって？とんでもない。キャプテンにはバックスピンをかけたあのパスがわからなかったのか？しかもまたドンピシャのタイミングだ。・・・あいつ、いったい何者なんだ？）

ゲームはその後も2年生が押し気味で進んだ。

滝本も英も点を取ることは全く考えていない。

2年生がもう1点入れるか、このまま3対2で終わるかのどちらかだと誰もが思った。

だが、終了間際に思わぬ展開が待っていた。

それは和人のロングシュートだった。

地を這うような強烈なシュートがゴールを見事にとらえた。

3対3の同点。

そして終了のホイッスル。

うおーっという声が3年生から上がる。

2年生は呆然とゴールの網にかかっているボールを見つめた。

1年生からも喜びの声は聞こえなかった。

不思議な空気がコートを漂っていた。

「なんてことをしてくれたんだ、和人。俺は知らねえぞ。」

英がすれ違いざまに和人にぼそつと言った。

「えっ、そんな・・・。だって同点じゃないか。勝ったわけじゃないぞ。」

「さあな、確かに引き分けの場合のことは決めてなかったけど、こ

の雰囲気は・・・。」

「まさか、PK戦？」

「まさか・・・な。」

誰もがキャプテンの言葉を待っていた。

田中は周りを見渡し一つ咳をすると大きな声で言った。

「引き分けだな、PK戦は無し。危なかったな2年生。」
和人が大きなため息をついた

第74話

翌日、土曜日の朝9時。

和人は昨日ゆきと会ったバス停に来ていた。

バス停には和人のほかベンチに三人座っていて、後方で立っている人が二人いる。

ゆきの姿はまだ見えなかった。

バスが一台、バス停に止まった。

そして、バスの中央付近の窓が開いたかと思うと、和人に向って声が発せられた。

「早く乗って、早く。」

ゆきの声だった。

「え・・・？」

和人はびっくりして目をぱちぱちと瞬いた。

「いいから早く！バスが出ちゃう。」

和人はあわててバスに飛び乗った。

バスの中はガラガラだった。

ざっと見渡した限りでは、ゆきのほかに5人ほどが乗っているだけだ。

ゆきは歩いてくる和人をにこにこしながら見つめていた。

だがいつもの大きな眼鏡でなく、ごく一般的な形の細い眼鏡をかけている。

そして赤いチェックのキャスケット帽を頭に乘せていた。

和人はゆきが座っているシートの横に來ると、意を決してゆきの隣にちょこんと座った。

「おはよう。びっくりしたでしょ。」

「ん・・・、うん、びっくりした。」

和人の顔はいつものごとく、真っ赤になっていた。

和人もそれが十分に分かっていて、一生懸命心を落ち着かせている。だが、なかなかうまくいかない。

しかも二人掛けのシートに座れば、いやでも腕やひざがゆきの体に触れてしまう。

和人は心臓の鼓動がゆきに聞こえるのではないかと心配した。

「なんか、感じが違うね。」

ちらつとゆきの顔を見た後に、顔をそむけながら和人が言った。

「どんなふうにな？私の格好、おかしい？」

「いや・・・、ぜんぜん、おかしくない。眼鏡が違うし、その、なんていうか・・・。」

「かわいい？」

ゆきが少し身を乗り出して和人の目を見つめた。

和人は目をそらしながら、「うん。」と頷いた。

「なんだが無理やりかわいって言わせたみたいね。」

ゆきは屈託のない笑顔で首をかしげた。

「デートをしているのをクラスメートに見られたらちょっと恥ずかしいじゃない。眼鏡を代えれば、少しは別人に見えるかなと思って・・・。」

「ところで、あの・・・。」

和人は最も気になっていることを聞いた。

「これからどこに行くの？」

「遊園地。このバスの終点から歩いて10分で行けるわ。・・・ダメ？」

「べ、別にいいけど。このバスなら海中公園っていう手もあるよね。」

「私的にはにぎやかな方がいいんだけど、橘君がどうしても言うんなら海中公園でもいいわよ。」

「いや、いいよ。遊園地にしよう。俺もそっちの方がいいような気

がする。」

英と千波がこっそり和人たちを観察する様子が、和人の脳裏に浮かんだ。

しかも、ゆきから見えないような位置で『頑張つて』と手を振る千波の姿まで……。

千波は和人にとって、未だに大きな存在だった。

英は和人の無二の親友であり、英と千波は誰が見ても似合いのカップルだとわかっていても、心の底では英に嫉妬している。

そして二人が別れた場合のことを考えたこともある。

自分はなんて小さい人間なんだと思う。

だが、左のほほに笑窪を作つて笑う千波の姿を想像すると胸が高鳴る。

それはどうしようもなかった。

だから、ゆきのことを好きになつて行けば千波への思いが薄れていくのではないかと、和人はひそかに期待していた。

第75話

「ごめんなさい。一方的にデートの約束なんかして。もしかして何か予定があつたんじゃない？」

「ううん。どうせ今日は部活休みだし。全然大丈夫・・・だよ。」

「部活つて？何をしているの？」

「サッカー。中学の時からしているんだ。」

「サッカー？本当に？へえ、そうなんだ。」

ゆきはなぜか驚いたようだった。

「どうして驚くの？」

「えっ、別に。安井さんと一緒にいたから陸上部かなって勝手に想像してただけ。そう、サッカー部なの。」

何を考えたのか、ゆきは楽しそうだった。

「でも、なんで俺？俺のこと知らないのに、なんで俺を選んだの？」
和人は今日のうちにどうしても聞こうと思っていたことを、思い切つて聞いてみた。

ゆきは少し考え込んで言った。

「そうよね、気になって当然よね。でも・・・ごめんなさい、今は言えないわ。」

「今は・・・言えない？」

「うん、言える時が来たら言っわ。それは10日後かもしれないし、そうね、もしかしたら4年後かもしれないけど。」

和人はそれ以上聞くのをやめた。

どんな理由があるのか知らないが、ゆきは聞いて欲しくないようだった。

それに自分を選んだことにはちゃんとした理由があつたということ
がわかつて和人は少し安心していた。

誰でもよかったというわけではなかったのだ。

「中森さんは？何か部活やっているの？」

和人は話題を変えた。

女の子と話するのは苦手だったが、黙ったままこのように接近して座っているのは耐えられなかった。

和人が話題を変えてくれたことでゆきは少しほっとしたようだった。「部活はしていないの。中学の時は陸上部だったけど、あんまり才能ないみたいだし、それにお家の手伝いやなんかで忙しいから。」

「お家の手伝いって、何してるの？」

「別に、普通よ、家事手伝い。働かざる者食うべからずってね。私のことはいいから、橘君のこといろいろ教えて。そうね、まずは誕生日から。」

ゆきは次から次に和人に質問をしてきた。

家族のこと、友達のこと、担任の先生のこと、サッカー部のこと、中学校の思い出など。

だが、ゆき自身のことについては、和人がいくら尋ねてもほとんど答えようとはしなかった。

すぐに話をはぐらかしてしまう。

何か特別な事情があるのだろうか。

そうこうするうちに、バスは終点に着いた。

「実は私、遊園地は初めてなの。」

バスから降りてゆきが言った。

「全部の乗物に乗りたくないな。ねえ、いいかしら？」

「いいけど、ジェットコースターには俺乗らないからね。」

「どうして？」

「どうしてって、・・・怖いから。」

「ええ？怖いからいいんじゃない。絶対乗ろう！ね、橘君の恐怖の表情を見てあげるわ。そうだ、橘君カメラを持ってきていない？」

「うん、残念ながら持ってきてない。」

「そう、ドジったわ。誰かに借りて来とけばよかった。」

ゆきははしゃぎすぎるほどはしゃいでいた。

遊園地に着くとさらにパワーが増した。

そして言ったとおりすべての乗物を片っ端から乗って行った。

ジェットコースターも、嫌がる和人の手を引っ張り並んで座った。

ゆきは小学生の女の子ようにはしゃぎまわった。

「今日は本当に楽しかったわ、ありがとう。」

いつしか時刻は午後5時を過ぎていた。

「俺も楽しかった。」

「でもいっぱいお金を使っちゃったわ。しばらくはおとなしくして
いなくちゃ。」

ゆきは財布をポシェットから取り出し、中身を確認した。

そして財布を戻そうとしたときに、和人はポシェットの中にデジカ
メのようなものを発見した。

「あれ？今のデジカメじゃなかった？」

「え？」

ゆきの動きが止まり、狼狽のような表情が一瞬浮かんだ。

「あ、そうか、ママのデジカメが入っていたんだ。でもどっちみち
メモリがいっぱいで使えなかったはずだわ。」

ゆきはそう言いながら、和人の顔を観察するように見つめた。

「そう、別にいいんだけど、ただデジカメにしてはかなり薄いよう
に見えたな。」

「もうすぐバスが出るわ、急ぎましょう。」

ゆきはバス乗り場の方へ急ぎ足で歩きだした。

和人があわてて後を追う。

（なんだよ、本当に訳がわからない。中森さんって謎だらけじゃな
いか！）

釈然としない気持ちで和人の心を覆っていた。

第76話

日曜日のサッカー部の練習は午前9時から始まる。

和人達1年生は、いつも練習が始まる30分前には部室にきて、練習の準備をしなければならない。

和人は8時20分に部室に到着した。

「遅いぞ和人、もう1年生はお前以外みんな来てるっていうのに。いや、そんなことはどうでもいいんだ。何で昨日海中公園に来なかったんだよ。俺と千波は1時から5時くらいまでずっと待ってたっていうのに！」

「ごめん英、昨日は遊園地に行ったんだ。にぎやかな方がいいって彼女が言ったから。」

英と徹也はすでに練習着に着替えて、部室の前に立っていた。

そして部室に入ろうとする和人の行く手を遮り、小さな声で英が聞いた。

「で？どうだった？」

「どうって、楽しかったよ。彼女もすごく楽しそうだったし。ただ、いまいち彼女のことがわからないんだ。あんまり自分のことはしゃべらないから……。」

「ふーん、でもまあ、最初のデートとしては悪くないっていうことだろ？」

「うん、俺にしちゃ出来だと思う。」

「そうか、それならいいじゃんか。頑張れよ和人、いつかダブルデートしようぜ。」

「そうだな、そうなればいいな。」

言いながら和人は、明日の朝にバス停でゆきと会う場面を想像した。（そうだ、少しでも長い時間話せるように、明日は早めに寮を出るとしよう！）

「おっと、急いで着替えないと先輩が来ちゃう。」

和人ははっとして部屋に駆け込んだ。

「超オクテのはずの和人が、意外だなあ。」

和人の後姿を見送りながら徹也が首をかしげた。

「でも……。」

「ん？でもなんだ、英？」

「徹也、和人には内緒だぞ。あいつをがっかりさせたくないから。」

英はげんそうな顔をしている徹也の目をじっと見ながら続けた。

「高校卒業後の夢を見たことがある。和人やお前は大学生になっているんだ。俺は……、フリーターをやっていた。3人が集まって中学校や高校の時の話で盛り上がるんだ。で、もちろん恋人の話なんかもな。和人は……、『赤面症の俺には彼女なんて縁がないんだ！彼女いない歴18年になっちまった！』って頭を抱えたんだ。」

「でもゆきちゃんとデートしたぜ？」

「デートはしたけど、まだ和人の彼女になったってわけじゃない。

おそらく、だめだな。もしかしたら2度目のデートすらないかもしれない。」

「予知夢通りにいかないってことはないのかな。」

「当たるから予知夢っていうんだ。和人には気の毒だけだな。」

「……。」

徹也は、予知夢の話を中心に信じていないが、これまで英が予言することは信じられないほどその通りになった。

特にサッカーのゲームはよく夢に見るようで、ワールドカップ予選のゲーム結果をよく当てた。

しかもどの選手がどうやって得点を決めるか、ということまでこと細かく言い当てる。

だが結果が分かっているゲームほどつまらないものはない。

だから最近、英からゲーム結果を絶対に聞かないようにしていた。

（予知夢を超えることはできないのかなあ。未来を変えることは、できないんだろうか。）

英がドリブルしながらゴール前へ走って行く。
英は北高を倒してみせるといった。

だが、西城が北高に敗れる夢を見たとしたら、英はきっぱりとあきらめるんだろうか。

自分や和人もその予言を受け入れるだろうか。

（ちえっ、知るかよそんなこと。だいたい俺がそんなに熱くなるわけないだろ。サッカーに青春をかける？）

徹也は自分の問いかけに声に出して答えた。

「ありえねえ……。」

その時、2年生の矢島がバッグを肩にかけて部室の方へ歩いてきた。

「おい、橘はいるか？」

「はい、今部室で着替えています。」

そう言った後、徹也は急に悪い予感がしてきた。

「そうか、お前ちよつと橘をつれて来い。」

「え？あ、はい。」

「ぐずぐずすんな、部室じゃ話しくいからよ。」

徹也はあわてて部室に駆け込んだ。

矢島の鋭い目つき、ボサボサの頭、低い声。

危険な空気がピリピリと肌を刺すように感じる。

「おい、和人。外で矢島さんが呼んでるぞ。」

徹也は小さな声で和人に言った。

「え、矢島さんが？」

和人は着替えを終えてスパイクを履いているところだった。

「気をつける、一昨日のミニゲームのことかもしれないぞ。」

シオルダーチャージで矢島を突き飛ばした光景が和人の脳裏をよぎった。

「まさか・・・。」

和人は恐る恐る部屋を出た。

第77話

「ちよつと裏に來い」。

矢島は部室から出てきた和人を見ると、部室の裏に呼んだ。

「はい。」

和人の顔から一瞬に血の氣が引いた。

（やっぱりシヨルダーチャージだ……。それと最後のロングシュート。）

和人は矢島の後を恐る恐るついて行つた。

その光景をグラウンドの中から英が見ていた。

（ちよつと厄介だな。3年になるまでは大人しくしておこうと思つていたのに。）

英は足元のボールをゴールに蹴りこむと、部室の裏へ向う二人を追つた。

「一昨日は恥をかかせてくれたな。」

部室の裏で、矢島が口元をゆがめて冷やかに笑つた。

「いえ、そんなつもりは……。」

「まさか1年坊に突き飛ばされるとはな、俺もなめられたもんだ。」「そう言いながら、矢島はちらつと和人の後ろに目をやった。」

「お友達が心配して見に來たぞ。」

矢島は表情を変えず、和人が後ろを見るように、あごをちよつと上げた。

振り返ると、英と徹也が少し離れた位置でこちらを窺うように立っていた。

「3対1か、それでも俺は負ける氣がしねえな。やってみるか？」
矢島が和人を睨みつける。

「……。」

「びびってんじゃねえぞ。まったく・・・、サッカーのときは体を張ってプレーするくせによ。」

矢島の顔が少しゆるんだ。

笑い方がさつきとは違つてとげとげしくない。

「まあいい。ところで、お前を呼びだしたのは昨日のゲームのことじゃない。ボールを取られた腹いせにそいつを殴るなんて、そんなかつこ悪いことができるか。」

矢島は部室の壁から3mほど離れたブロック塀にもたれ、和人にもつと近づくように手招きした。

和人は緊張をまだ解いていない。

だが、一昨日のことではないとすると、矢島は何を言おうとしているのだろうか。

和人は矢島の次の一言を待った。

「中森ゆきのことだ。」

「ひえ？」

矢島の意外な言葉に驚き、和人はすつとんきような言葉を発した。

「ぶつ、はははは、なんて声を出してんだお前は。そんなにびつくりしたか？」

「いえ、その、何で・・・。」

「何でゆきのことを知っているのかつて？ゆきは俺の妹だ。いつでも血のつながりはないけどな。」

「妹、ですか？」

和人にとつてそれは二重の驚きだった。

「昨日お前とゆきはデートしたんだろ？知り合つたばかりですぐにデートするなんて、お前も結構ず太い神経してるな。」

「いえ、それはゆきさんが強引に誘つたから・・・。」

「ゆきが？」

矢島は少し驚いたような顔をした。

「へえ、ゆきが？そういやあ、あいつも最近性格変わったからな

あ。・・・それで？どうだ、ゆきのこと好きなのか？」

「ま、まだそこまでは・・・。それにゆきさんもまだ俺のこと好きってわけではないようだし。」

矢島がボサボサの頭を右手で掻いた。

「わっかんねえな、お前ら。好きでもないのにデートするなんてよ。でもまあ、一応お前とゆきは付き合っているってことだろうから、ま、ゆきのことよろしく頼むわ。そのかわり、お前が誰かにいちゃもんつけられたら、俺に言いに来い。ちょちょいと振り払ってやるからよ。」

そう言い終わると、矢島は英たちの方へ歩き出そうとした。

「ちよつと待って下さい。あの・・・。」

和人は意を決して矢島に尋ねた。

「矢島さんとゆきさんは、血がつながっていないけど兄弟って、どういうことですか？」

「恵みの園では、みんなが家族なんだよ。」

「え？」

「え？って、恵みの園のこと、もしかして聞いていなかったのか？やべえ、まずいこと言っちゃったかな。ゆきには俺が言ったこと内緒だぞ、いいな。」

矢島はしまったというような顔をして、和人を置いて歩きだした。

第78話

「恵みの園……」

和人は英と徹也の方に向かって歩いていった。

「今何か言ったか、和人？」

「ううん、何も。」

「矢島さん、何の話だったんだ？最悪の事態は免れたようだけど、俺と徹也は臨戦態勢に入ってたんだぜ。」

「わかつてる。でもそんな話じゃなかったよ。」

「じゃあどんな話だったんだよ。」

「うん……、中学の時のサッカー部の話とか、そんなどうでもいいようなこと。」

「何だそれ？そんなことわざわざ部室の裏に呼び出して言うことじゃないだろ？」

「そうなんだ。俺もよくわからない。」

英と徹也は首をかしげているが、とっさにいい作り話なんて出てくるはずがない。

和人はなんとかこれで押し通すしかなかった。

「それにしてもいや〜ビビったぜ、和人。矢島さん、すれ違いざまに俺たちの方に一歩足を踏み出したんだぜ、な徹也。」

「ホントにな、俺一瞬やられた！って思ったぞ。」

二人が別の話をしだしたことで、和人はほっと胸をなでおろした。

「で、ビビった俺たちの顔を見て矢島さん、ニヤツと笑ったんだぜ。」

「あの人相当ケンカ強いな。400戦無敗のこの俺をビビらせたんだから。」

「お前はヒクソンか！でもまあ、鼻の形がどことなく似てるような……。」

「うれしくねえよ、鼻がヒクソンに似てたって。」

「ねえ、ヒクソンって、誰？」

その和人の一言で急に辺りが静まり返った。

「相変わらずついて来ないな、和人。ヒクソンを知らなくても『ニクソンって誰？』っていうくらいの機転を利かせろよ。」

「いいっていいって英、和人はいつまでも和人のままでもいいんだよ。3人の中でまともなのが一人はいないとバカの集団って思われるんだから。」

「それもそうだ。あっはっは。」

英と徹也は笑いながらグラウンドの中へゆつくりと走って行った。

あの二人のような会話ができればどんなに楽しいだろうと、和人はいつも思う。

だがこればかりはどうにもならない。

感性というか、性格の問題だろう。

性格は簡単には変えられない。

和人は二人の後をゆつくりと歩いた。

恵みの園が、何らかの事情を抱えた子供のための施設だということは容易に想像できた。

ゆきはどのような境遇に育ったのだろうか。

ゆきの両親は生きているんだろうか。

恵みの園でゆきはいつたどのような生活を送っているのだろうか。そう言えば遊園地に来たのは初めてだとゆきが言っていた。

そしてとても楽しそうにはしゃいでいた。

きつと昨日のように楽しいこととは無縁の生活を送って来たに違いない。

和人はゆきの底抜けの笑顔の裏に隠れている悲しみを知ったような気がした。

もしかしたらあの日自分に声をかけてきたのは、今の生活にいたたまれなくなつて追い詰められた末の行動だったのかもしれない。

和人はゆきに無性に会いたくなつた。

ゆきのことをもつともつと知りたいと思つた。

（そうだ！会いに行けるじゃないか。しかもゆきに気づかれなくて会う方法がある！）

和人は不意に立ち止まって眉をひそめた。

「だめだ・・・。」

思わず声を發した。

そんなことをゆきが望むはずがなかった。

ゆきの私生活を覗くなんて、そんなことをやっていいはずがない。

和人の口から大きなため息が漏れた。

（明日、そして明後日・・・、いつでもゆきとは会えるじゃないか。そのうちゆきの方から話してくれるはずだ。それまで待たなきゃ。）

前方からサッカーボールがごろごろと転がって来た。

「和人、こつち！」

遠くで英が和人に手を振っている。

和人は助走をつけて思いっきり振りかぶつた。

「行け〜！」

ボンッ！という音とともにボールは英の頭を遥かに越えて飛んで行った。

第79話

御萩野寮に帰った和人は、すぐに食堂へ向った。

食堂にはいつもおかみさんかおやつさんのどちらかがいる。

和人がそつと食堂の中を覗くと、おかみさんが一人で食器を洗っていた。

幸いおかみさんの他には誰もいない。

「ただいま。」

「あら、和人君、お帰りなさい。」

おかみさんが顔をあげてにつこり笑った。

「部活で疲れたでしょう？ ゆっくりとお風呂に入ってきたら？」

「うん、ちよつと勉強をしてからね。それよりおかみさん、恵みの園って知ってる？」

「恵みの園？ もちろん知ってるわよ。西方町にあるキリスト教の福祉施設。身寄りのない子達がシスターと暮らしているわ。」

和人の予想とだいたい当たっていた。

「ふ〜ん、西方町って、どの辺りなの？」

「そうね、向こうにちよつと小高い丘があるでしょ、あのふもと一帯よ。だけど、どうして？ 誰か知りあいでもいるの？」

おかみさんは南側にある窓のカーテンを開け、指さした。

「えっ？ あんなに遠く・・・？」

その辺りは御萩野寮から2キロ近く離れている。

和人はちよつと眉をしかめて話し続けた。

「それで西方町には大浦女子高に行くためのバス停って無いの？」
言ってしまったから和人はすぐにしまったと思った。

おかみさんの目が急に輝きだしたからだ。

「大浦女子高？ まあ！ 話が読めてきたわ。和人君、さては気になる女の子がいるのね？」

おかみさんは自分の口を手で覆いながら、ちよつといたずらっぽく

ほほ笑んだ。

「いえ、そんなこと・・・。」

そう言っている和人の顔はすでに真っ赤になっている。

「隠さないでいいのよ、誰にも言わないから。うふふ、そうかあ、恋ね、恋なのね。いいなあ、青春まつただ中なんて、できることなら私も30年前に戻りたいわ。」

おかみさんは胸の前で手を組んで、窓の外の紫色の空をうつとりと眺めた。

「でも、こんなおばちゃんにも青春があつたって信じられないわよね、あつはつは！」

おかみさんが笑いながら振り向くと、和人の姿はすでにそこにはなかった。

（今の話だと、ゆきちゃんは近くのバス停からバスに乗らずに、わざわざ2キロの距離を歩いてきて、この先のバス停からバスに乗っていることになる。）

和人は自分の部屋に戻り、椅子に腰かけていた。

（なんでそんな無駄なことを？）

いつものように、和人の右手の指は左腕の傷をかいていた。

やがて、一つの考えが和人の頭に浮かんだ。

（もしかしたら、ゆきちゃんは自分が施設で暮らしていることを誰にも知られたくないんじゃないだろうか。そのためのカモフラージュ・・・。）

ゆきには秘密が多い。

それはきつと自分に自信が持てなくて、ありのままの自分をさらけ出すことができないからだろう。

その最大の原因が『恵みの園』にあると、和人には思えた。

「明日だ、明日。」

和人はわざと声に出して背伸びをした。

あれこれ考えても何も解決はしない。

ゆきと直接話をするだけでしか、ゆきの気持ちを理解することはできないのだ。

和人は机の上に、英語の教科書とノートを開いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3831w/>

T I M E

2012年1月7日23時51分発行